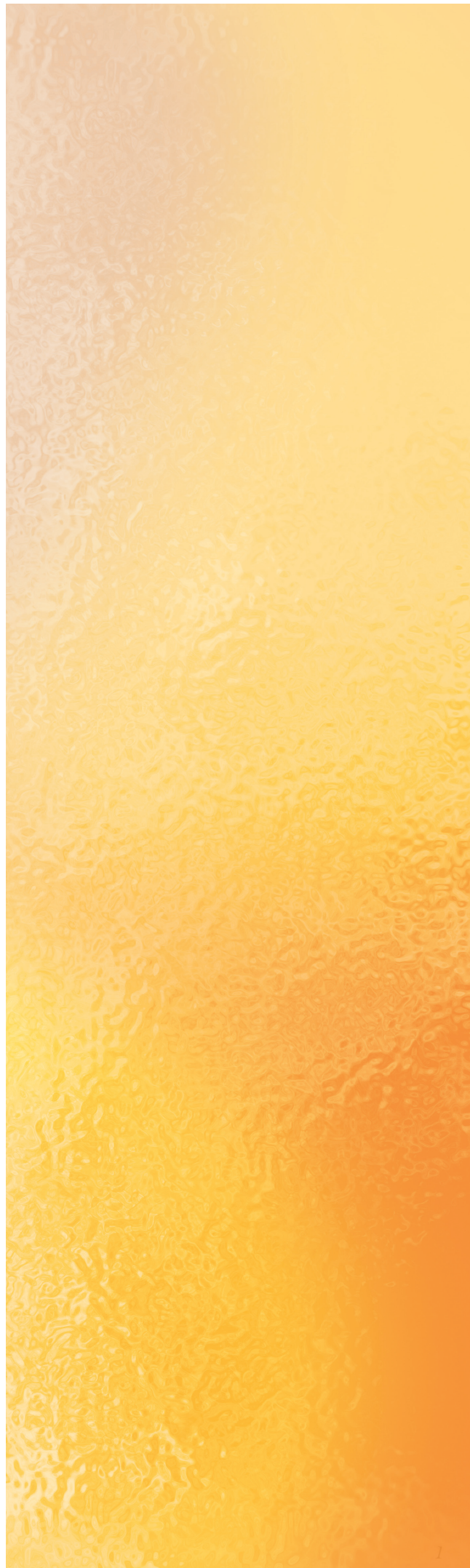


ACOM CO., LTD.



Annual Report 2019

2019年3月期



目 次

Annual Report 2019

連結決算概要	1
株主の皆さまへ	2
特集	5
Business Highlights	6
CSR活動	8
投資家情報 (2019年3月末現在)	10
第42期 有価証券報告書	11
【表紙】	13
第一部【企業情報】	14
第1【企業の概況】	14
1【主要な経営指標等の推移】	14
2【沿革】	17
3【事業の内容】	18
4【関係会社の状況】	20
5【従業員の状況】	21
第2【事業の状況】	22
1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】	22
2【事業等のリスク】	23
3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	26
4【経営上の重要な契約等】	42
5【研究開発活動】	42
第3【設備の状況】	43
1【設備投資等の概要】	43
2【主要な設備の状況】	43
3【設備の新設、除却等の計画】	44
第4【提出会社の状況】	45
1【株式等の状況】	45
2【自己株式の取得等の状況】	48
3【配当政策】	49
4【コーポレート・ガバナンスの状況等】	50
第5【経理の状況】	68
1【連結財務諸表等】	69
2【財務諸表等】	122
第6【提出会社の株式事務の概要】	141
第7【提出会社の参考情報】	142
1【提出会社の親会社等の情報】	142
2【その他の参考情報】	142
第二部【提出会社の保証会社等の情報】	143
監査報告書	
内部統制報告書	
確認書	

連結決算概要

	2015/3	2016/3	2017/3	2018/3	2019/3
【損益計算書関連】					(百万円)
営業収益	219,289	237,683	245,148	263,453	277,069
営業利益（損失）	14,073	15,516	(70,166)	80,942	57,607
親会社株主に帰属する当期純利益（当期純損失）	12,864	14,598	(72,187)	70,572	37,781

【貸借対照表関連 ¹ 】					(百万円)
総資産	1,190,368	1,175,063	1,228,930	1,275,957	1,301,908
有利子負債 ²	646,854	648,568	705,874	734,516	725,142
純資産	328,315	338,132	267,226	344,437	381,501

【一株当たり情報】					(円)
一株当たり当期純利益（純損失）	8.21	9.32	(46.08)	45.05	24.12
一株当たり純資産	199.53	206.42	159.58	206.12	227.35
一株当たり配当額	0	0	0	1	2

【財務指標】					(%)
ROE	4.2	4.6	(25.2)	24.6	11.1
ROA	1.1	1.2	(6.0)	5.6	2.9
自己資本比率	26.3	27.5	20.3	25.3	27.4
自己資本比率（総資産に信用保証残高を加算した自己資本比率）	15.2	15.0	10.6	13.0	14.2

(注) 1. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度に係る貸借対照表については、当該会計基準等を遡って適用した後の値となっております。

2. 有利子負債 = 短期借入金 + コマーシャル・ペーパー + 1年内返済予定の長期借入金 + 1年内償還予定の社債 + 社債 + 長期借入金

1. 免責事項

本資料の数値のうち、過去の事実以外のアコム株式会社の計画、方針その他の記載にかかわるものは、将来の業績にかかる予想値であり、それらはいずれも、現時点においてアコム株式会社が把握している情報に基づく経営上の想定や見解を基礎に算出されたものです。従いまして、かかる予想値は、リスクや不確定要因を内包するものであって、現実の業績は、諸々の要因により、かかる予想値と異なってくる可能性があります。かかる潜在的なリスクや不確定要因として考えられるものとしては、例えば、アコム株式会社を取り巻く経済情勢や消費者金融を取り巻く市場規模の変化、債務不履行に陥る顧客の割合、「利息制限法」に基づく上限金利を超える部分の返還請求等の発生件数および返還金額の変動、アコム株式会社が支払う借入金利率のレベル、法定制限利率が考えられますがこれらに限りません。

2. 百万円未満切捨て

3. %表示は四捨五入表示

株主の皆さまへ

株主の皆さまにおかれましては、平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

2019年3月期決算概要及び経営環境、通期計画、中期経営計画につきまして、以下のとおり、ご報告いたします。

代表取締役社長兼会長
木下 盛好



2019年3月期 決算概要

当社グループの業容は、信用保証事業は提携先行による全銀協の「申し合わせ」への自主的な対応により、残高が計画を下回りましたが、ローン・クレジットカード事業、海外金融事業は概ね計画を達成いたしました。また、業績は連結営業収益が5.2%増収の2,770億円となりましたが、利息返還損失引当金への追加繰入れにより、営業費用全体では、20.2%増加の2,194億円となり、営業利益は576億円、経常利益は582億円、親会社株主に帰属する当期純利益は377億円となりました。

中核3事業は安定的に成長しておりますが、利息返還損失引当金への追加繰入れにより、連結総資産に信用保証残高を含めた自己資本比率は14.2%となり、目標とする20%と乖離している状況が続いております。

これらの状況に鑑み、2019年3月期の期末配当は、当初予想どおり1円としました。

また、2020年3月期の配当につきましては、安定的、継続的な利益還元を実現すべく、中間配当は2円、期末配当は2円、年間合計で4円の増配を予想しております。

今後も、株主の皆さまのご期待に添えるよう、MUFGグループとの緊密な連携を図りつつ、持続的成長による企業価値の最大化と、広く社会に貢献する企業グループを目指してまいります。

株主の皆さまにおかれましては、今後とも一層のご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

アコムグループを取り巻く経営環境

当連結会計年度におけるわが国経済は、個人消費の持ち直しや雇用・所得環境の改善が続きました。今後も政府による各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待されます。しかしながら、3月の景気動向指数の基調判断が「悪化」に引き下げられるなど、注視する必要があります。加えて、海外経済の不確実性や金融資本市場の変動の影響など、わが国の景気を下押しする可能性も引き続き存在しております。

また、ノンバンク業態においては、市場規模が緩やかに拡大しております。一方、利息返還請求は着実に減少していますが、外部環境の変化等の影響を受けやすいことから、引き続き動向に留意する必要があります。

このような中、当社グループは、「一人でも多くのお客さまに最高の満足を感じていただき、個人ローン市場において社会に信頼されるリーディングカンパニーを目指す」という経営ビジョンのもと、ローン・クレジットカード事業、信用保証事業、海外金融事業を中核3事業と位置付け、個人ローン市場におけるシェアの拡大をはかるとともに、市場の健全な成長に貢献すべく努めてまいりました。

アコムグループの経営ビジョン

今後も、私たちアコムグループは、『一人でも多くのお客さまに最高の満足を感じていただき、個人ローン市場において社会に信頼される「リーディングカンパニー」を目指す』という経営ビジョンのもと、MUFGグループと緊密に連携しながら、経営基盤の安定性と次期成長に向けた最適資源配分を推進しつつ、ローン・クレジットカード事業及び信用保証事業の継続的な成長、海外金融事業の推進に積極的に取り組んでまいります。

「経営ビジョン」に込める3つのポイント		
1. 商売の原点である「顧客本位」の姿勢、すなわち、企業理念の「お客さま第一義」である、「一人でも多くのお客さまに最高の満足を感じていただきたい」という私たち従業員一人ひとりの意思。	2. ビジネスを展開する事業領域について、消費者金融専門、信販・クレジット、銀行という業態を問わず、「個人ローン市場」に重点をおき、経営資源を集中。	3. 「安心、信頼のブランドの醸成」をさらに進め、「社会に信頼されるリーディング・カンパニー」であると認められる、強力なブランドを確立。

2020年3月期 通期計画

2020年3月期においても、ノンバンク業態は、緩やかに拡大するものと考えておりますが、提携先行による全銀協の「申し合わせ」への自主的な対応やタイ王国における新融資規制の影響など、国内・海外ともに、引き続き経営環境が変化しております。

この経営環境の変化に伴い、2020年3月期における信用保証残高は緩やかな成長が続き、EASY BUYの営業債権残高は成長率の鈍化が続くものと予想しております。

連結の業容は、ローン・クレジットカード事業は前期比3.7%増加、信用保証事業は1.8%増加、海外金融事業はタイ王国における新融資規制の影響やBank BNPの連結除外を主因に18.9%の減少、業容全体では0.5%増加の2兆3,454億円を計画しております。

連結営業収益は、ローン・クレジットカード事業は前期比1.8%増収、信用保証事業は残高が緩やかに増加するものの、保証料率の低下を見込んでいることから1.2%減収、海外金融事業は4.9%減収、営業収益全体では0.6%減収の2,755億円を計画しております。

連結営業費用は、金融費用はアコム単体の良好な調達環境の継続などにより、前期比24.8%減少、貸倒関連費用、その他の営業費用は、それぞれ9.0%、4.2%の増加、また、利息返還費用は発生しない想定であることから、営業費用全体では、14.4%減少の1,879億円を計画しております。

以上の結果、営業利益は876億円、経常利益は879億円、親会社株主に帰属する当期純利益は755億円を計画しております。

前中期経営計画（2017/3- 2019/3）の振り返り

2019年3月期をもって前中期経営計画が終了し、本年度より新中期経営計画がスタートしました。

前中期経営計画の振り返りとしたしましては、ローン・クレジットカード事業は、お客さまに応じたホームページ表示の最適化やマスターカード発行機の増設に取り組みました。その結果、残高計画は達成、新客数は計画以上に獲得できるなど、一定の成果が得られております。

信用保証事業は、新規提携先の開拓を推進した結果、空白エリアであった山梨県、福井県、沖縄県における新規提携を実現することができました。その一方で、全銀協の申し合わせの影響を受け、信用保証残高は計画を下回るなど、課題も残されていると認識しております。

海外金融事業では、EASY BUYは、新融資規制への的確な対応やアプリを通じた融資・返済の推進などを実施した結果、3期連続で増収増益を実現するなど、連結利益への貢献度は年々高まっております。また、フィリピン共和国では、個人向け融資事業を開始しており、現在5店舗を展開しております。

以上のような取組みを推進した結果、信用保証事業においては、外部環境の変化により、残高が計画を下回りましたが、ローン・クレジットカード事業、海外金融事業は、概ね計画を達成いたしました。

新中期経営計画（2020/3- 2022/3）の概要

新中期経営方針は、「環境変化にスピード感をもって対応し、持続的成長と企業価値の向上を図るとともに、お客さまの期待を超えるサービスを創出する」といたしました。

新中期経営計画の主要数値目標につきましては、2022年3月期の営業債権残高は、ローン・クレジットカード事業1兆円、信用保証事業1兆3,054億円、海外金融事業1,914億円、合計では2兆5,000億円を目指します。

営業収益は、ローン・クレジットカード事業1,541億円、信用保証事業710億円、海外金融事業536億円、合計では2,842億円を目指します。また営業利益は、ローン・クレジットカード事業487億円、信用保証事業209億円、海外金融事業211億円、合計では910億円を目指します。

次に、目標とする経営指標ですが、連結ROEは12%以上、連結総資産に信用保証残高を加算して算出した自己資本比率は20%を目指します。

資本政策は、自己資本の適正化を最優先としつつ、効率的な資本活用による収益力の強化を図り、株主還元の拡充に取り組んでまいりたいと考えております。なお、配当につきましては、安定的、継続的な利益還元を実現すべく、2020年3月期における中間配当は2円、期末配当は2円、年間合計で4円の増配を予想しております。

株主の皆さまにおかれましては、今後とも一層のご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

代表取締役社長兼会長

木下盛好

利息返還請求の状況と対応

2019年3月期の利息返還請求件数は、前期比21.0%減少の27,100件で着地いたしました。

2019年3月期における利息返還損失につきましては、利息返還金は365億円、利息返還請求に起因する債権放棄額は46億円、合計で412億円を、前期末の利息返還損失引当金残高1,040億円より取り崩しました。

また、引当金の妥当性、充分性を再評価した結果、2019年3月期の利息返還損失引当金は1,023億円が必要となったことから、不足額の394億円を追加繰入れいたしました。

利息返還請求の動向は、外部環境の変化等の影響を受けやすいことから、引き続き、四半期毎に発生予想額と実績額の乖離幅を検証し、引当金の妥当性・充分性を評価してまいります。

テレビCMサービス・利便性を訴求した新CMの放映

2018年8月から俳優の渡部篤郎さん、タレントの佐藤美希さんを起用したテレビCMを放映しております。2019年3月には、時節に合わせて“入社式”をモチーフにした「クレジットカード即日発行」を訴求したCMや「24時間・土日でも対応が可能」ということを訴求したCMを放映しております。

～「記念日篇（クレジットカード即日発行訴求）」～

渡部部長が入社式に紛れ込み、隣に座る新入社員に対して「今日は記念日だね？」と問いかけます。

“入社式”という記念すべき社会人デビューの日に即日発行が可能なアコムのクレジットカードの良さを熱心に語りかけるコミカルな内容としております。



～「恋バナ篇（クレジットカード即日発行訴求）」～

渡部部長が新入社員に対して、自身の入社式での“即”にまつわる思い出を話し始めます。

“即”の思い出に絡めて、アコムのクレジットカードが即日発行可能だということを訴求することでメリットを印象付ける内容としております。



～「休日作業篇（24時間・土日でも対応可能）」～

休日にうっかり出社してしまった渡部部長。

「24時間・土日でも対応可能なのはアコムですよ」と部下の佐藤さんが優しく教えてあげる内容としております。



Business Highlights

アコムグループは、ローン・クレジットカード事業で培った高度な与信・審査ノウハウ及び債権管理ノウハウを活用し、信用保証事業、海外金融事業、債権管理回収事業を展開しております。

ローン・クレジットカード事業

国内のローン事業においては、新規集客の増加、商品・サービス機能の向上、債権内容の健全性維持等に取り組んでまいりました。

新規集客の増加については、2018年8月より、広告に「渡部篤郎」と「佐藤美希」さんを起用して「はじめてのアコム」のサウンドロゴや商品・サービスの訴求をはかるとともに、インターネット動画であるYouTubeへの投稿を行うことで、ターゲットの認知拡大と好感度の向上をはかってまいりました。

商品・サービス機能の向上については、お客さまの利便性を一層高めるため、金融機関がサービスを開始した24時間即時振込みに対応するとともに、ホームページ等のデジタルチャネル高度化にも継続して取り組んでおります。

これらの営業活動に加え、与信精度の向上をはじめ、与信研修や応対品質研修などの人材育成強化を通じて、債権内容の健全性維持、応対品質の向上に努めた結果、当連結会計年度末における当社の営業貸付金は前期比2.3%増加の8,219億円となりました。国内のクレジットカード事業においては、2018年10月から、全国の自動契約機コーナーに設置している即時発行機でもICチップ搭載のカードを発行するなど、販売促進と利用率向上等に取り組んだ結果、当連結会計年度末における当社の割賦売掛金は前期比20.4%増加の631億円となりました。

当連結会計年度の営業収益は、営業貸付金利息やクレジットカード収益が増加したことを主因に前期比3.6%増収の1,448億円となりました。しかしながら、営業利益は、営業費用において利息返還損失引当金繰入額を計上したことを主因に前期比74.8%減益の118億円となりました。

信用保証事業

信用保証事業においては、既存提携先行との深度あるコミュニケーションに努め、連携強化に取り組んでまいりました。

既存提携先行との連携強化については、適正な審査を継続するとともに、債権内容や広告の効果等に関する分析結果の提供、及び提携先行の業績向上や安定成長に向けた各種支援を行いました。

当連結会計年度末における当社及びエム・ユー信用保証株式会社の信用保証残高は合算で前期比1.1%増加の1兆2,122億円、当連結会計年度の営業収益は、信用保証収益の増加を主因に前期比6.2%増収の693億円、営業利益は、営業費用において貸倒引当金繰入額が減少したことを主因に前期比41.7%増益の252億円となりました。

海外金融事業

海外金融事業においては、更なる事業の拡大を目指し、推進してまいりました。

タイ王国でローン事業を営むEASY BUY Public Company Limitedにおいては、2017年9月にタイ中央銀行による新規貸付基準等の新融資規制が実施されたものの、ブランドイメージ向上、新規集客拡大を目標に、Umay+（ユメプラス）ブランドを積極展開することにより、新規契約件数・営業貸付金残高ともに堅調に増加し、同国内においてトップブランドの地位を築いております。

インドネシア共和国で銀行業を営むPT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk.においては、MUFGグループとして、リテール・コマーシャル事業基盤を確立することを目的に、株式会社三菱UFJ銀行が戦略出資した同国の大手銀行、PT Bank Danamon Indonesia, Tbk.と合併することについて決議いたしました。

フィリピン共和国でローン事業を営むACOM CONSUMER FINANCE CORPORATIONにおいては、2018年7月より本格的な営業を開始し、積極的な営業活動を推進しております。日本国内及びタイ王国、インドネシア共和国で培った個人向けローン事業及び海外金融事業展開の経験を活かし、経済成長著しい同国で着実に収益化を実現できるよう努めてまいります。

その他アジア諸国についても、事業展開の可能性を探り、調査活動を推進しております。

当連結会計年度の営業収益は、業容の拡大に伴い営業貸付金利息が増加したことを主因に前期比9.8%増収の569億円、営業利益は前期比27.9%増益の198億円となりました。

債権管理回収事業

債権管理回収事業を営むアイ・アール債権回収株式会社においては、買取債権市場において競合環境が激化する中、新規取引先の開拓を推進するとともに、収益力向上に取り組んでまいりました。

当連結会計年度の営業収益は、買取債権回収高が減少したことを主因に前期比10.2%減収の58億円となり、営業利益は前期比36.5%減益の3億円となりました。

アコムのCSR

アコムが考えるCSRとは、企業理念に基づいた事業活動やその他の活動を通じて、企業の社会的責任と使命を果たし、持続可能な社会の実現に貢献することです。

「お客さまの最高の満足のために」「社会・環境のために」を重点活動テーマに掲げ、CSR活動に取り組んでいます。

お客さまの最高の満足のために

CS 理念

私たちはより良いサービスをより快適に提供します。

CS 経営の推進

● CS 経営推進会議の設置

お客さまを「顧客」ではなく「個客」として捉え、お客さま一人ひとりに真の満足を感じていただくためのCS経営を推進するため、社長を議長とした「CS経営推進会議」を定期的で開催し、CS向上施策や社内推進体制等を協議しています。

● CS アワードの開催

お客さまに信頼・満足いただくため、「気づき」によるCS対応の実践及び研鑽する風土を醸成し、「創業の精神」や「企業理念」のさらなる浸透を図ることを目的に、各部門から選ばれた従業員が、日頃の取り組み事例とその成果を発表し、共有しています。



● お客さまの声の収集と改善

インターネットで「お客さま満足度調査」を適宜実施することで、当社や業界サービスについてのご意見・ご要望を収集し、サービスの改善に活かしています。また、従業員がお客さまから寄せられたご要望や、自分自身の体験から気づいた当社の商品・サービスなどの改善事項は、「CS改善提案カード」や「CS体験カード」として提案し、それぞれ関連する部署が「CSカード検討会」を毎月開催し、改善や好事例の共有などを行っています。

社会・環境のために

社会貢献活動方針

アコムは、経営の基本的な理念として、創業の精神に「信頼の輪」を、企業理念に「生活文化の向上に貢献する」を掲げております。社会貢献活動においても、この理念に基づいて、社会福祉、地域貢献等、さまざまな活動を通じて、地域社会と良好な関係を築きつつ、「身近なアコム」と「社会に調和した企業市民」を目指しています。

文化・芸術支援活動

世代を超え、ハンディキャップを超えて楽しめる、バリアフリーコンサート
笑顔のおてつだい「アコム“みる”コンサート物語」 おかげさまで総来場者数22万人！

● アコム“みる”コンサート物語

「アコム“みる”コンサート物語」には、「誰かのために何かをしたい」、「多くの人の笑顔がみたい」、「地域社会と良好な関係を築きたい」という『3つの思い』が込められています。

「アコム“みる”コンサート物語」は、光を形にする「影絵」、生演奏の「音」、影絵に生命の息吹をもたらし「語り」という3つの要素を融合させることで幻想的な世界を創る独創的なタイプの芸術です。手作りの舞台の臨場感を味わうことで、演じる側とお客さまが感動を共有し、心の交流を実感することができます。

アコムでは、社会貢献活動の一環として、1994年から全国各地で「アコム“みる”コンサート物語」を開催しています。「親子で楽しんでいただこう」として始まったこのコンサートは、もっと多くの方々に楽しんでもらいたいとの思いから、現在では、手話通訳の導入、車イス専用席の拡充など、さまざまな創意工夫を重ねて、バリアフリーコンサートとして、開催するようになりました。これまで、230回以上の公演を行い、22万人を超える皆さまに、お楽しみいただいております。



● メセナアワード2018 優秀賞を受賞！

「メセナアワード2018」において、アコム“みる”コンサート物語が、長年にわたり健常者と障がい者が一つになれる鑑賞機会を創出し、心豊かな文化を発信していること、従業員と地域が連携した自主運営プログラムを通し、全国各地に文化を通じたさまざまな交流を生み出していることが評価され、ノミネートされた152件の活動の中から「優秀賞」に選出されました。

メセナアワードとは、公益社団法人 企業メセナ協議会が主催（後援：文化庁）し、芸術・文化振興による社会創造に貢献した優れた活動（メセナ活動）を表彰するものです。



社会福祉支援活動

● アコム青い鳥募金

「アコム青い鳥募金」は従業員の発案によって1984年に始まり、現在も継続しています。全職場に設置された募金箱や給与天引きによる募金で集まった資金は、大規模自然災害発生時の義援金等として寄付します。これまでの寄付の累計は、78回、約1,000万円にのぼります。（2019年3月現在）

● 自動販売機を活用した寄付

社内に設置している飲料自動販売機で購入すると、購入代金の一部が社会福祉団体への寄付金として活用される仕組みを導入しています。2018年度は、従業員が選んだ社会福祉団体5団体に、合計約209万円を寄付しました。

消費者啓発・金銭教育支援活動

● 大学での金銭教育

大学生向けの講座として、授業の中では、「消費者信用業界の概要」や「消費生活の中のローン・クレジット」に関する講義を行っています。未来を担う学生たちが将来金銭トラブルに巻き込まれることのないよう、社会人になる前からお金大切さを身につけていただきたいとの思いから、金銭啓発活動を実施しています。2018年度は5大学で講義を行い、約930名の学生が受講されました。

環境保全活動

● 消費電力削減

地球温暖化防止に向けた対応の一環として、店舗に設置しているATMは、低消費電力の機種や省エネモードを採用し、店舗等に設置している看板については、一部LEDを導入するなどして排出されるCO₂や消費電力の削減を図っています。また、空調機器、事務機器など電気使用設備の買い替えや新規導入時には、エネルギー効率を考慮した機器・設備の導入を検討・実施しています。

● ペーパーレス対応

お客さまへの交付書面の一部をペーパーレス化（電子化）することで、お客さまの利便性向上を図るとともに、資源の使用量を抑制しております。また、社内においても各種申請手続き、給与明細、社内広報誌等を電子化し、資源の使用量を抑制しております。

● 地域清掃活動の実施

従業員が多く在籍する拠点周辺での地域清掃活動に参加し、地域とのコミュニケーションや地域環境の美化に努めています。

投資家情報 (2019年3月末現在)

上場証券取引所

東京証券取引所 市場第一部

株主名簿管理人

三菱UFJ信託銀行株式会社

株主総会

2019年6月21日

発行可能株式総数

5,321,974,000株

発行済株式総数

1,596,282,800株

株主数

12,026名

米国預託証券情報

種類：スポンサー付Level-1プログラム

対原株比率：2ADRs：アコム普通株式5株

シンボル：ACMUY

証券番号：004845202

取引所：米国店頭取引

預託銀行：The Bank of New York Mellon

240 Greenwich Street, New York,

NY 10286, U.S.A.

アメリカ国内からのフリーコール：

1-888-BNY-ADRS

国際電話用の番号：

201-680-6825

URL

<https://www.adrbnymellon.com/>

お問い合わせ先

〒100-8307 東京都千代田区丸の内二丁目1番1号 明治安田生命ビル

アコム株式会社 広報・IR室

電話番号：03 (5533) 0861

メールアドレス：ir@acom.co.jp

有 価 証 券 報 告 書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 2018年4月1日
(第42期) 至 2019年3月31日

ア コ ム 株 式 会 社

(E03693)

第42期（自2018年4月1日 至2019年3月31日）

有 価 証 券 報 告 書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

ア コ ム 株 式 会 社

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【事業年度】	第42期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	アコム株式会社
【英訳名】	ACOM CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長兼会長 木 下 盛 好
【本店の所在の場所】	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号
【電話番号】	03-5533-0811（代表）
【事務連絡者氏名】	財務第二部長 木 下 昭 文
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号
【電話番号】	03-5533-0811（代表）
【事務連絡者氏名】	財務第二部長 木 下 昭 文
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第 1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第38期	第39期	第40期	第41期	第42期
決算年月	2015年 3 月	2016年 3 月	2017年 3 月	2018年 3 月	2019年 3 月
営業収益 (百万円)	219, 289	237, 683	245, 148	263, 453	277, 069
経常利益又は 経常損失(△) (百万円)	14, 747	16, 200	△69, 543	81, 694	58, 205
親会社株主に帰属する 当期純利益 又は親会社株主に帰属 する当期純損失(△) (百万円)	12, 864	14, 598	△72, 187	70, 572	37, 781
包括利益 (百万円)	22, 835	12, 888	△70, 550	77, 461	40, 643
純資産額 (百万円)	328, 315	338, 132	267, 226	344, 437	381, 501
総資産額 (百万円)	1, 190, 368	1, 175, 063	1, 228, 930	1, 275, 957	1, 301, 908
1 株当たり純資産額 (円)	199. 53	206. 42	159. 58	206. 12	227. 35
1 株当たり当期純利益 又は 1 株当たり当期 純損失(△) (円)	8. 21	9. 32	△46. 08	45. 05	24. 12
潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	26. 26	27. 52	20. 34	25. 31	27. 36
自己資本利益率 (%)	4. 24	4. 59	△25. 18	24. 64	11. 13
株価収益率 (倍)	50. 79	60. 84	△9. 66	10. 52	16. 38
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△38, 249	△43, 045	△37, 451	△32, 634	7, 329
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△5, 155	△2, 368	△2, 858	△1, 711	△1, 165
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	13, 503	6, 589	58, 863	21, 259	△12, 573
現金及び現金同等物 の期末残高 (百万円)	122, 306	83, 275	101, 719	88, 551	82, 346
従業員数 (ほか、平均有期契約 雇用人員) (名)	5, 820 (467)	6, 036 (394)	6, 057 (517)	6, 202 (592)	6, 623 (284)

(注) 1 営業収益には、消費税等を含んでおりません。

2 第38期、第39期、第41期、第42期の「潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益」については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 第40期の「潜在株式調整後 1 株当たり当期純利益」については、1 株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年 2 月16日）を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第38期	第39期	第40期	第41期	第42期
決算年月	2015年 3 月	2016年 3 月	2017年 3 月	2018年 3 月	2019年 3 月
営業収益 (百万円)	163,644	175,380	183,997	195,310	203,636
経常利益又は 経常損失(△) (百万円)	4,161	5,171	△84,054	65,471	37,472
当期純利益又は 当期純損失(△) (百万円)	9,316	9,857	△79,289	63,184	29,927
資本金 (百万円)	63,832	63,832	63,832	63,832	63,832
発行済株式総数 (千株)	1,596,282	1,596,282	1,596,282	1,596,282	1,596,282
純資産額 (百万円)	290,252	300,109	220,816	283,997	310,792
総資産額 (百万円)	975,799	970,803	1,021,927	1,048,349	1,070,518
1株当たり純資産額 (円)	185.27	191.57	140.95	181.28	198.38
1株当たり配当額 (内、1株当たり 中間配当額) (円)	— (—)	— (—)	— (—)	1.00 (—)	2.00 (1.00)
1株当たり当期純利益 又は1株当たり当期 純損失(△) (円)	5.95	6.29	△50.61	40.33	19.10
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	29.75	30.91	21.61	27.09	29.03
自己資本利益率 (%)	3.26	3.34	△30.44	25.03	10.06
株価収益率 (倍)	70.08	90.14	△8.79	11.75	20.68
配当性向 (%)	—	—	—	2.48	10.47
従業員数 (ほか、平均有期契約 雇用人員) (名)	1,851 (172)	1,892 (144)	1,854 (161)	1,936 (116)	2,020 (113)
株主総利回り (%) (比較指標：配当込み TOPIX) (%)	126.36 (130.69)	171.82 (116.55)	134.85 (133.67)	143.94 (154.88)	120.61 (147.08)
最高株価 (円)	497	699	643	540	511
最低株価 (円)	299	372	441	422	331

(注) 1 営業収益には、消費税等を含んでおりません。

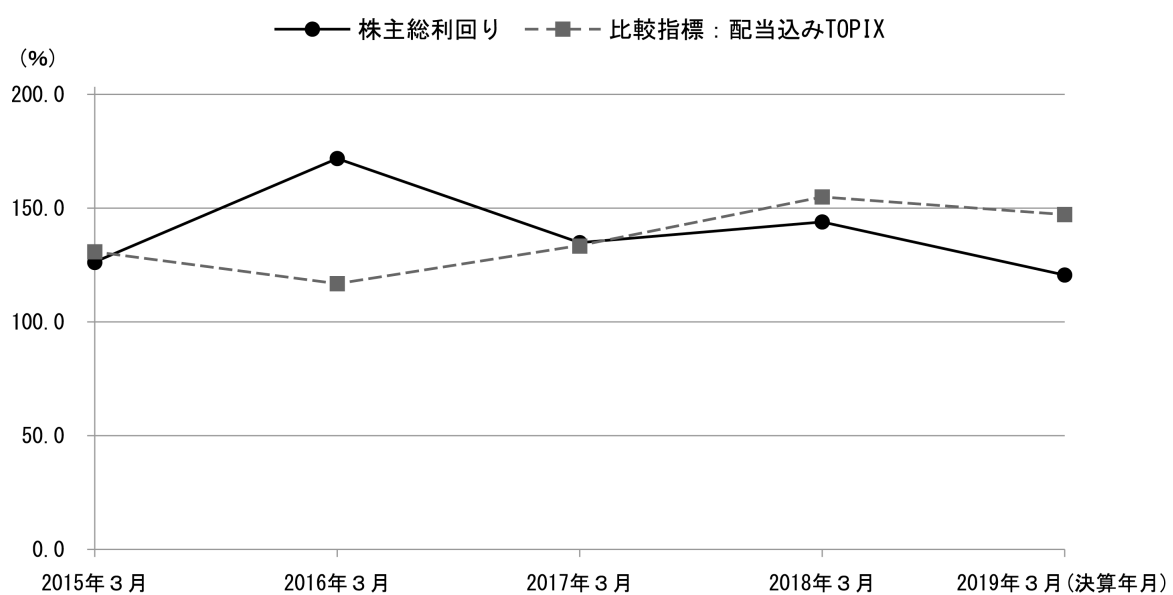
2 第38期、第39期、第41期、第42期の「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 第40期の「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」については、1株当たり当期純損失であり、また、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

4 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）を当事業年度の期首から適用しており、前事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

5 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

6 最近5年間の株主総利回りの推移は以下の通りであります。



2 【沿革】

年月	沿革
1978年10月	東京都中央区日本橋に消費者金融事業の「アコム株式会社（資本金5億円）」を設立
1978年12月	「マルイト株式会社」及び「ジョイ株式会社」から消費者金融事業の営業権（営業店舗計69店と貸付債権）を譲り受け営業を開始
1979年12月	業界初の年中無休・24時間稼働ATM（現金自動入出金機）を銀座店（中央区銀座）に設置
1983年12月	「貸金業の規制等に関する法律」の施行に伴い、貸金業者として関東財務局に登録
1984年8月	東京都千代田区富士見に本店所在地を変更
1986年12月	デラウェア（米国）に不動産賃貸業の「ACOM (U.S.A.) INC.」を設立（2015年12月解散）
1992年3月	「エヌエスケイ信販株式会社」を吸収合併し、信販事業、ゴルフ会員権担保ローン、法人向け融資事業を当社に承継
1993年7月	業界初の自動契約機「むじんくん」を新宿と博多に設置
1993年10月	日本証券業協会に株式を店頭登録
1994年12月	東京証券取引所の市場第二部に上場
1996年9月	バンコク（タイ王国）にハイパーパーチェス事業の合弁会社「SIAM A&C CO., LTD.」を設立
1996年9月	東京証券取引所の市場第一部銘柄に指定
1998年7月	MasterCard Internationalのプリンスパルメンバー（発行資格人）としての承認を受け、発行ライセンスを取得
1999年4月	MasterCard®の発行を開始し、クレジットカード事業に進出
2000年10月	「ジューキクレジット株式会社」の全株式を取得
2000年11月	労働者派遣業及び各種事務処理受託業の「エイビーパートナー株式会社」を設立
2001年3月	「アイ・アール債権回収株式会社」へ出資し、サービサー事業に進出（現・連結子会社）
2001年8月	「株式会社東京三菱銀行（現・株式会社三菱UFJ銀行）」「三菱信託銀行株式会社（現・三菱UFJ信託銀行株式会社）」「株式会社ディーシーカード（現・三菱UFJニコス株式会社）」「株式会社ジャックス」との共同出資で「株式会社東京三菱キャッシュワンの」を設立
2001年9月	「ジューキクレジット株式会社」から「ジェイシーケイクレジット株式会社」に商号変更
2004年3月	「株式会社三菱東京フィナンシャル・グループ（現・株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ）」と戦略的業務・資本提携
2004年6月	財団法人日本情報処理開発協会（現・一般財団法人日本情報経済社会推進協会）より「プライバシーマーク」を取得
2004年12月	東京都千代田区丸の内本店所在地を変更
2005年1月	「株式会社東京三菱キャッシュワンの」の株式の一部取得し、同時に「株式会社DCキャッシュワンの」に商号変更
2005年1月	金融関連コールセンター受託事業等の「株式会社リレイツ」を設立
2005年3月	「エムディービーキャピタル株式会社」の全株式を取得し、同時に「エーシーベンチャーズ株式会社」に商号変更
2005年4月	「SIAM A&C CO., LTD.」から「EASY BUY Public Company Limited」に商号変更（現・連結子会社）
2007年4月	信販事業を「ジェイシーケイクレジット株式会社」に承継し、同時に「アフレッシュクレジット株式会社」に商号変更
2007年12月	「株式会社三菱東京UFJ銀行（現・株式会社三菱UFJ銀行）」との共同出資により、インドネシア共和国の「PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk.」を買収（現・連結子会社）
2008年2月	「アイ・アール債権回収株式会社」の全株式を取得
2008年9月	「株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ」「株式会社三菱東京UFJ銀行（現・株式会社三菱UFJ銀行）」との戦略的業務・資本提携を一層強化することについて合意
2008年12月	「株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ」の連結子会社となる
2009年4月	「株式会社三菱東京UFJ銀行（現・株式会社三菱UFJ銀行）」の子会社である「エム・ユー・コミュニケーションズ株式会社」（現・持分法適用関連会社）を存続会社とする吸収合併で「株式会社リレイツ」を解散
2009年5月	当社を存続会社とする吸収合併で「株式会社DCキャッシュワンの」を解散
2010年8月	「アイ・アール債権回収株式会社」を存続会社とする吸収合併で「エイビーパートナー株式会社」を解散
2012年4月	当社を存続会社とする吸収合併で「エーシーベンチャーズ株式会社」を解散
2013年9月	信用保証事業の「エム・ユー信用保証株式会社」を設立（現・連結子会社）
2014年9月	「アイ・アール債権回収株式会社」を存続会社とする吸収合併で「アフレッシュクレジット株式会社」を解散
2015年12月	「エム・ユー信用保証株式会社」の全株式を取得
2017年7月	フィリピン共和国に無担保ローン事業の合弁会社「ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATION」を設立（現・連結子会社）

3 【事業の内容】

当社は、株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ（以下「MUFG」という。）の連結子会社となっており、MUFGは当社の「親会社」にあたります。

当社グループは、当社、子会社5社及び関連会社1社で構成され、[ローン・クレジットカード事業、信用保証事業、海外金融事業、債権管理回収事業]を主な事業の内容とし、事業活動を展開しております。

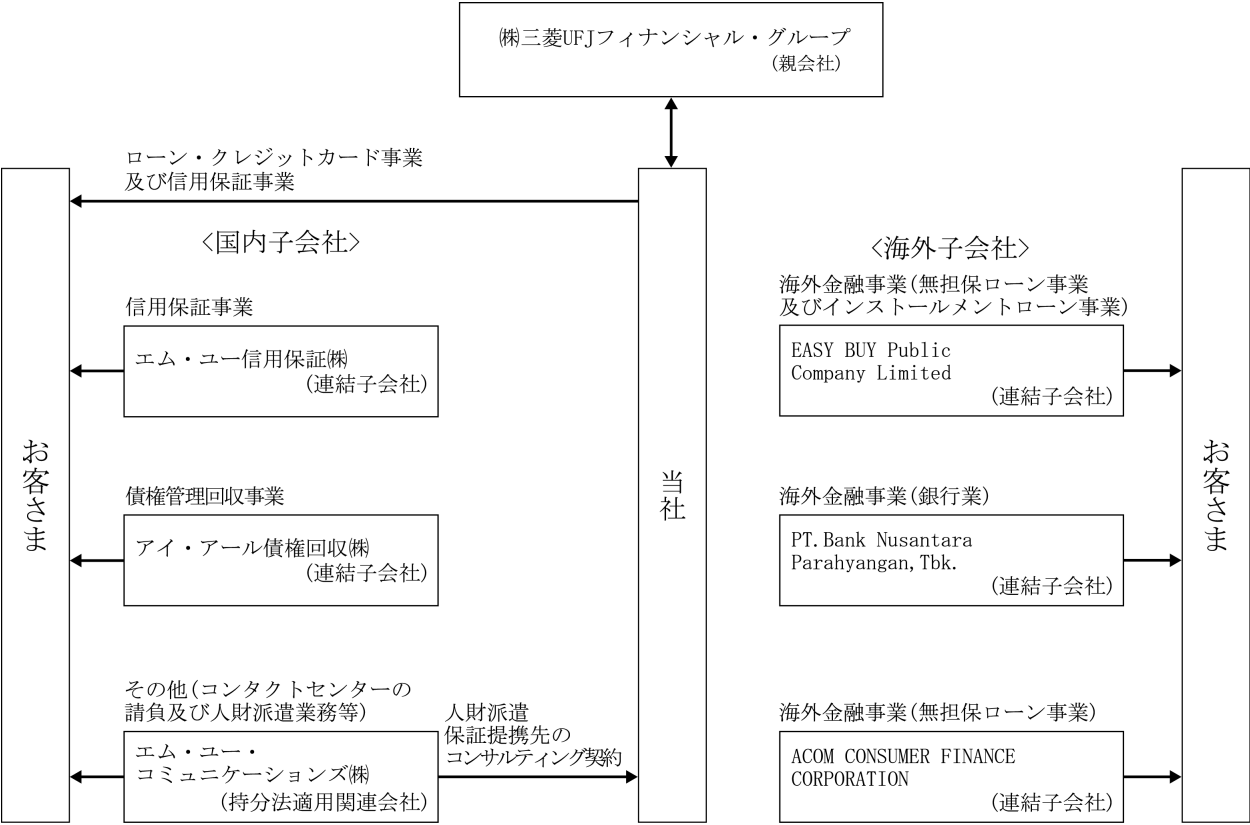
当社グループの事業における位置付け及びセグメントとの関係は、次のとおりであります。

なお、次の4事業は「第5 [経理の状況] 1 [連結財務諸表等] (1) [連結財務諸表] [注記事項]」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

区分	会社名	主な事業内容
ローン・クレジットカード事業	当社	無担保ローン事業
		MasterCard®を主要商品としたクレジットカード事業（包括信用購入あっせん事業）
信用保証事業	当社	信用保証事業
	エム・ユー信用保証株式会社	
海外金融事業	EASY BUY Public Company Limited	タイ王国における無担保ローン事業
		タイ王国におけるインストールメントローン事業（個別信用購入あっせん事業）
	PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk.	インドネシア共和国における銀行業
	ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATION	フィリピン共和国における無担保ローン事業
債権管理回収事業	アイ・アール債権回収株式会社	サービサー事業（債権管理回収事業）
その他	エム・ユー・コミュニケーションズ株式会社	コンタクトセンターの請負及び人財派遣業務等

（注）PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. は、2019年5月1日に株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループの連結子会社であるPT Bank Danamon Indonesia, Tbk. を存続会社とし、合併しました。

事業の系統図は次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 又は 出資金 (百万円)	主要な 事業 の内容	議決権の所有又は 被所有割合		関係内容
				所有割合 (%)	被所有 割合 (%)	
(親会社) ㈱三菱UFJフィナンシャル・ グループ (注) 3	東京都 千代田区	2,141,513	銀行持株 会社	—	40.18 (2.60)	経営管理、業務・資本提携
(連結子会社) エム・ユー信用保証㈱	東京都 新宿区	300	信用保証 事業	100.00	—	—
EASY BUY Public Company Limited (注) 4, 5	タイ王国 バンコク	百万タイ バーツ 6,000	海外金融 事業	71.00	—	同社への債務保証
PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. (注) 6	インドネ シア共和 国バンド ン	百万インド ネシアル ピア 399,947	海外金融 事業	67.59	—	同社への債務保証
ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATION	フィリピン 共和国 バシッグ	百万フィリ ピンペソ 500	海外金融 事業	80.00	—	—
アイ・アール債権回収㈱	東京都 千代田区	520	債権管理 回収事業	100.00	—	同社への資金貸付
(持分法適用関連会社) エム・ユー・コミュニケー ションズ㈱	東京都 渋谷区	1,020	その他	23.15	—	人財派遣業、保証提携先のコンサルティング契約

(注) 1 連結子会社の「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。

2 「議決権の所有又は被所有割合」欄の()内の数字は、間接所有の割合です。

3 有価証券報告書を提出しております。

4 特定子会社に該当しております。

5 EASY BUY Public Company Limitedは、営業収益（連結会社相互間の内部営業収益等を除く）の連結財務諸表の営業収益に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 営業収益	49,751百万円 (14,547百万タイバーツ)
	(2) 経常利益	20,337百万円 (5,946百万タイバーツ)
	(3) 当期純利益	16,254百万円 (4,752百万タイバーツ)
	(4) 純資産額	75,142百万円 (22,035百万タイバーツ)
	(5) 総資産額	181,097百万円 (53,107百万タイバーツ)

6 PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. は、2019年5月1日に株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループの連結子会社であるPT Bank Danamon Indonesia, Tbk. を存続会社とし、合併しました。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(名)
ローン・クレジットカード事業	1,411(80)
信用保証事業	208(13)
海外金融事業	4,400(149)
債権管理回収事業	137(14)
全社(共通)	467(28)
合計	6,623(284)

- (注) 1 従業員数は就業人員(当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。)であり、有期契約社員を除いております。
- 2 従業員数欄の(外書)は、有期契約社員の年間平均雇用人員であります。
(有期契約社員のうち臨時社員の人員を1日8時間勤務につき1名として換算した場合、有期契約社員の年間平均雇用人員は275名となります。)
- 3 全社(共通)として記載されている従業員数は、提出会社の管理部門に所属する、事業セグメントに区分できない従業員数であります。

(2) 提出会社の状況

2019年3月31日現在

従業員数(名)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
2,020(113)	40.4	14.4	6,023

セグメントの名称	従業員数(名)
ローン・クレジットカード事業	1,411(80)
信用保証事業	142(5)
全社(共通)	467(28)
合計	2,020(113)

- (注) 1 従業員数は就業人員(当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。)であり、有期契約社員を除いております。
- 2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
- 3 従業員数欄の(外書)は、有期契約社員の年間平均雇用人員であります。
(有期契約社員のうち臨時社員の人員を1日8時間勤務につき1名として換算した場合、有期契約社員の年間平均雇用人員は105名となります。)
- 4 全社(共通)として記載されている従業員数は、管理部門に所属する、事業セグメントに区分できない従業員数であります。

(3) 労働組合の状況

労働組合との労使関係は安定しております。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当社グループが判断したものであります。

(1) 経営の基本方針

当社グループは、創業の精神であります「信頼の輪」の下、企業理念として「人間尊重の精神とお客さま第一義に基づき、創造と革新の経営を通じて、楽しく豊かなパーソナルライフの実現と生活文化の向上に貢献する」ことを掲げ、ローン・クレジットカード事業、信用保証事業、海外金融事業の3事業を中核事業と位置づけ、「社会に信頼されるリーディングカンパニー」の実現をはかってまいります。

(2) 目標とする経営指標

当社グループが目標とする経営指標としては、株主価値の向上と安定した経営を持続していくため、自己資本当期純利益率(ROE)、総資産当期純利益率(ROA)、自己資本比率に加え、総資産に信用保証残高を加算して算出した自己資本比率を重視するとともに、1株当たり当期純利益の向上を目指しております。

(3) 中長期的な会社の経営戦略

当社グループを取り巻く経営環境は、少子高齢化をはじめとする社会構造の変化に加え、競合が激化するなど引き続き厳しい状況が続く見通しであります。

このような環境下において、当社グループは、これまで培ってきた国内外のコンシューマファイナンスビジネス、業務の集中化やローコストオペレーション等のノウハウをベースに、ローン・クレジットカード事業の営業サービス力強化、さらに、MUF Gグループとの連携による、信用保証事業ならびに、アジア地域での金融事業の規模拡大などに注力するとともに、AIやRPA等のICT投資を拡充し、中期的な成長基盤の確立に努め、次の基本方針に基づき、ステークホルダーとの相互信頼を深め、社会とともに発展していくことを目指してまいります。

(A) コンプライアンスをはじめとする社会性重視の企業姿勢の下、真にお客さまに支持されるサービスを提供し、「安心・信頼」の企業ブランドを確立する。

(B) 将来の環境変化を的確に予測し、持続的成長と企業価値の向上をはかる。

(C) 抜本的なコスト削減を可能とするビジネスモデルへの変革を果たし、価格競争力の向上を実現する。

(4) 対処すべき課題

2020年3月期を初年度とする3カ年の中期経営計画において、「環境変化にスピード感をもって対応し、持続的成長と企業価値の向上をはかるとともに、お客さまの期待を超えるサービスを創出する」という中期経営方針を掲げております。ICTの進化や女性活躍推進など、お客さまのニーズの多様化にスピード感をもって対応し、お客さまの期待を超えるサービスの創出を実現してまいります。また、ローン・クレジットカード事業、信用保証事業に求められる社会的責任と使命を果たし、社会とともに成長する企業となるべく、事業を支える人材基盤・コンピュータシステム基盤・財務基盤・ガバナンスの強化に加え、コンプライアンスやCS経営をさらに推進し、企業価値の向上をはかります。

中期経営計画の最終年度である2022年3月期の目標は、国内市場においては、ローン・クレジットカード事業残高1兆円、信用保証事業残高1兆3,000億円、合計で2兆3,000億円、海外市場においては、タイ王国のEASY BUY Public Company Limitedのローン事業残高549億タイバーツ、フィリピン共和国のACOM CONSUMER FINANCE CORPORATIONのローン事業残高15億9千万ペソ、海外金融事業全体で1,900億円、中核3事業合計では2兆5,000億円を目指します。

中期経営計画においては、引き続き事業の拡大に努め、以下の課題に取り組んでまいります。

なお、目標等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、その達成を当社として約束する趣旨のものではありません。また、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があります。

(ローン・クレジットカード事業)

ローン・クレジットカード事業においては、ＩＣＴの進化によってもたらされるお客さまの新たなニーズを的確に捉え、対応品質強化とデジタル化推進による良質な顧客体験の提供に努めるとともに、プロモーションの強化や与信精度の向上等を通じて、新規集客や会員数の増加、債権内容の健全性維持に注力いたします。

(信用保証事業)

信用保証事業においては、金融機関における個人向けカードローン市場の環境変化を的確に捉え事業を推進いたします。より高度化する提携先金融機関ごとのニーズに応えるため、当社の強みであるローン事業で培ったノウハウを最大限活用し、サービス機能の強化、向上に注力するとともに、適正な審査に努め、お客さまの健全な資金ニーズに応じてまいります。

(海外金融事業)

海外金融事業においては、EASY BUY Public Company Limitedの事業拡大と債権内容の健全性維持に取り組むとともに、ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATIONを海外金融事業における第二の収益の柱とすべく、中期経営計画期間中の単年度黒字化を目指します。また、その他アジア諸国についても、新規進出の実現に向けた調査・分析活動を着実に推進し、海外金融事業の拡大を目指します。

2 【事業等のリスク】

以下に記載しております「事業等のリスク」は、本有価証券報告書の提出日現在において、当社が把握している情報に基づく想定や見解を基礎に、当社グループの事業展開上リスクとなる可能性があると考えられる主要な事項を記載しております。

しかしながら、記載のリスクについては、リスクの全てを網羅しているものではなく、将来の経済情勢や消費者信用市場を取り巻く環境の変化など、様々な不確定要因により新たなリスクが発生する可能性があります。また、必ずしもそのようなリスク要因に該当しない事項についても、投資者の投資判断上、重要であると考えられる事項は、投資者に対する積極的な情報開示の観点から以下に開示しております。なお、文中における将来に関する事項は、本有価証券報告書の提出日現在において判断したものであります。

(1) 業績について

当社グループの業績は、以下に記載した①から⑨の事項における変化、変動、変更やその度合い等により、業績に影響を及ぼす場合があります。

- ① 顧客口座件数の増減及び顧客口座一件あたりの平均残高の増減
- ② 消費者金融業界にかかる司法判断、法的規制の枠組みの変更
- ③ 顧客から受領する平均約定金利等の変動
- ④ ローン事業における利息返還請求件数及び返還金額の変動
- ⑤ 競合他社との競争
- ⑥ 顧客の債務不履行率
- ⑦ 資金調達力及び資金調達のコスト
- ⑧ 広告宣伝費、人件費及びその他のコスト水準
- ⑨ 大規模な事故・災害等の発生

(2) 利息返還の状況について

当社のローン事業においては、2007年6月17日以前に契約締結したローン商品の貸付金利等は、「利息制限法」の上限金利を上回るものがあります。

「利息制限法」の上限金利の超過部分については無効とされておりますが、2010年6月18日に改正貸金業法が完全施行される前の利息制限法の下では、債務者が当該超過部分を任意に支払ったときは、その返還を請求することはできないとされ、また、完全施行前の貸金業法附則第13条においても、一定の要件を満たしていれば、有効な利息の債務の弁済とみなすとされておりました。

しかしながら、2006年1月13日の最高裁判所判決において、約定利息の返済が遅れた場合に期限の利益を喪失する契約条項が付されたケースでは、利息制限法超過部分の支払を強制することになるため、任意性を要件とする「みなし弁済の要件」が充たされていないとの判決が下されたことを理由として、消費者金融事業を営む各社に対し、支払金等の返還を求める訴訟が複数提起されており、このような請求を認める判決も複数下されております。

当社のお客さまが、貸付金の減額や過剰支払金等の返還を求める場合、当社は貸付金の放棄や支払金等を返還することがあります。また、これによる貸付金放棄額や支払金等返還額（以下「利息返還損失」という。）は、着実に減少しているものの、引き続き、返還請求件数等の状況を注視しております。今後、利息返還損失の発生状況や利息返還損失引当金の計上、及び利息返還を求める訴訟において、当社を含む貸金業者にとって著しく不利となる司法の判決などが、当社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 資金調達について

当社グループは、営業活動と債務の返済のために必要な資金については、金融機関等からの借入金による資金調達と、社債発行等による資本市場からの資金調達を行っております。

近年、当社グループは、資金調達方法を徐々に多様化してまいりましたが、既存の主要借入先が、金融グループの再編成、又はそれ以外の要因により、当社グループに対する貸出政策を変更しないという保証がないことに加え、資本市場が将来的にも依拠できる資金調達源として利用可能である保証もありません。

また、当社の信用格付の変動によっては資金調達能力が低下する可能性があります。その場合、金融費用の増加や資金調達額に制約を受ける場合があり、その結果、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 貸倒引当金について

当連結会計年度末において、当社グループの総資産の大半を占めている営業貸付金・割賦売掛金につきましては、貸出先の状況、差し入れられた担保の価値などの見積りに基づいて、貸倒引当金を計上しております。

今後の日本の経済情勢、市場環境、社会構造の変化や、「破産法」、「特定調停法」、「民事再生法」、「司法書士法」等の法制度の改正により、法律上の保護を求める個人（当社グループのお客さまを含む。）の件数が増加し、返済金の支払遅延及び未回収貸付金が増加するおそれがあります。その結果、貸倒引当金の増加など、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 多重債務者対策について

多重債務者対策に関しては、「消費者啓発活動の推進」、「カウンセリング機能整備」、「与信業務の一層の厳格化」、「貸出上限金利の引き下げ」、「広告表現の見直し」などを中心に取り組んでおります。

しかしながら、経済情勢、雇用環境、市場環境などの外的要因により多重債務者が増加した場合、未回収貸付金の増加によって貸倒引当金が増加するなど、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 信用保証事業について

当社及びエム・ユー信用保証株式会社は、信用保証事業において、既存提携先との連携強化に取り組み、適正な審査を継続するとともに、債権内容や広告の効果等に関する分析結果の提供、及び提携先の業績向上や安定成長に向けた各種支援を行ってまいりましたが、今後、銀行カードローンへの規制が強化されるなど、当社及びエム・ユー信用保証株式会社の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(7) 情報システムについて

当社グループは、お客さまへのサービスの提供、営業管理にあたり、店舗ネットワーク及び顧客データなどの管理を、コンピュータシステム及びネットワークに依存しております。これらに使用する通信回線、ハードウェア及びソフトウェアは、人為的過誤、自然災害、停電、コンピュータウイルス等による障害、又は通信会社及びコンピュータシステム事業者のサポート停止等によってお客さまへのサービスが提供できなくなる可能性があります。その場合は、新規顧客の減少、返済金の支払遅延、当社グループへの信頼の低下などにより、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

なお、当社の勘定系システムについては、バックアップセンターを保持し営業の中断が発生しないように努めておりますが、地震及び洪水等の広域自然災害が発生した場合には、当社の営業の中断を余儀なくされるおそれがあります。

(8) 個人情報の取扱いについて

当社を始めとする当社グループの主要企業は、「個人情報の保護に関する法律」における個人情報取扱事業者に該当しております。

個人情報の管理については、「個人情報保護方針」、「個人情報保護規程」に基づき、運用・管理体制に万全を期しており、一般財団法人日本情報経済社会推進協会が認定するプライバシーマークを取得しております。

また、電算センターの運用においても、電算センターへの入退室管理等の物理的セキュリティとコンピュータシステムへのアクセスコントロール管理等の情報セキュリティに万全な対策を講じております。

しかしながら、何らかの原因により個人情報が流出した場合は、当社グループの信用を失うことや損害賠償等による業績への影響を被るだけでなく、個人情報取扱事業者として規定に違反した場合には、勧告、命令を受ける可能性があります。

(9) 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループとの業務・資本提携について

当社は2004年3月に、MUFGと戦略的業務・資本提携を行い、その後、MUFGは当社への出資比率を引き上げ、必要な手続きを経て、当社は2008年12月にMUFGの連結子会社となりました。このため、銀行法等の銀行に対する法規制が変更された場合、当社グループ各社の事業領域に制限を受ける可能性があります。

(10) 投資について

当社グループは、合弁会社の設立などにより、これまで新規市場への参入及び消費者信用市場における規模の拡大をはかってまいりました。こうした投資から得られる利益の見通しは不確実であり、当社グループが新規の合弁会社の設立又は拡大を成功裏に行うことができるという保証はありません。当社グループは、事業の収益性及び潜在的な成長力の定期的な見直しを行っておりますが、かかる見直しの結果、将来的に新規の合弁事業からの撤退、又はかかる合弁事業に配分する人的又は物的資源を減少させる場合があります。こうした合弁会社の収益性が目標に達しない場合に、当社グループがすでに行った投資の回収を行うことができないリスクも存在しております。

(11) 大株主等による当社株式の処分について

MUFG及びそのグループが保有する当社の発行済株式数は約40%となっております。また、当社の代表取締役社長兼会長である木下盛好及びその親族並びに関連法人が保有する株式も併せて約40%となっております。これらの株主が、その所有株式の一部を今後処分することがあれば、市場における当社株式の供給が増加し、当社の株価に影響を及ぼすおそれがあります。

(12) 事故・災害について

大規模な地震、風水害、津波などの自然災害、感染症の流行等の外的要因による、事故・災害の発生時に対し、様々な対策の検証並びに整備に努めておりますが、このような事象が発生することにより、当社の店舗、施設への損害、又は従業員、お客さまへの人的被害等があった場合、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

3 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 業績

当連結会計年度におけるわが国経済は、個人消費の持ち直しや雇用・所得環境の改善が続きました。今後も政府による各種政策の効果もあって、緩やかな回復が続くことが期待されるものの、海外経済の不確実性や金融資本市場の変動の影響など、わが国の景気を下押しする可能性が、引き続き存在しております。

ノンバンク業態においては、市場規模が緩やかに拡大しております。一方、利息返還請求は着実に減少していますが、外部環境の変化等の影響を受けやすいことから、引き続き動向に留意する必要があります。

このような中、当社グループは、「一人でも多くのお客さまに最高の満足を感じていただき、個人ローン市場において社会に信頼されるリーディングカンパニーを目指す」という経営ビジョンの下、ローン・クレジットカード事業、信用保証事業、海外金融事業を中核3事業と位置付け、個人ローン市場におけるシェアの拡大をはかるとともに、市場の健全な成長に貢献すべく努めてまいりました。

①前期比分析

	前連結会計年度 (実績)	当連結会計年度 (実績)	前期比	
	金額 (百万円)	金額 (百万円)	金額 (百万円)	比率 (%)
営業収益	263,453	277,069	+13,615	+5.2
ローン・クレジットカード事業	139,826	144,829	+5,002	+3.6
信用保証事業	65,295	69,341	+4,046	+6.2
海外金融事業	51,904	56,995	+5,091	+9.8
債権管理回収事業	6,560	5,893	△666	△10.2
営業利益	80,942	57,607	△23,334	△28.8
ローン・クレジットカード事業	46,864	11,804	△35,060	△74.8
信用保証事業	17,808	25,241	+7,433	+41.7
海外金融事業	15,478	19,802	+4,324	+27.9
債権管理回収事業	615	390	△224	△36.5
経常利益	81,694	58,205	△23,489	△28.8
親会社株主に帰属する当期純利益	70,572	37,781	△32,791	△46.5

(注) 前連結会計年度(実績)及び当連結会計年度(実績)における「営業収益」及び「営業利益」の金額は、内訳として記載している金融サービス事業別の合計値と差異があります。当該差異については、「第5[経理の状況] 1[連結財務諸表等][注記事項](セグメント情報等)[セグメント情報]4 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容(差異調整に関する事項)」をご参照ください。

当連結会計年度における営業収益は、中核3事業の営業収益の増加を主因に2,770億6千9百万円(前期比5.2%増)となり、営業費用は金融費用、貸倒費用が減少したものの、利息返還損失引当金繰入額を計上したことから2,194億6千1百万円(前期比20.2%増)となりました。以上の結果、営業利益は576億7百万円(前期比28.8%減)、経常利益は582億5百万円(前期比28.8%減)、親会社株主に帰属する当期純利益は377億8千1百万円(前期比46.5%減)となりました。

なお、金融サービス事業別の状況については「(2)金融サービス事業別の状況」に記載しております。

②計画比分析

	当連結会計年度 (計画)	当連結会計年度 (実績)	計画比	
	金額 (百万円)	金額 (百万円)	金額 (百万円)	比率 (%)
営業収益	269,900	277,069	+7,169	+2.7
ローン・クレジットカード事業	142,800	144,829	+2,029	+1.4
信用保証事業	67,800	69,341	+1,541	+2.3
海外金融事業	53,700	56,995	+3,295	+6.1
債権管理回収事業	5,600	5,893	+293	+5.2
営業利益	77,200	57,607	△19,592	△25.4
経常利益	77,700	58,205	△19,494	△25.1
親会社株主に帰属する当期純利益	63,600	37,781	△25,818	△40.6

(注) 当連結会計年度(実績)における「営業収益」の金額は、内訳として記載している金融サービス事業別の合計値と差異があります。当該差異については、「第5〔経理の状況〕1〔連結財務諸表等〕〔注記事項〕(セグメント情報等)〔セグメント情報〕4 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容(差異調整に関する事項)」をご参照ください。

当連結会計年度における営業収益は2,699億円の計画に対し、中核3事業の営業収益が計画を上回ったことを主因に+71億6千9百万円(計画比2.7%増)となり、営業利益は772億円の計画に対し利息返還損失引当金繰入額を計上したことから△195億9千2百万円(計画比25.4%減)、経常利益は777億円の計画に対し△194億9千4百万円(計画比25.1%減)、親会社株主に帰属する当期純利益は636億円の計画に対し△258億1千8百万円(計画比40.6%減)となりました。

なお、金融サービス事業別の状況については、「(2)金融サービス事業別の状況」に記載しております。

(2) 金融サービス事業別の状況

① ローン・クレジットカード事業

国内のローン事業においては、新規集客の増加、商品・サービス機能の向上、債権内容の健全性維持等に取り組んでまいりました。

新規集客の増加については、2018年8月より、「渡部篤郎」と「佐藤美希」さんを起用してサウンドロゴによる「はじめてのアコム」や商品・サービスの訴求をはかるとともに、インターネット動画であるYouTubeへの投稿を行うことで、ターゲットの認知拡大と好感度の向上をはかってまいりました。

商品・サービス機能の向上については、お客さまの利便性を一層高めるため、金融機関がサービスを開始した24時間即時振込みに対応するとともに、ホームページ等のデジタルチャネル高度化にも継続して取り組んでおります。

これらの営業活動に加え、与信精度の向上をはじめ、与信研修や応対品質研修などの人材育成強化を通じて、債権内容の健全性維持、応対品質の向上に努めた結果、当連結会計年度末における当社の営業貸付金は8,219億4千3百万円(前期末比2.3%増)となりました。

国内のクレジットカード事業においては、2018年10月からICチップ搭載のカードを全国の自動契約機コーナーに設置している即時発行機でも発行可能にするなど、販売促進と利用率向上等に取り組んだ結果、当連結会計年度末における当社の割賦売掛金は631億3千7百万円(前期末比20.4%増)となりました。

当連結会計年度の営業収益は、営業貸付金利息や包括信用購入あっせん収益が増加したことを主因に1,448億2千9百万円(前期比3.6%増)となりました。

しかしながら、営業利益は、営業費用において利息返還損失引当金繰入額を計上したことを主因に118億4百万円(前期比74.8%減)となりました。

なお、営業収益の計画比においては、平均利回りが計画を上回ったことにより、1,428億円の計画に対し+20億2千9百万円(計画比1.4%増)となりました。

② 信用保証事業

信用保証事業においては、既存提携先との深度あるコミュニケーションに努め、連携強化に取り組んでまいりました。

既存提携先との連携強化については、適正な審査を継続するとともに、債権内容や広告の効果等に関する分析結果の提供、及び提携先の業績向上や安定成長に向けた各種支援を行いました。

当連結会計年度末における当社及びエム・ユー信用保証株式会社の信用保証残高は合算で1兆2,122億5千5百万円（前期末比1.1%増）、当連結会計年度の営業収益は、保証料率の改定等を主因に693億4千1百万円（前期比6.2%増）、営業利益は、営業収益の増収に加え、営業費用において貸倒引当金繰入額が減少したことを主因に252億4千1百万円（前期比41.7%増）となりました。

なお、営業収益の計画比においては、信用保証残高は計画を下回ったものの、保証料収入が計画を上回り、678億円の計画に対し+15億4千1百万円（計画比2.3%増）となりました。

③ 海外金融事業

海外金融事業においては、更なる事業の拡大を目指し、事業を推進してまいりました。

タイ王国でローン事業を営むEASY BUY Public Company Limitedにおいては、2017年9月にタイ中央銀行による新規貸付基準等の新融資規制が実施されたものの、ブランドイメージ向上、新規集客拡大を目標に、Umay+（ユメプラス）ブランドを積極展開することにより、新規契約件数・営業貸付金残高ともに堅調に増加し、同国内においてトップブランドの地位を築いております。

インドネシア共和国で銀行業を営むPT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk.においては、MUF Gグループとして、リテール・コマーシャル事業基盤を確立することを目的に、株式会社三菱UFJ銀行が戦略出資した同国の大手銀行、PT Bank Danamon Indonesia, Tbk.と合併することを決議いたしました。

フィリピン共和国でローン事業を営むACOM CONSUMER FINANCE CORPORATIONにおいては、2018年7月より本格的な営業を開始し、積極的な営業活動を推進しております。日本国内及びタイ王国、インドネシア共和国で培った個人向けローン事業及び海外金融事業展開の経験を活かし、経済成長著しい同国で着実に収益を得られるよう努めてまいります。

その他アジア諸国についても、事業展開の可能性を探り、調査活動を推進しております。

当連結会計年度の営業収益は、業容の拡大に伴い営業貸付金利息が増加したことを主因に569億9千5百万円（前期比9.8%増）、営業利益は198億2百万円（前期比27.9%増）となりました。

なお、営業収益の計画比においては、業容の拡大に為替影響も加わり、537億円の計画に対し+32億9千5百万円（計画比6.1%増）となりました。

④ 債権管理回収事業

債権管理回収事業を営むアイ・アール債権回収株式会社においては、買取債権市場において競合環境が激化する中、新規取引先の開拓を推進するとともに、収益力向上に取り組んでまいりました。

当連結会計年度の営業収益は、買取債権回収高が減少したことを主因に58億9千3百万円（前期比10.2%減）となり、営業利益は3億9千万円（前期比36.5%減）となりました。

なお、営業収益の計画比においては、リテール債権の回収に注力した結果、買取債権回収高が計画を上回り、56億円の計画に対し+2億9千3百万円（計画比5.2%増）となりました。

(3) 財政状態の分析

当連結会計年度末における財政状態は、前連結会計年度末に比べ総資産は259億5千1百万円の増加、負債合計は111億1千3百万円の減少、純資産は370億6千4百万円の増加となりました。資産、負債、純資産の増減状況は次のとおりであります。

(資産の部)

資産の部については、流動資産が351億円の増加、固定資産が91億4千9百万円の減少となり、資産合計では259億5千1百万円の増加となりました。流動資産の主な増減内容は、営業貸付金（253億1千1百万円）、割賦売掛金（107億6百万円）などの増加、現金及び預金（63億3千8百万円）、商品有価証券（16億5千1百万円）などの減少であります。固定資産の主な減少内容は、土地（30億6百万円）、ソフトウェア（17億1千6百万円）、建物及び構築物（10億5千2百万円）、のれん（8億1千3百万円）などであります。

(負債の部)

負債の部については、流動負債が51億7千1百万円の減少、固定負債が59億4千2百万円の減少となり、負債合計では111億1千3百万円の減少となりました。主な減少内容は、借入金・社債などの資金調達残高（93億7千6百万円）、利息返還損失引当金（17億6千8百万円）などであります。

(純資産の部)

純資産の部については、利益剰余金の増加により株主資本が346億1千9百万円の増加、退職給付に係る調整累計額、為替調整換算勘定の減少によりその他の包括利益累計額が13億6千1百万円の減少、非支配株主持分が38億6百万円の増加となり、純資産合計では370億6千4百万円の増加となりました。この結果、自己資本比率は2.1ポイント増加し27.4%となりました。

なお、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）を当連結会計年度の期首から適用しており、財政状態については、当該会計基準等を遡って適用した後の数値で前連結会計年度との比較・分析を行っております。

(4) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、前連結会計年度末から62億4百万円（7.0%）減少し、823億4千6百万円となりました。

営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純利益（553億3千4百万円）、減価償却費の増加（47億4千9百万円）、減損損失の増加（28億円）、貸倒引当金の増加（12億1千4百万円）、利息返還損失引当金の減少（17億6千8百万円）となり、営業貸付金の増加（273億2千7百万円）、割賦売掛金の増加（107億1千3百万円）などの減少要因により、73億2千9百万円の資金の増加となりました。

投資活動によるキャッシュ・フローは、無形固定資産の取得による支出が20億1千9百万円、有価証券の取得による支出が13億6千5百万円、有価証券の償還による収入が11億8千7百万円となったことなどにより、11億6千5百万円の資金の減少となりました。

財務活動によるキャッシュ・フローは、借入れ、社債の発行などによる収入が借入金の返済、社債の償還などによる支出を84億5百万円下回ったこと、配当金の支払い額が31億3千1百万円となったことなどにより、125億7千3百万円の資金の減少となりました。

当社グループの資本の財源については、金融機関からの借入や社債の発行等によって資金調達を行っております。また、資金の流動性については、主要銀行とのコミットメントライン契約や当座借越契約など多様な調達手段とあわせて、十分な流動性を確保しております。

(5) 営業実績

① 事業別営業収益

事業別			前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
			金額(百万円)	構成割合 (%)	金額(百万円)	構成割合 (%)
金融サービス事業	国内	ローン事業	133,280	50.6	136,671	49.3
		クレジットカード事業	6,545	2.5	8,154	3.0
		信用保証事業	65,171	24.7	69,341	25.0
		債権管理回収事業	6,560	2.5	5,893	2.1
		その他	0	0.0	23	0.0
	海外	ローン事業	44,667	17.0	49,692	18.0
		インストールメントローン事業	107	0.0	83	0.0
		銀行業	7,120	2.7	7,207	2.6
合計			263,453	100.0	277,069	100.0

(注) 事業の区分は、第5〔経理の状況〕1〔連結財務諸表等〕〔注記事項〕(セグメント情報等)に合わせて記載しております。

② 金融サービス事業の取扱高及び期末残高

(イ) 取扱高

事業別		前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
		金額(百万円)	構成割合 (%)	金額(百万円)	構成割合 (%)
国内	ローン事業	370,973	62.7	372,240	63.5
	クレジットカード事業	41,476	7.0	43,523	7.4
	債権管理回収事業	3,154	0.5	2,286	0.4
海外	ローン事業	118,807	20.1	115,154	19.6
	インストールメントローン事業	692	0.1	731	0.1
	銀行業	56,803	9.6	52,469	9.0
合計		591,907	100.0	586,407	100.0

(注) 1 事業の区分は、第5〔経理の状況〕1〔連結財務諸表等〕〔注記事項〕(セグメント情報等)に合わせて記載しております。

2 上記事業の内容及び取扱高の範囲は次のとおりであります。

- ・ローン事業 直接顧客に金銭を貸付ける取引であり、取扱高の範囲は顧客に対する期中の融資額であります。
- ・クレジットカード事業 クレジットカードによる包括的審査に基づいたあっせん取引であり、取扱高の範囲はクレジットカードによる期中のショッピング信用供与額であります。
- ・債権管理回収事業 債権の買取金額であります。
- ・インストールメントローン事業 クレジットカードは用いず、取引の都度、顧客に対する取引審査・取引判断等を行うあっせん取引であり、取扱高の範囲はクレジット対象額に顧客手数料を加算した金額であります。
- ・銀行業 直接顧客に金銭を貸付ける取引であり、取扱高の範囲は顧客に対する融資額であります。

(ロ) 期末残高

事業別		前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
		金額(百万円)	構成割合 (%)	金額(百万円)	構成割合 (%)
国内	ローン事業	803,405	73.9	821,976	73.3
	クレジットカード事業	52,445	4.8	63,137	5.6
	債権管理回収事業	10,603	1.0	9,435	0.8
海外	ローン事業	171,711	15.8	178,452	15.9
	インスツールメントローン事業	588	0.0	603	0.1
	銀行業	48,808	4.5	48,331	4.3
合計		1,087,562	100.0	1,121,936	100.0

(注) 事業の区分は、第5〔経理の状況〕1〔連結財務諸表等〕〔注記事項〕(セグメント情報等)に合わせて記載しております。

③ 店舗数

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
店舗 (店)	1,205	1,173

④ 利用者数

事業別		前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
国内	ローン事業 (件)	1,486,183	1,540,012
	クレジットカード事業 (名)	400,220	426,572
	債権管理回収事業 (件)	355,584	359,351
海外	ローン事業 (件)	1,286,090	1,355,618
	インスツールメントローン事業 (件)	12,209	12,699
	銀行業 (件)	73,541	72,463

(注) 1 事業の区分は、第5〔経理の状況〕1〔連結財務諸表等〕〔注記事項〕(セグメント情報等)に合わせて記載しております。

2 上記事業別の利用者数の範囲は次のとおりであります。

- ・ローン事業 営業貸付金残高を有する口座数
- ・クレジットカード事業 「MasterCard®」有効会員数
- ・債権管理回収事業 債権買取額の残高を有する口座数
- ・インスツールメントローン事業 割賦売掛金残高を有する契約件数
- ・銀行業 銀行業貸出金残高を有する口座数

⑤ 営業貸付金残高の内訳

(イ) 貸付種別残高

貸付種別		前連結会計年度 (2018年3月31日)					当連結会計年度 (2019年3月31日)				
		件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)	平均約定金利(%)	件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)	平均約定金利(%)
消費者向	無担保(住宅向を除く)	2,770,042	99.9	969,035	99.4	17.54	2,893,695	99.9	995,223	99.5	17.53
	有担保(住宅向を除く)	2,207	0.1	5,980	0.6	11.57	1,915	0.1	5,110	0.5	11.58
	住宅向	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	2,772,249	100.0	975,016	100.0	17.50	2,895,610	100.0	1,000,333	100.0	17.49
事業者向	無担保	4	0.0	3	0.0	14.91	3	0.0	3	0.0	15.00
	有担保	20	0.0	96	0.0	9.57	17	0.0	91	0.0	8.90
	計	24	0.0	100	0.0	9.77	20	0.0	95	0.0	9.13
合計		2,772,273	100.0	975,116	100.0	17.50	2,895,630	100.0	1,000,428	100.0	17.49

(ロ) 業種別残高

業種別	前連結会計年度 (2018年3月31日)				当連結会計年度 (2019年3月31日)			
	件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)	件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
農業、林業、漁業	1	0.0	0	0.0	—	—	—	—
建設業	6	0.0	18	0.0	5	0.0	17	0.0
製造業	1	0.0	2	0.0	1	0.0	1	0.0
電気・ガス・熱供給・水道業	—	—	—	—	—	—	—	—
情報通信業	1	0.0	4	0.0	1	0.0	4	0.0
運輸業、郵便業	1	0.0	4	0.0	1	0.0	4	0.0
卸売業、小売業	5	0.0	11	0.0	3	0.0	9	0.0
金融業、保険業	1	0.0	4	0.0	1	0.0	3	0.0
不動産業、物品賃貸業	1	0.0	26	0.0	1	0.0	26	0.0
宿泊業、飲食サービス業	2	0.0	12	0.0	2	0.0	11	0.0
教育、学習支援業	—	—	—	—	—	—	—	—
医療、福祉	1	0.0	0	0.0	—	—	—	—
複合サービス事業	—	—	—	—	—	—	—	—
サービス業(他に分類されないもの)	4	0.0	14	0.0	5	0.0	14	0.0
個人	2,772,249	100.0	975,016	100.0	2,895,610	100.0	1,000,333	100.0
特定非営利活動法人	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	2,772,273	100.0	975,116	100.0	2,895,630	100.0	1,000,428	100.0

(注) 個人事業主に対する事業性貸付は、「個人」以外の該当する業種に記載しております。

(ハ) 担保種類別残高

受入担保の種類	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	残高(百万円)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
有価証券 (うち株式)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
債権 (うち預金)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
商品	—	—	—	—
不動産	6,018	0.6	5,143	0.5
財団	—	—	—	—
その他	58	0.0	58	0.0
計	6,077	0.6	5,201	0.5
保証	—	—	—	—
無担保	969,039	99.4	995,226	99.5
合計	975,116	100.0	1,000,428	100.0

(ニ) 貸付期間別残高

貸付期間別		前連結会計年度 (2018年3月31日)				当連結会計年度 (2019年3月31日)			
		件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)	件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
無担保 ローン	リボルビング	2,634,448	95.0	916,457	94.0	2,748,225	94.9	942,685	94.2
	1年以下	837	0.0	127	0.0	3,615	0.1	185	0.0
	1年超5年以下	75,833	2.7	17,992	1.9	78,339	2.7	18,351	1.9
	5年超10年以下	38,001	1.4	18,490	1.9	47,278	1.6	21,995	2.2
	10年超15年以下	20,875	0.8	15,933	1.7	16,179	0.6	11,964	1.2
	15年超20年以下	47	0.0	34	0.0	56	0.0	39	0.0
	20年超25年以下	4	0.0	4	0.0	4	0.0	3	0.0
	25年超	1	0.0	0	0.0	2	0.0	0	0.0
	計	2,770,046	99.9	969,039	99.5	2,893,698	99.9	995,226	99.5
有担保 ローン	リボルビング	1,684	0.1	4,347	0.4	1,472	0.1	3,767	0.4
	1年以下	16	0.0	36	0.0	5	0.0	13	0.0
	1年超5年以下	110	0.0	201	0.0	96	0.0	147	0.0
	5年超10年以下	239	0.0	489	0.0	201	0.0	413	0.0
	10年超15年以下	78	0.0	282	0.0	67	0.0	242	0.0
	15年超20年以下	16	0.0	83	0.0	17	0.0	81	0.0
	20年超25年以下	83	0.0	634	0.1	74	0.0	536	0.1
	25年超	1	0.0	1	0.0	—	—	—	—
	計	2,227	0.1	6,077	0.5	1,932	0.1	5,201	0.5
リボルビング		2,636,132	95.1	920,805	94.4	2,749,697	95.0	946,453	94.6
1年以下		853	0.0	163	0.0	3,620	0.1	198	0.0
1年超5年以下		75,943	2.7	18,193	1.9	78,435	2.7	18,499	1.9
5年超10年以下		38,240	1.4	18,979	1.9	47,479	1.6	22,408	2.2
10年超15年以下		20,953	0.8	16,215	1.7	16,246	0.6	12,206	1.2
15年超20年以下		63	0.0	117	0.0	73	0.0	120	0.0
20年超25年以下		87	0.0	638	0.1	78	0.0	540	0.1
25年超		2	0.0	2	0.0	2	0.0	0	0.0
合計		2,772,273	100.0	975,116	100.0	2,895,630	100.0	1,000,428	100.0
1件当たり平均期間		—				—			

(注) 「1件当たり平均期間」は、リボルビングによる契約を含んでおりますので算出しておりません。

⑥ 資金調達の内訳

借入先等	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
	残高(百万円)	平均調達金利 (%)	残高(百万円)	平均調達金利 (%)
金融機関等からの借入	447,960	1.21	440,933	0.96
その他	286,558	1.08	284,209	0.97
(社債・CP)	(286,558)	(1.08)	(284,209)	(0.97)
合計	734,519	1.16	725,142	0.96
自己資本	511,295	—	542,754	—
(資本金)	(63,832)	(—)	(63,832)	(—)

(注) 「自己資本」は、資産の合計額より負債の合計額及び純資産の部の非支配株主持分の額並びに配当金の予定額を控除し、引当金(特別法上の引当金を含む)の合計額を加えた額を記載しております。

⑦ 提出会社の営業実績

(イ) 事業別店舗数及び利用者数

(A) 店舗数及び現金自動設備台数

区分		前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
店舗	(店)	1,042	1,000
	有人店舗 (店)	22	22
	無人店舗 (店)	1,020	978
自動契約コーナー数		(台)	1,042カ所(1,082)
ATM	(台)	56,128	51,737
	自社設置分 (台)	1,057	1,014
	提携分 (台)	55,071	50,723
	(提携先) (社)	(17)	(16)

(注) 上記ローン事業店舗1,000店舗の他、「貸金業法」に基づき、有人店舗併設の自動契約機（自動契約コーナー22カ所（前事業年度22カ所））、店舗外に設置している現金自動設備6台（前事業年度6台）及び、自動契約機等による各種申込・届出受付業務を行うサービスセンター1カ所（前事業年度1カ所）を店舗として登録しております。

(B) 利用者数

事業別	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
ローン事業 (件)	1,486,114	1,539,957
クレジットカード事業 (名)	400,220	426,572

(注) 上記事業の利用者数の範囲は次のとおりであります。

- ・ローン事業 営業貸付金残高を有する口座数
- ・クレジットカード事業 「MasterCard®」有効会員数

(ロ) 営業収益の内訳

事業別営業収益

事業別	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
	金額(百万円)	構成割合(%)	金額(百万円)	構成割合(%)
ローン事業	133,281	68.2	136,674	67.1
無担保ローン	132,517	67.8	136,046	66.8
消費者向	132,516	67.8	136,045	66.8
事業者向	0	0.0	0	0.0
有担保ローン	763	0.4	628	0.3
クレジットカード事業	6,545	3.4	8,154	4.0
信用保証事業	55,401	28.4	58,729	28.9
その他	81	0.0	78	0.0
合計	195,310	100.0	203,636	100.0

(ハ) 金融サービス事業の取扱高及び期末残高

(A) 取扱高

事業別		前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
		金額(百万円)	構成割合(%)	金額(百万円)	構成割合(%)
ローン事業	無担保ローン	370,952	89.9	372,221	89.5
	消費者向	370,952	89.9	372,221	89.5
	事業者向	—	—	—	—
	有担保ローン	21	0.0	18	0.0
	計	370,973	89.9	372,240	89.5
クレジットカード事業		41,476	10.1	43,523	10.5
合計		412,450	100.0	415,764	100.0

(注) 上記事業の内容及び取扱高の範囲は次のとおりであります。

- ・ローン事業 当社が直接顧客に金銭を貸付ける取引であり、取扱高の範囲は顧客に対する期中の融資額であります。
- ・クレジットカード事業 クレジットカードによる包括的審査に基づいたあっせん取引であり、取扱高の範囲はクレジットカードによる期中のショッピング信用供与額であります。

(B) 期末残高

事業別		前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)	
		残高(百万円)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
ローン事業	無担保ローン	797,288	93.2	816,742	92.3
	消費者向	797,284	93.2	816,738	92.3
	事業者向	3	0.0	3	0.0
	有担保ローン	6,077	0.7	5,201	0.6
	計	803,365	93.9	821,943	92.9
クレジットカード事業		52,445	6.1	63,137	7.1
合計		855,811	100.0	885,081	100.0

(二) 営業貸付金の増減額及び残高

項目	前事業年度 (2018年3月31日)			当事業年度 (2019年3月31日)		
	合計金額 (百万円)	無担保ローン (百万円)	有担保ローン (百万円)	合計金額 (百万円)	無担保ローン (百万円)	有担保ローン (百万円)
期首残高	784,806	777,535	7,270	803,365	797,288	6,077
期中貸付額	370,973	370,952	21	372,240	372,221	18
期中回収額	320,943	319,807	1,136	323,246	322,383	863
破産再生更生 債権等振替額	587	562	25	627	621	6
期中貸倒損失額	30,881	30,828	53	29,787	29,763	24
期末残高	803,365	797,288	6,077	821,943	816,742	5,201
平均貸付金残高	793,490	786,784	6,706	812,008	806,357	5,650

(ホ) 営業貸付金残高の内訳

(A) 貸付種別残高

貸付種別		前事業年度 (2018年3月31日)					当事業年度 (2019年3月31日)				
		件数(件)	構成 割合 (%)	残高 (百万円)	構成 割合 (%)	平均 約定 金利 (%)	件数(件)	構成 割合 (%)	残高 (百万円)	構成 割合 (%)	平均 約定 金利 (%)
消費者向	無担保(住宅 向を除く)	1,483,883	99.9	797,284	99.2	15.64	1,538,022	99.9	816,738	99.4	15.62
	有担保(住宅 向を除く)	2,207	0.1	5,980	0.8	11.57	1,915	0.1	5,110	0.6	11.58
	住宅向	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	1,486,090	100.0	803,265	100.0	15.61	1,539,937	100.0	821,848	100.0	15.60
事業者向	無担保	4	0.0	3	0.0	14.91	3	0.0	3	0.0	15.00
	有担保	20	0.0	96	0.0	9.57	17	0.0	91	0.0	8.90
	計	24	0.0	100	0.0	9.77	20	0.0	95	0.0	9.13
合計		1,486,114	100.0	803,365	100.0	15.61	1,539,957	100.0	821,943	100.0	15.60

(B) 業種別残高

業種別	前事業年度 (2018年3月31日)				当事業年度 (2019年3月31日)			
	件数(件)	構成割合 (%)	金額 (百万円)	構成割合 (%)	件数(件)	構成割合 (%)	金額 (百万円)	構成割合 (%)
農業、林業、漁業	1	0.0	0	0.0	—	—	—	—
建設業	6	0.0	18	0.0	5	0.0	17	0.0
製造業	1	0.0	2	0.0	1	0.0	1	0.0
電気・ガス・熱供給・水道業	—	—	—	—	—	—	—	—
情報通信業	1	0.0	4	0.0	1	0.0	4	0.0
運輸業、郵便業	1	0.0	4	0.0	1	0.0	4	0.0
卸売業、小売業	5	0.0	11	0.0	3	0.0	9	0.0
金融業、保険業	1	0.0	4	0.0	1	0.0	3	0.0
不動産業、物品賃貸業	1	0.0	26	0.0	1	0.0	26	0.0
宿泊業、飲食サービス業	2	0.0	12	0.0	2	0.0	11	0.0
教育、学習支援業	—	—	—	—	—	—	—	—
医療、福祉	1	0.0	0	0.0	—	—	—	—
複合サービス業	—	—	—	—	—	—	—	—
サービス業（他に分類されないもの）	4	0.0	14	0.0	5	0.0	14	0.0
個人	1,486,090	100.0	803,265	100.0	1,539,937	100.0	821,848	100.0
特定非営利活動法人	—	—	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	1,486,114	100.0	803,365	100.0	1,539,957	100.0	821,943	100.0

(注) 個人事業主に対する事業性貸付は、「個人」以外の該当する業種に記載しております。

(C) 男女別・年令別消費者向無担保ローン残高

男女別・年令別		前事業年度 (2018年3月31日)				当事業年度 (2019年3月31日)			
		件数(件)	構成割合 (%)	残高 (百万円)	構成割合 (%)	件数(件)	構成割合 (%)	残高 (百万円)	構成割合 (%)
男性	18～19才	—	—	—	—	—	—	—	—
	20～29才	277,680	18.7	117,735	14.8	300,824	19.6	124,440	15.2
	30～39才	266,968	18.0	157,944	19.8	270,684	17.6	159,581	19.5
	40～49才	252,839	17.0	181,441	22.7	250,592	16.3	179,468	22.0
	50～59才	176,101	11.9	135,201	17.0	180,096	11.7	138,215	16.9
	60才以上	116,965	7.9	59,586	7.5	119,256	7.7	61,720	7.6
	計	1,090,553	73.5	651,910	81.8	1,121,452	72.9	663,426	81.2
女性	18～19才	—	—	—	—	—	—	—	—
	20～29才	96,355	6.5	31,014	3.9	108,880	7.1	34,286	4.2
	30～39才	84,233	5.7	31,452	3.9	87,398	5.7	32,558	4.0
	40～49才	96,131	6.5	38,167	4.8	98,094	6.4	39,155	4.8
	50～59才	69,855	4.7	29,451	3.7	73,787	4.8	31,161	3.8
	60才以上	46,756	3.1	15,290	1.9	48,411	3.1	16,151	2.0
	計	393,330	26.5	145,374	18.2	416,570	27.1	153,312	18.8
合計		1,483,883	100.0	797,284	100.0	1,538,022	100.0	816,738	100.0

(D) 担保種類別残高

受入担保の種類	前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)	
	残高(百万円)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
有価証券 (うち株式)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
債権 (うち預金)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
商品	—	—	—	—
不動産	6,018	0.8	5,143	0.6
財団	—	—	—	—
その他	58	0.0	58	0.0
計	6,077	0.8	5,201	0.6
保証	—	—	—	—
無担保	797,288	99.2	816,742	99.4
合計	803,365	100.0	821,943	100.0

(E) 貸付金額別残高

貸付金額別		前事業年度 (2018年3月31日)				当事業年度 (2019年3月31日)			
		件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)	件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
無担保ローン	10万円以下	187,642	12.6	11,885	1.5	198,519	12.9	12,605	1.6
	10万円超	342,575	23.1	72,365	9.0	364,068	23.6	77,145	9.4
	30万円以下	500,487	33.7	216,456	26.9	515,811	33.5	222,960	27.1
	30万円超	453,183	30.5	496,581	61.8	459,627	29.9	504,030	61.3
	50万円以下								
	50万円超								
計		1,483,887	99.9	797,288	99.2	1,538,025	99.9	816,742	99.4
有担保ローン	100万円以下	517	0.0	275	0.0	494	0.0	254	0.0
	100万円超	1,451	0.1	3,759	0.5	1,213	0.1	3,178	0.4
	500万円以下	215	0.0	1,442	0.2	189	0.0	1,270	0.1
	1,000万円以下	44	0.0	600	0.1	36	0.0	498	0.1
	1,000万円超	—	—	—	—	—	—	—	—
	5,000万円以下	—	—	—	—	—	—	—	—
	5,000万円超	—	—	—	—	—	—	—	—
	1億円以下	—	—	—	—	—	—	—	—
	1億円超	—	—	—	—	—	—	—	—
	計	2,227	0.1	6,077	0.8	1,932	0.1	5,201	0.6
合計		1,486,114	100.0	803,365	100.0	1,539,957	100.0	821,943	100.0
1件当たり平均 貸付金残高(千円)		—	—	540	—	—	—	533	—
無担保ローン		—	—	537	—	—	—	531	—
有担保ローン		—	—	2,728	—	—	—	2,692	—

(F) 貸付期間別残高

貸付期間別		前事業年度 (2018年3月31日)				当事業年度 (2019年3月31日)			
		件数(件)	構成割合 (%)	残高 (百万円)	構成割合 (%)	件数(件)	構成割合 (%)	残高 (百万円)	構成割合 (%)
無担保 ローン	リボルビング	1,388,134	93.4	750,554	93.4	1,435,749	93.2	770,159	93.7
	1年以下	833	0.1	126	0.0	978	0.1	142	0.0
	1年超5年以下	36,008	2.4	12,156	1.5	37,793	2.5	12,444	1.5
	5年超10年以下	37,985	2.6	18,478	2.3	47,264	3.1	21,987	2.7
	10年超15年以下	20,875	1.4	15,933	2.0	16,179	1.0	11,964	1.5
	15年超20年以下	47	0.0	34	0.0	56	0.0	39	0.0
	20年超25年以下	4	0.0	4	0.0	4	0.0	3	0.0
	25年超	1	0.0	0	0.0	2	0.0	0	0.0
	計	1,483,887	99.9	797,288	99.2	1,538,025	99.9	816,742	99.4
有担保 ローン	リボルビング	1,684	0.1	4,347	0.6	1,472	0.1	3,767	0.5
	1年以下	16	0.0	36	0.0	5	0.0	13	0.0
	1年超5年以下	110	0.0	201	0.0	96	0.0	147	0.0
	5年超10年以下	239	0.0	489	0.1	201	0.0	413	0.0
	10年超15年以下	78	0.0	282	0.0	67	0.0	242	0.0
	15年超20年以下	16	0.0	83	0.0	17	0.0	81	0.0
	20年超25年以下	83	0.0	634	0.1	74	0.0	536	0.1
	25年超	1	0.0	1	0.0	—	—	—	—
	計	2,227	0.1	6,077	0.8	1,932	0.1	5,201	0.6
リボルビング		1,389,818	93.5	754,902	94.0	1,437,221	93.3	773,927	94.2
1年以下		849	0.1	163	0.0	983	0.1	156	0.0
1年超5年以下		36,118	2.4	12,357	1.5	37,889	2.5	12,591	1.5
5年超10年以下		38,224	2.6	18,967	2.4	47,465	3.1	22,400	2.7
10年超15年以下		20,953	1.4	16,215	2.0	16,246	1.0	12,206	1.5
15年超20年以下		63	0.0	117	0.0	73	0.0	120	0.0
20年超25年以下		87	0.0	638	0.1	78	0.0	540	0.1
25年超		2	0.0	2	0.0	2	0.0	0	0.0
合計		1,486,114	100.0	803,365	100.0	1,539,957	100.0	821,943	100.0
1件当たり平均期間		—				—			

(注) 「1件当たり平均期間」は、リボルビングによる契約を含んでおりますので算出しておりません。

(G) 貸付利率別残高

貸付利率別		前事業年度 (2018年3月31日)				当事業年度 (2019年3月31日)			
		件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)	件数(件)	構成割合(%)	残高(百万円)	構成割合(%)
無担保ローン	年率10.0%以下	84,519	5.7	41,291	5.1	93,038	6.0	44,490	5.4
	年率10.0%超15.0%以下	349,736	23.5	371,127	46.2	348,729	22.7	374,258	45.6
	年率15.0%超18.0%以下	1,032,094	69.5	375,683	46.8	1,082,229	70.3	390,438	47.5
	年率18.0%超20.0%以下	1,260	0.1	1,955	0.2	1,081	0.1	1,643	0.2
	年率20.0%超	16,278	1.1	7,230	0.9	12,948	0.8	5,910	0.7
	計	1,483,887	99.9	797,288	99.2	1,538,025	99.9	816,742	99.4
有担保ローン	年率10.0%以下	518	0.0	1,869	0.3	451	0.0	1,592	0.2
	年率10.0%超15.0%以下	1,708	0.1	4,206	0.5	1,480	0.1	3,607	0.4
	年率15.0%超18.0%以下	1	0.0	1	0.0	1	0.0	1	0.0
	計	2,227	0.1	6,077	0.8	1,932	0.1	5,201	0.6
合計		1,486,114	100.0	803,365	100.0	1,539,957	100.0	821,943	100.0

(へ) 資金調達の内訳

(A) 調達別内訳

借入先等	前事業年度 (2018年3月31日)		当事業年度 (2019年3月31日)	
	残高(百万円)	平均調達金利 (%)	残高(百万円)	平均調達金利 (%)
金融機関等からの借入	396,722	0.98	393,594	0.74
その他 (社債・CP)	230,998 (230,998)	0.64 (0.64)	230,998 (230,998)	0.55 (0.55)
合計	627,720	0.85	624,592	0.67
自己資本 (資本金)	453,960 (63,832)	— (—)	479,775 (63,832)	— (—)

(注) 「自己資本」は、資産の合計額より負債の合計額並びに配当金の予定額を控除し、引当金（特別法上の引当金を含む）の合計額を加えた額を記載しております。

(B) 金融機関別内訳

金融機関別		前事業年度 (2018年3月31日)				当事業年度 (2019年3月31日)			
		期首残高 (百万円)	調達額 (百万円)	返済額 (百万円)	期末残高 (百万円)	期首残高 (百万円)	調達額 (百万円)	返済額 (百万円)	期末残高 (百万円)
借入金	都市銀行等	138,321	23,800	19,098	143,023	143,023	277,270	116,892	303,401
	地方銀行	41,918	14,800	16,234	40,484	40,484	18,035	16,992	41,527
	信託銀行	156,908	57,176	54,876	159,208	159,208	—	158,708	500
	外国銀行	3,000	1,000	1,300	2,700	2,700	500	700	2,500
	生命保険会社	21,902	6,000	9,500	18,402	18,402	6,000	9,472	14,930
	損害保険会社	4,459	2,500	2,664	4,295	4,295	500	1,164	3,631
	事業会社(リース・ファイナンス会社等)	2,812	800	1,112	2,500	2,500	500	940	2,060
	その他の金融機関	24,237	8,500	6,626	26,110	26,110	6,700	7,765	25,045
計		393,557	114,576	111,410	396,722	396,722	309,505	312,633	393,594
コマーシャル・ペーパー		14,997	130,001	115,000	29,998	29,998	159,999	150,000	39,998
社債(一年以内償還予定を含む)		201,000	25,000	25,000	201,000	201,000	25,000	35,000	191,000
計		215,997	155,001	140,000	230,998	230,998	184,999	185,000	230,998
合計		609,554	269,577	251,410	627,720	627,720	494,505	497,633	624,592

(注) 都市銀行等には、株式会社新生銀行及び株式会社あおぞら銀行を含めて記載しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

ローン・クレジットカード事業及び信用保証事業の業務分野においてA Iを活用したデータ分析やR P Aを利用した業務の自動化の研究開発活動を行っております。

当連結会計年度における研究開発費の総額は111百万円であります。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度において、特筆すべき設備投資はありません。

なお、当連結会計年度において売却した重要な設備は以下のとおりであります。

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	前期末帳簿価額(百万円)					売却時期
			建物及び 構築物	器具備品	土地 (面積㎡)	リース資産	合計	
南柏社宅 (千葉県柏市) 他2件	全社(共通)	社宅	605	0	2,986 (10,247.77)	—	3,593	2019年3月

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける、主要な設備は以下のとおりであります。

(1) 提出会社

2019年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名) [ほか、有期契 約雇用人員]
			建物及び 構築物	器具備品	土地 (面積㎡)	リース資産	合計	
本社(注)1 (東京都千代田区)	全社(共通)	その他設備	35	8,047	—	7	8,089	343 [8]
ACOM池上ビル (東京都大田区)	全社(共通)	その他設備	191	122	—	820	1,133	—
都立大学社宅 (東京都目黒区) 他4件	全社(共通)	社宅	690	1	3,123 (3,008.04)	—	3,814	—
西新宿支店 (東京都新宿区) 他999店舗等	ローン・ クレジットカ ード事業	店舗 その他設備	2,164 11	652 101	— —	107 326	2,924 439	1,110 [56]

(注) 1 2004年12月から建物の一部を賃借しており、賃借料は416百万円であります。

2 上記(注)1以外に、土地及び建物の一部を賃借している賃借料は3,924百万円であります。

3 上記金額には消費税等を含んでおりません。

4 現在休止中の主要な設備はありません。

5 上記の他、連結子会社以外からの主要な賃借設備の内容は下記のとおりであります。

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	台数	リース 期間	年間 リース料 (百万円)	リース 契約残高 (百万円)
本社 (東京都千代田区) 他1件	全社(共通)	自動契約機	2	5年間	1	0
		車両	2	3年間	3	7
ACOM池上ビル (東京都大田区) 他1件	全社(共通)	コンピューター機器他	619	主に5年間	366	1,219
西新宿支店 (東京都新宿区) 他999店舗	ローン・クレジット カード事業	自動契約機	297	5年間	205	122

(注) 上記金額には消費税等を含んでおりません。

(2) 国内子会社

該当事項はありません。

(3) 在外子会社

該当事項はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

該当事項はありません。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	5,321,974,000
計	5,321,974,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2019年6月21日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	1,596,282,800	1,596,282,800	東京証券取引所 (市場第一部)	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	1,596,282,800	1,596,282,800	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③ 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2013年10月1日	1,436,654	1,596,282	—	63,832	—	72,322

(注) 2013年6月21日開催の取締役会決議により、効力発生日を2013年10月1日として、1株につき10株の割合で株式分割いたしました。

(5) 【所有者別状況】

2019年3月31日現在

2019年6月31日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（名）	—	29	41	109	403	6	11,201	11,789	—
所有株式数（単元）	—	1,338,341	36,926	12,035,680	736,394	346	1,814,980	15,962,667	16,100
所有株式数の割合（%）	—	8.38	0.23	75.40	4.62	0.00	11.37	100.00	—

(注) 1 自己株式29,668,592株は「個人・その他」に296,685単元、単元未満株式の状況に92株含んでおります。

2 上記「その他の法人」には、証券保管振替機構名義の株式を30単元含んでおります。

(6) 【大株主の状況】

2019年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	588,723	37.57
丸糸殖産株式会社	大阪市浪速区湊町一丁目2番3号	273,467	17.45
マルイト株式会社	大阪市浪速区湊町一丁目2番3号	125,533	8.01
公益財団法人木下記念事業団	神戸市中央区元町通六丁目2番14号	92,192	5.88
株式会社丸糸商店	大阪市浪速区湊町一丁目2番3号	38,733	2.47
一般社団法人恭栄会信託口	東京都中央区銀座一丁目16番7号	32,598	2.08
三菱UFJ信託銀行株式会社 (常任代理人日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	31,572	2.01
木下盛好	東京都港区	30,007	1.91
株式会社暢佳	大阪市浪速区湊町一丁目2番3号	30,000	1.91
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	27,059	1.72
計	—	1,269,888	81.05

(注) 1 上記のほか、当社所有の自己株式29,668千株があります。

2 所有株式数は、千株未満を切り捨てて表示しております。

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 29,668,500	—	—
完全議決権株式(その他)	普通株式 1,566,598,200	15,665,982	—
単元未満株式	普通株式 16,100	—	—
発行済株式総数	1,596,282,800	—	—
総株主の議決権	—	15,665,982	—

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、証券保管振替機構名義の株式が3,000株(議決権30個)含まれております。

2 「単元未満株式」欄の普通株式には、当社所有の自己株式92株が含まれております。

② 【自己株式等】

2019年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) アコム株式会社	東京都千代田区丸の内 二丁目1番1号	29,668,500	—	29,668,500	1.85
計	—	29,668,500	—	29,668,500	1.85

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 普通株式

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

該当事項はありません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (千円)	株式数(株)	処分価額の総額 (千円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る 移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
保有自己株式数	29,668,592	—	29,668,592	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当社の配当政策といたしましては、当社の業績、自己資本並びに当社を取り巻く経営環境を勘案の上、安定的、継続的な利益還元をはかる事を基本方針としております。

当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当事業年度における期末配当金につきましては、2019年5月14日に公表いたしました「決算短信」に記載のとおり、1株につき1円といたしました。

また、次期の配当については、1株につき中間2円、期末2円の年間4円を予定しております。

今後の当社グループの長期安定成長に向け、グループ一丸となってより一層邁進する所存であります。

内部留保金につきましては、財務基盤の拡充に活用してまいります。

なお、当社は中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2018年11月1日 取締役会決議	1,566	1
2019年6月21日 定時株主総会決議	1,566	1

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社グループは、創業の精神であります「信頼の輪」のもと、「人間尊重の精神」、「お客さま第一義」、「創造と革新の経営」を企業理念に掲げ、ステークホルダーの皆さまとの相互信頼を深め、社会とともに発展していくことを目指しております。

当社は、ステークホルダーの皆さまの期待に応え、さらなる信頼関係を構築するため、コーポレート・ガバナンスの充実を経営の重要事項に位置付け、経営の健全性、透明性及び効率性を確保し、継続的な株主価値の向上をはかります。

また、適正なコーポレート・ガバナンス体制の構築には、有効な内部統制システムが不可欠であるとの認識に基づき、代表取締役社長兼会長のリーダーシップのもと、組織内のすべての構成員が内部統制システムの構築及び実効性の確保にあたりるとともに、内部統制システムの有効性を常に評価、検証し、継続的に改善しております。

② 企業統治の体制

イ．企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、監査等委員会設置会社であり、意思決定の迅速化と取締役会の監督機能の強化をはかるため、重要な業務執行の決定を、取締役会から取締役に大幅に委任するとともに、取締役会は委任した事項のモニタリング等を実施しております。

また、経営の透明性と客観性の向上をはかるため、社外取締役が過半を占める監査等委員会が監査・監督機能を行使しております。

当社が設置する機関は、以下のとおりです。

(A) 取締役会

取締役会は、代表取締役社長兼会長である木下 盛好を議長とし、和地 薫、木下 政孝、提橋 輝幸、内田 智視、堀 直樹、監査等委員である伊藤 達哉（社外取締役）、福元 一雄、石川 昌秀（社外取締役）の9名で構成されております。

業務執行を行わない取締役4名（内、社外取締役2名）は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を当社と締結しております。なお、当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令の定める最低責任限度額としております。

取締役会は、経営戦略、経営計画等経営上の重要事項、コーポレート・ガバナンス及び内部統制システム構築の基本方針について客観的・合理的判断を確保しつつ審議、決定するとともに、取締役会で決議すべき事項以外の業務執行の決定を取締役社長に委任し、委任した事項のモニタリング等を通じて、業務執行の監視、監督を行っております。

なお、取締役会は、原則として3ヵ月に1回以上開催、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。

(B) 監査等委員会

監査等委員会は、伊藤 達哉（社外取締役）を委員長とし、福元 一雄、石川 昌秀（社外取締役）の3名で構成されております。

監査等委員会は、定期に開催し、監査・監督に関する重要な事項について報告を受け、協議・決議を行っております。

なお、監査等委員会の職務を補助するため、監査等委員会事務局を設置し、その職務を補助する社員を配置しております。監査等委員会を補助する社員は、監査等委員会の補助業務の専従とし、取締役（監査等委員であるものを除く。）及びその他の業務執行組織の指揮命令を受けないものとしております。また、監査等委員会を補助する社員の配置、異動、評価、懲戒処分等については、事前に監査等委員会と協議のうえ決定しております。

(C) 各種委員会

(a) 指名・報酬委員会

指名・報酬委員会は、代表取締役社長兼会長である木下 盛好を委員長とし、代表取締役である和地 薫、木下 政孝、監査等委員である伊藤 達哉（社外取締役）、福元 一雄、石川 昌秀（社外取締役）の6名で構成されております。

取締役会で決議する取締役（監査等委員であるものを除く。）の候補者の選任や報酬等について検討・提案を行うとともに、経営陣および経営陣候補の育成状況を確認し、その概要を取締役会へ報告しております。

なお、指名・報酬委員会は、原則として年間2回開催、必要に応じて臨時委員会を開催しております。

(b) コンプライアンス委員会

コンプライアンス委員会は、社外有識者である本間 達三を委員長とし、社外有識者である梅津 光弘、タン ミッシェル、代表取締役である木下 盛好、和地 薫の5名で構成されております。

監査等委員の出席のもと、コンプライアンスに関する以下の項目について審議し、必要に応じて取締役会への提言を行っております。

- アコムグループ倫理綱領、行動基準の制定及び改廃に係る事項
- 態勢の整備及び運用に係る重要事項
- 基本計画の策定に係る事項
- 重大な違反事態の是正、改善措置及び再発防止策に係る事項
- その他コンプライアンスに係る重要事項

なお、コンプライアンス委員会は、原則として年間6回開催、必要に応じて臨時委員会を開催しております。

(c) 財務情報開示委員会

財務情報開示委員会は、財務第二部担当役付執行役員である松谷 信吉を委員長とし、関連部室の担当役付執行役員である梶橋 輝幸、内田 智視、近藤 誠、木下 政孝、関連部室の部室長である木下 昭文、岡本 貴史、岩村 真光、泉 明秀、桐渕 高志、町田 雅彦、原口 大史の12名で構成されております。

監査等委員の出席のもと、財務情報や財務報告に係る内部統制の開示が関連法令等に従って、適時、適切に行われるよう、取締役会で決議する財務情報開示態勢の整備に関する事項、開示すべき財務情報等について事前審議を行っております。

なお、財務情報開示委員会は、原則として3ヵ月に1回以上開催、必要に応じて臨時委員会を開催しております。

(d) リスク委員会

リスク委員会は、代表取締役副会長である和地 薫を委員長とし、代表取締役である木下 盛好、木下 政孝、監査等委員である伊藤 達哉（社外取締役）、福元 一雄、石川 昌秀（社外取締役）、リスク統括部担当役付執行役員である近藤 誠の7名で構成されております。

リスク管理に関する重要事項について審議し、必要に応じて取締役会への提言・報告を行うとともに、重要なリスクの管理状況等をモニタリングし、その結果を取締役会へ報告しております。

なお、リスク委員会は、原則として3ヵ月に1回以上開催、必要に応じて臨時委員会を開催しております。

(D) 経営会議

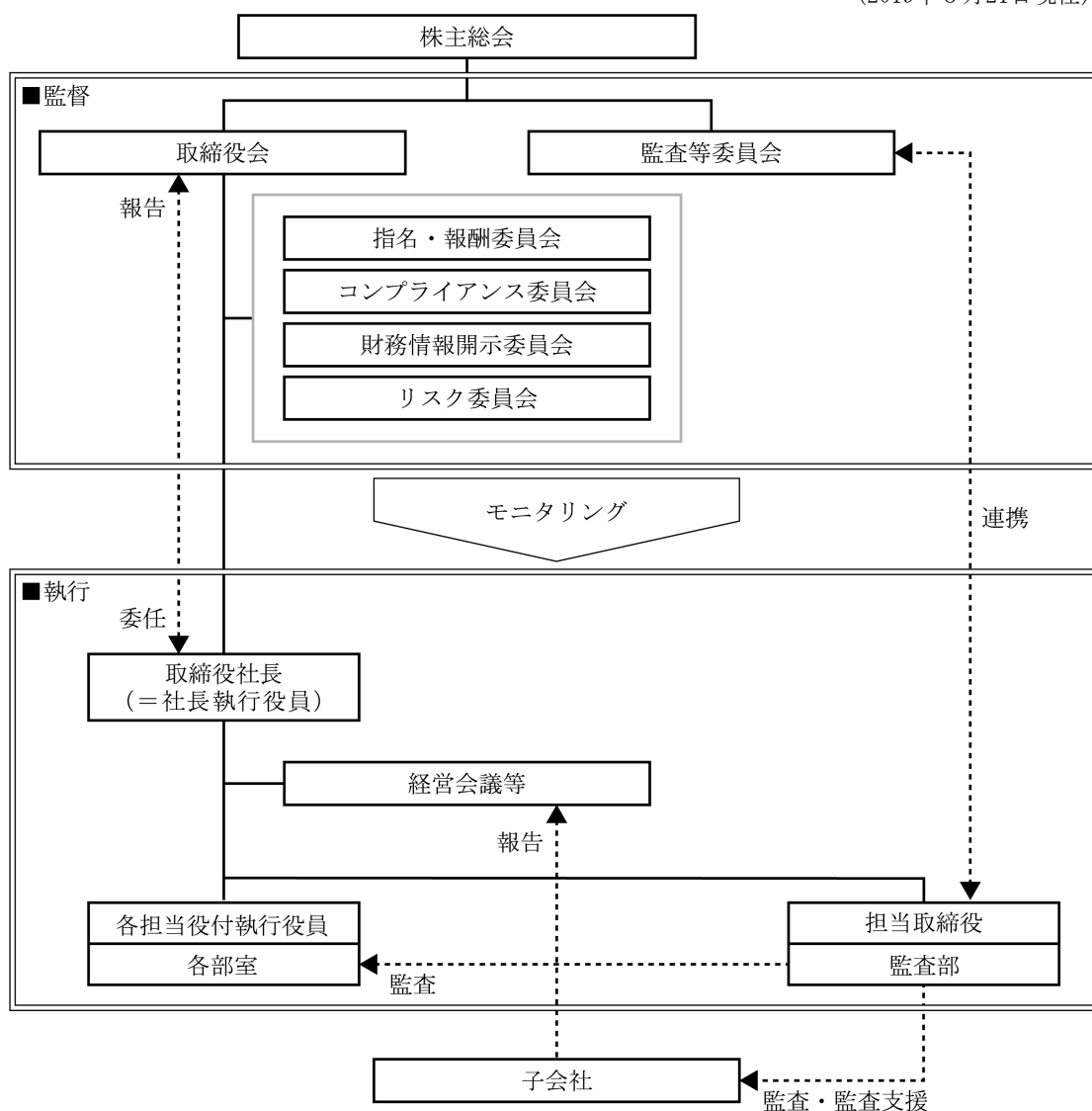
経営会議は、代表取締役社長兼会長である木下 盛好を議長とし、代表取締役である和地 薫、木下 政孝、役付執行役員である提橋 輝幸、内田 智視、松谷 信吉、近藤 誠、嘉村 康裕、黒田 大、小野寺 道人の10名で構成されております。

監査等委員の出席のもと、取締役会で決議された基本方針に基づき、取締役会から取締役社長に委任された重要な業務執行の決定等について審議、決定するとともに、取締役会で決議する経営方針、経営計画等について事前審議を行っております。

なお、経営会議は、原則として毎月3回開催、必要に応じて臨時経営会議を開催しております。

ロ. 企業統治の体制及び内部統制の模式図

(2019年6月21日現在)



ハ. その他の企業統治に関する事項

(A) 内部統制システムに関する基本的な考え方及びその整備状況

当社は、会社法第399条の13第1項第1号ロ、同条同項同号ハ、会社法施行規則第110条の4に基づき、会社の業務の適正を確保するための体制の整備について、以下のとおり決議しております。

当社は、当該体制について、定期的に整備状況を評価し、必要に応じて改善措置を講じ、経営環境の変化等に対応した見直しを行い、内部統制システムの実効性向上に努めております。

<内部統制システム構築の基本方針>

1. 当社及び当社の子会社の取締役・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
 - (1) 当社は、コンプライアンスを経営の最重要事項と位置付け、アコムグループ倫理綱領及び行動基準を制定するとともに、コンプライアンスに関する規程及び各種社内規程を整備し、周知徹底する。
 - (2) 当社及び当社の子会社は、コンプライアンスに関する委員会等や、コンプライアンスを担当する役員及び統括部署を設置する。
 - (3) 当社及び当社の子会社は、コンプライアンス計画を策定し、その進捗状況を管理する。
 - (4) 当社及び当社の子会社は、コンプライアンスに反する行為又は反するおそれのある行為に関する通報、相談窓口を設置する。
 - (5) 当社は、アコムグループ倫理綱領及び当社グループの反社会的勢力に対する基本方針に基づき、反社会的勢力との関係を遮断し、適正な業務運営を確保するための体制を整備する。
 - (6) 当社は、当社グループの財務報告に係る内部統制の基本方針に基づき、財務報告の正確性、信頼性を確保し、あわせて財務情報開示委員会を設置し、財務情報の開示体制を整備する。
 - (7) 当社は、内部監査部署を設置し、その独立性及び専門性を確保するとともに、内部監査に関する規程に基づき、内部監査体制を整備し、業務の健全性・適切性を確保する。また、当社の内部監査部署は、当社の子会社の内部統制の整備に資するため、当社の子会社の監査又は監査の支援等を行う。
2. 当社の取締役の職務の執行に係る情報の保存・管理に関する体制
 - (1) 当社は、機密情報の管理に関する規程及び関連規程に基づき、取締役の職務の執行に係る文書（電磁的記録を含む）の管理手続きを定め、当該文書を適切に保存、管理し、必要に応じて閲覧可能な状態を維持する。
 - (2) 当社は、情報の保存、管理の適切性を維持するため、情報セキュリティに関する責任者の任命をはじめとして、各組織及び役職員の役割を決定し、組織的、体系的に情報の保存、管理を行うとともに、保存、管理状況を定期的に検証する。
3. 当社及び当社の子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
 - (1) 当社及び当社の子会社は、リスク管理に関する規程に基づき、適切かつ効率的なリスク管理体制を整備する。
 - (2) 当社及び当社の子会社は、リスクを統合的に管理するため、リスク管理に関する委員会等や、リスク管理を担当する役員及び統括部署を設置する。
 - (3) 当社及び当社の子会社は、社内又は社外に重大な影響を及ぼす可能性のあるリスクが顕在化した場合の経済的損失及び信用失墜等の最小化をはかるとともに、業務の継続及び迅速な業務復旧を行うための体制を整備する。
4. 当社及び当社の子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - (1) 当社は、当社グループの経営方針及び経営計画を策定し、適切な手法に基づく経営管理を行う。
 - (2) 当社は、取締役会で決議すべき事項以外の業務執行の決定を取締役会から取締役社長に委任するとともに、取締役社長を議長とする経営会議を設置し、受任事項について協議決定する。
 - (3) 当社及び当社の子会社は、社内規程等により各組織の業務分掌及び職位ごとの決裁基準を定め、意思決定の迅速化と職務執行の効率化をはかる。

5. 当社並びに親会社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- (1) 当社は、株式公開企業としての独立性を維持しつつ、親会社との協議・報告等に関する規程に基づき、親会社との連携をはかるとともに、親会社のグループ経営管理方針等に則り、両グループの業務の適正化に資するため、当社グループの経営管理体制を整備する。
 - (2) 当社は、当社の子会社を管理する部署を設置し、子会社管理に関する規程等に基づき、当社の子会社の経営管理を行う。また、当社の子会社は、経営及び業務執行に関する重要事項を当社の経営会議に報告する。
6. 当社の監査等委員会の職務を補助する使用人に関する体制
- (1) 当社は、監査等委員会の職務を補助するため、監査等委員会事務局を設置し、監査等委員会を補助する社員を配置する。
 - (2) 監査等委員会を補助する社員の定数及び資格要件等については、事前に監査等委員会と協議して決定する。
 - (3) 監査等委員会を補助する社員は、監査等委員会補助業務の専従とし、取締役（監査等委員であるものを除く。）及びその他の業務執行組織の指揮命令を受けないものとする。
 - (4) 監査等委員会を補助する社員の配属、異動、評価、懲戒処分に関する決定は、事前に監査等委員会と協議して決定する。
7. 当社の監査等委員会への報告に関する体制
- 当社は、当社及び当社の子会社における以下の事項を監査等委員会に報告する。また、監査等委員会に報告を行った者に対して、当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを行わない。
- ① 会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事項
 - ② 重大な法令違反等
 - ③ 内部監査の実施状況及びその結果
 - ④ 内部通報の状況及び通報された事案の内容
 - ⑤ その他監査等委員会が報告を求める事項
8. その他当社の監査等委員会による監査が実効的に行われることを確保するための体制
- (1) 当社は、監査等委員会が選定した監査等委員が、経営会議等の重要な会議及び委員会に出席し、あわせて、法定備え付け文書のほか職務執行に関する重要文書について閲覧できる体制を確保する。
 - (2) 取締役社長は、監査等委員会が選定した監査等委員と定期的に会合を持ち、会社が対処すべき課題、職務執行の課題、監査上の重要課題等について意見を交換し、あわせて、監査等委員会が必要と判断する要請を受けた場合、その対策を講じる。
 - (3) 取締役（監査等委員であるものを除く。）及び社員は、監査等委員会規則及び監査方針等の規定を尊重するとともに、監査等委員会からの調査又はヒアリング依頼に対し、協力する。
 - (4) 内部監査部署は、監査等委員会による監査の実効性確保に資するため、監査等委員会との連携体制を構築する。
 - (5) 監査等委員会が職務の執行上必要と認める費用について監査等委員会より予算の提示を受ける。予算を超えて緊急又は臨時に支出した費用については、事後の請求を可能とする。

(B) リスク管理態勢の整備の状況

当社を取り巻く経営環境の変化にともない、管理すべきリスクも複雑・多様化しております。このような状況の中、リスクを十分認識し、経営の健全性維持と安定的な収益性、成長性の確保をはかるためにリスク管理態勢を充実・強化することが経営上の最重要課題であると認識しております。

当社では、リスクを統合的に管理するためリスク委員会を設置し、リスク管理規程において管理すべきリスク、担当部室及び管理手法等のリスク管理に関する基本的事項を明確にするとともに、リスク管理の統括部署であるリスク統括部において業務執行におけるリスクを統括・一元管理し、統合的リスク管理体制の一層の充実・強化に努めております。

また、個人情報をはじめとする情報資産の管理においては、情報セキュリティ管理規程に基づき、想定されるリスクに対し、適切な安全管理措置をはじめとする各種の対策を実施するとともに、情報セキュリティ管理責任者の任命をはじめとして、各組織及び役職員の役割を決定し、組織的、体系的に情報セキュリティの確保に努めております。

③ 取締役の定数及び取締役の選任の決議要件

当社の取締役（監査等委員であるものを除く。）は10名以内、監査等委員である取締役は5名以内とする旨を定款に定めております。

また、当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

④ 自己の株式の取得

当社は、自己の株式の取得について、業務又は財産の状況、その他の事情に対応して機動的に行えるように、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。

⑤ 取締役の責任免除

当社は、職務の遂行にあたり期待される役割を十分に発揮できるようにするため、会社法第426条第1項の規定により、任務を怠ったことによる取締役（取締役であった者を含む。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議によって免除することができる旨を定款に定めております。

⑥ 中間配当の件

当社は、株主への機動的な利益還元を行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって毎年9月30日を基準日として、中間配当ができる旨を定款に定めております。

⑦ 株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を目的として、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性9名 女性一名 (役員のうち女性の比率－%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有 株式数 (千株)
代表取締役 社長兼会長 兼 社長 執行役員	木 下 盛 好	1949年4月14日生	1973年4月 丸紅株式会社入社 1978年4月 日本消費者金融株式会社入社 1980年12月 当社入社 1983年2月 当社取締役総務部長 1984年5月 当社取締役経理部長 1986年8月 当社常務取締役 1988年6月 当社常務取締役営業推進本部長 1991年10月 当社代表取締役専務 1992年10月 当社代表取締役専務ローン営業本部長 1996年10月 当社代表取締役副社長 2000年6月 当社代表取締役社長 2003年6月 当社社長執行役員(現任) 2010年6月 当社代表取締役社長兼会長(現任)	(注) 2	30,007
代表取締役副会長 コンプライアンス統括 部、監査部担当	和 地 薫	1955年12月9日生	1978年4月 三菱信託銀行株式会社入社 2002年4月 同社大阪年金営業部長 2003年5月 株式会社東京三菱銀行信託業務部長 2004年3月 三菱信託銀行株式会社受託財産企画部長 2004年4月 株式会社三菱東京フィナンシャル・グルー プ受託業務企画部長 2005年6月 同社執行役員受託業務企画部長 2005年6月 三菱信託銀行株式会社執行役員受託財産企 画部長 2005年10月 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グル ープ執行役員受託業務企画部長 2005年10月 三菱UFJ信託銀行株式会社執行役員受託 財産企画部長 2008年6月 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グル ープ取締役 2008年6月 三菱UFJ信託銀行株式会社常務取締役 2010年6月 同社専務取締役 2011年6月 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グル ープ常務執行役員受託財産連結事業本部長 2012年6月 三菱UFJ信託銀行株式会社取締役副社長 2013年6月 エム・ユー・トラスト総合管理株式会社 代表取締役社長 2014年6月 日本マスタートラスト信託銀行株式会社 代表取締役社長 2017年6月 当社代表取締役副会長(現任)	(注) 2	10

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有 株式数 (千株)
代表取締役 副社長 兼 副社長 執行役員 経営企画部、人事部、 システム統轄部担当	木 下 政 孝	1977年9月19日生	2005年9月 2009年10月 2010年1月 2010年4月 2012年4月 2013年4月 2014年4月 2014年6月 2015年4月 2015年6月 2015年6月 2016年6月 2017年6月 2017年6月	当社入社 当社審査本部部長 当社経営企画部部長 当社保証事業部部長 当社営業推進部部長 当社営業企画部長 当社執行役員営業企画部長 当社常務執行役員営業副本部長兼営業企画部長 当社常務執行役員営業副本部長 当社常務取締役 当社常務執行役員営業本部長 当社常務執行役員 当社代表取締役副社長(現任) 当社副社長執行役員(現任)	(注) 2	10,203
専務取締役 兼 専務 執行役員 財務第一部、広報・I R室担当	提 橋 輝 幸	1955年10月27日生	1981年12月 2002年4月 2003年6月 2004年6月 2005年4月 2005年6月 2005年10月 2007年4月 2008年4月 2010年4月 2012年6月 2014年4月 2015年6月 2017年6月 2017年6月	当社入社 当社経営管理部部長 当社人事部長 当社検査部部長 当社監査部部長 当社監査部長 当社事務管理部部長 当社業務企画部長 当社執行役員業務企画部長 当社執行役員システム部長 当社常務執行役員システム部長 当社常務執行役員 当社常務取締役 当社専務取締役(現任) 当社専務執行役員(現任)	(注) 2	4
常務取締役 兼 常務 執行役員 審査本部長 総務部、審査第一部、 審査第二部、審査コン プライアンス推進室担 当 審査第二部長	内 田 智 視	1961年12月27日生	1982年10月 2003年4月 2005年10月 2007年4月 2007年12月 2008年10月 2011年4月 2013年4月 2015年6月 2016年4月 2016年6月 2018年6月 2018年10月 2019年6月	当社入社 当社第3営業部ゼネラルマネージャー 当社第2営業部ゼネラルマネージャー 当社営業管理部部長 当社マーケティング部長 当社東日本支社長 当社営業推進部長 当社執行役員営業推進部長 当社常務執行役員営業副本部長・営業推進部長 当社常務執行役員営業副本部長 当社常務執行役員営業本部長 当社常務執行役員審査本部長・審査第一部長 当社常務執行役員審査本部長・審査第二部長(現任) 当社常務取締役(現任)	(注) 2	1

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有 株式数 (千株)
取締役	堀 直 樹	1961年1月27日生	1983年4月	株式会社三和銀行入行	(注) 2	—
			2010年5月	株式会社三菱東京UFJ銀行法人企画部長		
			2010年5月	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ法人企画部長兼信託企画部部長(特命担当)		
			2010年6月	株式会社三菱東京UFJ銀行執行役員法人企画部長		
			2010年6月	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ執行役員法人企画部長兼信託企画部部長(特命担当)		
			2012年5月	株式会社三菱東京UFJ銀行執行役員法人業務部長		
			2012年5月	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ執行役員法人部長		
			2013年5月	株式会社三菱東京UFJ銀行常務執行役員		
			2016年5月	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ常務執行役員		
			2016年6月	株式会社三菱東京UFJ銀行常務取締役(代表取締役)		
			2017年5月	同行専務取締役(代表取締役)		
			2017年6月	同行取締役専務執行役員(代表取締役)		
			2018年4月	株式会社三菱UFJ銀行取締役専務執行役員(代表取締役)		
			2018年5月	株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループ執行役専務(現任)		
			2018年6月	当社取締役(現任)		
			2019年4月	株式会社三菱UFJ銀行取締役副頭取執行役員(代表取締役)(現任)		

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有 株式数 (千株)
取締役 常勤監査等委員	伊 藤 達 哉	1958年2月10日生	1981年4月 1999年10月 2001年3月 2002年3月 2003年3月 2005年3月 2006年7月 2007年4月 2008年2月 2008年10月 2010年7月 2010年7月 2012年7月 2013年3月 2015年6月 2017年6月	日本開発銀行入行 日本政策投資銀行流通部課長 同行環境・エネルギー部課長 同行環境・エネルギー部次長 同行関西支店次長 同行環境・エネルギー部次長 同行産業・技術部次長 同行法務・コンプライアンス部企画審議役 弁護士登録(第一東京弁護士会所属)(現任) 株式会社日本政策投資銀行法務・コンプライアンス部企画審議役 奥野総合法律事務所出向 奥野総合法律事務所入所 株式会社日本政策投資銀行法務・コンプライアンス部企画審議役 同行法務・コンプライアンス部参事 当社常勤社外監査役 当社取締役常勤監査等委員(現任)	(注) 3	—
取締役 常勤監査等委員	福 元 一 雄	1958年2月27日生	1980年3月 2002年4月 2003年6月 2005年10月 2007年4月 2012年6月 2013年6月 2015年6月 2017年6月	当社入社 当社経営管理部部長 当社経営管理部部長 当社執行役員経営管理部部長 当社執行役員経営企画部長 当社常務執行役員営業本部長 当社常務取締役 当社常務執行役員 当社取締役常勤監査等委員(現任)	(注) 3	10
取締役 常勤監査等委員	石 川 昌 秀	1956年3月15日生	1978年4月 2002年4月 2004年1月 2005年4月 2007年4月 2007年7月 2009年4月 2010年4月 2011年4月 2013年4月 2014年7月 2017年7月 2018年4月 2019年6月	明治生命保険相互会社入社 同社資産運用部門財務業務部長 明治安田生命保険相互会社運用企画部長 明治ドレスナー・アセットマネジメント株式会社常務取締役兼常務執行役員 明治安田生命保険相互会社運用審査部長 同社執行役運用審査部長 同社執行役名古屋本部長 同社常務執行役名古屋本部長 同社常務執行役 明治安田アセットマネジメント株式会社代表取締役社長 一般社団法人日本投資顧問業協会副会長 一般社団法人日本投資顧問業協会副会長 明治安田アセットマネジメント株式会社代表取締役会長 当社取締役常勤監査等委員(現任)	(注) 3	—
計						40,235

- (注) 1 取締役監査等委員伊藤 達哉、石川 昌秀の各氏は、社外取締役であります。
- 2 取締役(監査等委員であるものを除く。)の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2020年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 3 取締役監査等委員の任期は、2019年3月期に係る定時株主総会終結の時から2021年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。
- 4 代表取締役副社長木下 政孝は、代表取締役社長兼会長木下 盛好の実子であります。

- 5 当社では、コーポレートガバナンスの拡充、取締役会の機能強化、経営の意思決定と業務執行の分離、監査機能の強化等により経営課題に迅速かつ的確に対応できる体制を構築するため、執行役員制度を導入しております。

2019年6月21日現在の執行役員（取締役を兼務する執行役員を除く。）構成は、以下のとおりであります。

役名	氏名	職名
常務執行役員	松 谷 信 吉	・財務第二部担当 ・コンプライアンス統括部副担当
常務執行役員	近 藤 誠	・業務統括部、リスク統括部担当
常務執行役員	嘉 村 康 裕	・営業本部長 ・営業企画部、営業推進部、東日本営業部、西日本営業部、営業コンプライアンス推進室担当
常務執行役員	黒 田 大	・海外事業部担当
常務執行役員	小野寺 道 人	・保証事業部担当 ・保証事業部長
執行役員	鹿野谷 智 雄	・システム統轄部長
執行役員	曾 根 雅 行	・西日本営業部長
執行役員	桐 渕 高 志	・経営企画部長
執行役員	清 岡 哲 弘	・経営企画部付(特命担当)
執行役員	土 井 保 英	・業務統括部長
執行役員	吉 羽 優 志	・コンプライアンス統括部長
執行役員	柴 田 秀 彦	・東日本営業部長
執行役員	木 下 裕 司	・営業推進部長
執行役員	町 田 雅 彦	・監査部長

- 6 日本消費者金融株式会社は、1980年4月1日付をもってエヌエスケイ信販株式会社に商号変更を行った後、1992年3月1日付をもって当社に吸収合併されました。
- 7 所有株式数は、千株未満を切り捨てて表示しております。
- 8 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
新穂 均	1952年7月10日生	1983年4月 東京地方検察庁検事任官 1990年4月 東京地方裁判所判事補 1993年4月 東京地方検察庁検事 1995年6月 弁護士登録(第二東京弁護士会所属)(現任) 1995年6月 のぞみ総合法律事務所(現任) 2009年3月 株式会社EMCOMホールディングス社外監査役 2012年4月 関東弁護士会連合会常務理事 2012年4月 第二東京弁護士会副会長 2012年4月 日本弁護士連合会常務理事 2013年4月 原子力損害賠償紛争解決センター仲介員(現任) 2015年6月 アコム株式会社社外取締役	—

② 社外取締役

当社の社外取締役は2名であり、当社との関係は以下のとおりであります。

なお、当社では、独立社外取締役の候補者の選定基準として、東京証券取引所が定める独立役員の独立性に関する判断基準を満たし、豊富な経験と高い見識、高度な専門性を有しているかを重視しています。

社外取締役	当社との関係
伊藤達哉取締役	○当社との間には、特別の利害関係はありません。 ○同氏は、長年にわたり当社と同じ金融業界において金融実務及び企業法務を中心に培った豊富な経験・知識並びに弁護士としての経験を有しており、これらを当社の経営に反映することにより、当社の監督機能がさらに強化できるものと考えております。 ○一般株主と利益相反の生じるおそれがあると東京証券取引所が判断する基準にはいずれも該当しないため、独立役員として指定しております。
石川昌秀取締役	○当社との間には、特別の利害関係はありません。 ○同氏は、長年にわたり金融業界において培った豊富な知識・経験及び経営者としての実績を有しております。また、一般社団法人日本投資顧問業協会副会長を通算2回務め、幅広い見識を有しております。これらの知識・経験に基づく外部の視点をもって当社の経営の監視や適切な助言をいただけるものと考えております。 ○一般株主と利益相反の生じるおそれがあると東京証券取引所が判断する基準にはいずれも該当しないため、独立役員として指定しております。

(3) 【監査の状況】

① 内部監査及び監査等委員会監査等

イ. 内部監査

監査部は、19名の監査員体制で業務執行部門における関連法令等の遵守状況、内部管理の取組状況等を検証、評価し、問題点の改善方法の提言を行っております。また、ルールの準拠性のみならず、リスクの的確な把握に基づいて各組織におけるリスク管理態勢を評価するリスクアプローチ監査を実施し、その結果を取締役会及び監査等委員会へ定期的に報告しております。

さらに、子会社の直接監査の実施、子会社監査部の支援等を通じて、グループ監査体制の整備を行っております。

ロ. 監査等委員会監査

監査等委員会は、監査等委員会の監査方針及び監査計画に基づき、経営会議等の重要な会議及び委員会への出席、業務及び財産の状況調査などを通じて、取締役（監査等委員であるものを除く。）の職務執行を監査し、更には、法令遵守と企業倫理の確立に資する適時適切な助言・提言を行っております。また、会計監査人並びに監査部と連携し、経営の実態を正確に把握し、内部統制システムの整備状況を監視し、検証しております。

監査等委員会は、子会社の取締役及び監査役と積極的に意思疎通をはかり、グループにおける情報の共有化に努めております。

なお、監査等委員福元 一雄氏は、当社の経営企画・管理、経理部門の部長、執行役員を歴任し、取締役就任後は経理部門を担当するなど、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

ハ. 監査等委員会と会計監査人の連携状況

監査等委員会は、会計監査人の監査計画の確認、監査報告書、監査の概要及び結果の内容聴取等を実施しております。また、必要に応じて実施する意見交換等の会合や監査現場への立会により、監査等委員会と会計監査人の連携をはかっております。

ニ. 監査等委員会と内部監査部門の連携状況

内部監査部門は、監査等委員会と内部監査部門の監査計画について事前協議を行うことに加え、監査の実施状況及び監査結果等を監査等委員会へ報告することにより、監査等委員会との連携体制を構築しております。

② 会計監査の状況

イ. 当社の会計監査業務を執行した公認会計士の氏名、所属監査法人及び継続監査年数

指定有限責任社員 業務執行社員：鈴木 泰司 有限責任監査法人トーマツ所属

指定有限責任社員 業務執行社員：淡島 國和 有限責任監査法人トーマツ所属

※継続監査年数については、全員7年以内であるため、記載を省略しております。

※同監査法人は業務執行社員に対して、当社の会計監査に一定期間を超えて関与することのないよう措置をとっております。

ロ. 当社の会計監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 13 名

会計士補等 7 名

その他 19 名

ハ. 監査公認会計士等を選定した理由

当監査等委員会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合には、監査等委員全員の同意に基づき会計監査人を解任し、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定するとの方針に基づき、独立性、監査品質等の観点から、会計監査人の適否について検討した結果、再任が相当であると判断しました。

ニ. 監査公認会計士等の評価を行った旨及びその内容

当監査等委員会は、会計監査人を適切に評価するための項目を定め、会計監査人の活動内容等について、取締役、社内関係部室及び会計監査人から必要な資料を入手し報告を受けて、会計監査人の評価を行っております。

③監査報酬の内容等

イ. 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	115,000	1,100	125,000	1,100
連結子会社	23,500	—	23,500	—
計	138,500	1,100	148,500	1,100

※非監査業務の内容

(前連結会計年度)

当社は監査公認会計士等に対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務であるコンフォートレター作成業務を委託し対価を支払っております。

(当連結会計年度)

当社は監査公認会計士等に対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務であるコンフォートレター作成業務を委託し対価を支払っております。

ロ. 監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬（イ.を除く）の内容

区 分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	3,632	2,400	3,974	2,400
連結子会社	17,099	646	18,332	—
計	20,731	3,046	22,307	2,400

※非監査業務の内容

(前連結会計年度)

当社は監査公認会計士等と同一のネットワークに対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務である税務顧問業務を委託し対価を支払っております。また、一部の連結子会社は監査公認会計士等と同一のネットワークに対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務である会社設立申請に関する調査を委託し対価を支払っております。

(当連結会計年度)

当社は監査公認会計士等と同一のネットワークに対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務である税務顧問業務を委託し対価を支払っております。

ハ．その他重要な監査証明業務に基づく報酬の内容
該当事項はありません。

ニ．監査報酬の決定方針
該当事項はありません。

ホ．監査等委員会が提案した会計監査人の報酬等に同意した理由
当監査等委員会は、会計監査人の前事業年度の監査実績の分析と評価を行い、当事業年度の監査計画及び報酬等の見積り額の算出根拠等を確認し、検討した結果、相当と判断し、会計監査人の報酬等の額について同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

取締役（監査等委員であるものを除く。）の報酬等の額については、株主総会が決定する報酬総額の範囲内で、業績等を考慮し、指名・報酬委員会が検討・提案し、取締役会において決定しております。また、監査等委員の報酬等の額については、株主総会が決定する報酬総額の範囲内で、監査等委員の職務と責任を考慮し、監査等委員の協議により決定しております。なお、2020年3月期より常勤の取締役（監査等委員であるものを除く。）に対し、単年度業績と連動した業績連動報酬を新たに導入しております。

取締役（監査等委員であるものを除く。）の報酬限度額は、2017年6月22日開催の第40回定時株主総会において、年額400百万円以内（ただし、使用人分給与は含まない。）と決議されております。また、同定時株主総会において、取締役監査等委員の報酬限度額は、年額100百万円以内と決議されております。

取締役（監査等委員であるものを除く。）の具体的な報酬の額については、指名・報酬委員会の結果を踏まえ、取締役会の決議によって代表取締役社長兼会長である木下 盛好に一任しております。

指名・報酬委員会及び監査等委員会の構成・活動内容につきましては、「4[コーポレート・ガバナンスの状況等] (1) [コーポレート・ガバナンスの概要] ②企業統治の体制 イ. 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由」における「(C)各種委員会 (a)指名・報酬委員会」及び「(B)監査等委員会」をご参照下さい。

② 提出会社の役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）			対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動 報酬	退職慰労金	
取締役 (監査等委員及び社外 取締役を除く。)	139	139	—	—	7
監査等委員 (社外取締役を除く。)	19	19	—	—	1
社外役員	37	37	—	—	3
合 計	196	196	—	—	11

(注) 1 使用人兼務取締役はおりません。

2 「対象となる役員の員数」は延べ員数で表示しております。

③ 提出会社の役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載していません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、当社は、純投資目的以外の目的である投資株式を保有しておらず、今後も保有する予定はありません。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

該当事項はありません。

③ 保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (百万円)
非上場株式	22	821	24	827
非上場株式以外の株式	2	0	1	0

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(百万円)	売却損益の 合計額(百万円)	評価損益の 合計額(百万円)
非上場株式	15	3	(注)
非上場株式以外の株式	—	0	0

(注) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「評価損益の合計額」は記載しておりません。

④ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

該当事項はありません。

⑤ 当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

該当事項はありません。

第5 【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）及び「特定金融会社等の会計の整理に関する内閣府令」（平成11年総理府令・大蔵省令第32号）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成30年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号）及び「特定金融会社等の会計の整理に関する内閣府令」（平成11年総理府令・大蔵省令第32号）に基づいて作成しております。

なお、当事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表に含まれる比較情報のうち、改正府令による改正後の財務諸表等規則第8条の12第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第2条第2項により、改正前の財務諸表等規則に基づいて作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツによる監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、公益財団法人財務会計基準機構等に参加し、企業会計基準委員会等の行う研修に参加しており、会計基準等の内容を適切に把握し、又は会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制の整備をしております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※2 91,884	※2 85,546
営業貸付金	※4, ※6, ※8 975,116	※4, ※6, ※8 1,000,428
銀行業貸出金	※5 48,808	※5 48,331
割賦売掛金	※9 53,034	※9 63,740
買取債権	10,603	9,435
有価証券	904	479
商品有価証券	1,651	—
原材料及び貯蔵品	60	64
その他	81,342	91,327
貸倒引当金	△75,686	△76,532
流動資産合計	1,187,721	1,222,821
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	28,599	24,545
減価償却累計額	△23,755	△20,753
建物及び構築物（純額）	4,844	3,791
車両運搬具	14	11
減価償却累計額	△13	△10
車両運搬具（純額）	0	0
器具及び備品	21,324	21,245
減価償却累計額	△11,129	△11,638
器具備品（純額）	10,195	9,606
土地	6,203	3,196
リース資産	4,232	4,139
減価償却累計額	△2,675	△2,870
リース資産（純額）	1,556	1,269
有形固定資産合計	22,800	17,864
無形固定資産		
のれん	4,063	3,250
借地権	4	4
ソフトウェア	7,103	5,387
電話加入権	37	37
その他	1	9
無形固定資産合計	11,210	8,687

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	※1 4,261	※1 4,247
退職給付に係る資産	4,559	3,898
繰延税金資産	36,850	36,117
差入保証金	5,259	5,035
その他	※6 4,194	※6 4,266
貸倒引当金	△899	△1,032
投資その他の資産合計	54,224	52,534
固定資産合計	88,235	79,086
資産合計	1,275,957	1,301,908
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	500	509
短期借入金	※7 10,873	※7 11,547
コマーシャル・ペーパー	29,998	39,998
1年内返済予定の長期借入金	※7 160,244	※7 146,714
1年内償還予定の社債	45,350	41,519
銀行業預金	53,074	52,319
リース債務	573	523
未払法人税等	5,112	7,772
債務保証損失引当金	※3 10,061	※3 9,661
資産除去債務	89	10
割賦利益繰延	※10 53	※10 42
その他	16,063	16,205
流動負債合計	331,995	326,824
固定負債		
社債	211,210	202,691
長期借入金	※7 276,841	※7 282,671
リース債務	1,150	896
繰延税金負債	0	28
役員退職慰労引当金	22	25
利息返還損失引当金	104,068	102,300
退職給付に係る負債	334	338
資産除去債務	4,320	4,159
その他	1,574	470
固定負債合計	599,523	593,581
負債合計	931,519	920,406

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	63,832	63,832
資本剰余金	73,578	73,549
利益剰余金	202,410	237,058
自己株式	△19,794	△19,794
株主資本合計	320,026	354,646
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	0	△0
為替換算調整勘定	3,412	2,832
退職給付に係る調整累計額	△523	△1,304
その他の包括利益累計額合計	2,889	1,528
非支配株主持分	21,521	25,327
純資産合計	344,437	381,501
負債純資産合計	1,275,957	1,301,908

② 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
営業収益		
営業貸付金利息	161,564	169,273
銀行業貸出金利息	6,049	6,135
包括信用購入あっせん収益	6,168	7,773
個別信用購入あっせん収益	74	64
信用保証収益	58,401	61,428
買取債権回収高	5,429	4,739
その他の金融収益		
預金利息	61	61
有価証券利息	224	101
貸付金利息	19	87
預け金利息	187	126
その他	298	455
その他の金融収益計	792	832
その他の営業収益	24,973	26,822
営業収益合計	263,453	277,069
営業費用		
金融費用		
支払利息	5,931	5,044
銀行業預金支払利息	2,912	2,615
社債利息	2,851	2,845
社債発行費償却	148	143
その他	610	662
金融費用計	12,454	11,310
債権買取原価	2,465	2,087
その他の営業費用		
広告宣伝費	11,734	12,103
貸倒引当金繰入額	67,519	66,261
債務保証損失引当金繰入額	10,050	9,728
利息返還損失引当金繰入額	—	39,479
従業員給与手当賞与	19,534	20,193
退職給付費用	1,045	954
役員退職慰労引当金繰入額	3	3
福利厚生費	2,723	2,684
賃借料	6,599	6,408
減価償却費	4,448	4,749
支払手数料	24,197	22,954
のれん償却額	984	813
その他	18,750	19,728
その他の営業費用計	※1 167,591	※1 206,062
営業費用合計	182,511	219,461
営業利益	80,942	57,607

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月 31 日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月 31 日)
営業外収益		
受取利息	252	209
受取配当金	13	15
持分法による投資利益	10	7
受取家賃	277	282
受取和解金	※ 2 199	—
その他	212	209
営業外収益合計	965	724
営業外費用		
支払利息	28	31
為替差損	84	25
保険解約損	16	55
その他	83	13
営業外費用合計	213	126
経常利益	81,694	58,205
特別利益		
固定資産売却益	※ 3 38	※ 3 384
投資有価証券売却益	25	3
特別利益合計	63	388
特別損失		
固定資産売却損	※ 4 10	※ 4 259
固定資産除却損	※ 5 149	※ 5 191
減損損失	※ 6 426	※ 6 2,800
投資有価証券評価損	0	6
その他	※ 7 2	※ 7 1
特別損失合計	589	3,259
税金等調整前当期純利益	81,168	55,334
法人税、住民税及び事業税	8,505	11,126
法人税等調整額	△1,571	1,684
法人税等合計	6,934	12,810
当期純利益	74,233	42,523
非支配株主に帰属する当期純利益	3,661	4,742
親会社株主に帰属する当期純利益	70,572	37,781

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
当期純利益	74,233	42,523
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△3	△0
為替換算調整勘定	3,185	△1,113
退職給付に係る調整額	45	△766
その他の包括利益合計	※ 3,228	※ △1,880
包括利益	77,461	40,643
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	72,909	36,420
非支配株主に係る包括利益	4,552	4,223

③ 【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	63,832	73,578	131,837	△19,794	249,453
当期変動額					
剰余金の配当					
親会社株主に帰属する 当期純利益			70,572		70,572
連結子会社株式の取得 による持分の増減					
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	—	70,572	—	70,572
当期末残高	63,832	73,578	202,410	△19,794	320,026

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計		
当期首残高	4	1,128	△579	552	17,219	267,226
当期変動額						
剰余金の配当						
親会社株主に帰属する 当期純利益						70,572
連結子会社株式の取得 による持分の増減						
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△3	2,284	56	2,337	4,301	6,638
当期変動額合計	△3	2,284	56	2,337	4,301	77,211
当期末残高	0	3,412	△523	2,889	21,521	344,437

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	63,832	73,578	202,410	△19,794	320,026
当期変動額					
剰余金の配当			△3,133		△3,133
親会社株主に帰属する 当期純利益			37,781		37,781
連結子会社株式の取得 による持分の増減		△29			△29
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	△29	34,648	－	34,619
当期末残高	63,832	73,549	237,058	△19,794	354,646

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計		
当期首残高	0	3,412	△523	2,889	21,521	344,437
当期変動額						
剰余金の配当						△3,133
親会社株主に帰属する 当期純利益						37,781
連結子会社株式の取得 による持分の増減						△29
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△0	△579	△781	△1,361	3,806	2,444
当期変動額合計	△0	△579	△781	△1,361	3,806	37,064
当期末残高	△0	2,832	△1,304	1,528	25,327	381,501

④ 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	81,168	55,334
減価償却費	4,448	4,749
減損損失	426	2,800
のれん償却額	984	813
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	8,496	1,214
債務保証損失引当金の増減額 (△は減少)	1,338	△399
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	56	48
役員退職慰労引当金の増減額 (△は減少)	△5	3
利息返還損失引当金の増減額 (△は減少)	△60,831	△1,768
受取利息及び受取配当金	△265	△224
支払利息	28	31
社債発行費償却	148	143
為替差損益 (△は益)	86	13
持分法による投資損益 (△は益)	△10	△7
受取和解金	△199	—
有形固定資産売却損益 (△は益)	△27	△125
有形固定資産除却損	140	191
投資有価証券売却損益 (△は益)	△25	△3
投資有価証券評価損益 (△は益)	0	6
営業貸付金の増減額 (△は増加)	△34,713	△27,327
銀行業貸出金の増減額 (△は増加)	△4,518	△3,637
割賦売掛金の増減額 (△は増加)	△14,350	△10,713
買取債権の増減額 (△は増加)	730	1,167
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	△425	△492
商品有価証券の増減額 (△は増加)	2,589	1,533
たな卸資産の増減額 (△は増加)	17	△6
その他の流動資産の増減額 (△は増加)	△11,489	△10,430
仕入債務の増減額 (△は減少)	85	9
銀行業預金の増減額 (△は減少)	△441	3,714
割賦利益繰延の増減額 (△は減少)	△16	△11
その他の流動負債の増減額 (△は減少)	1,791	193
その他の営業活動による増減額 (△は減少)	△1,266	△1,178
小計	△26,049	15,641
利息及び配当金の受取額	265	235
利息の支払額	△28	△31
和解金の受取額	199	—
法人税等の支払額	△7,022	△8,516
営業活動によるキャッシュ・フロー	△32,634	7,329

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	—	△1,365
有価証券の償還による収入	—	1,187
有形固定資産の取得による支出	△1,060	△704
有形固定資産の売却による収入	67	917
無形固定資産の取得による支出	△1,647	△2,019
投資有価証券の取得による支出	—	△477
投資有価証券の売却及び償還による収入	285	784
その他の投資活動による増減額 (△は減少)	644	511
投資活動によるキャッシュ・フロー	△1,711	△1,165
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	98,729	143,597
短期借入金の返済による支出	△106,233	△142,880
コマーシャル・ペーパーの発行による収入	129,982	159,976
コマーシャル・ペーパーの償還による支出	△115,000	△150,000
社債の発行による収入	36,438	33,404
社債の償還による支出	△25,000	△45,260
長期借入れによる収入	127,133	158,191
長期借入金の返済による支出	△124,045	△165,436
ファイナンス・リース債務の返済による支出	△494	△591
非支配株主からの払込みによる収入	221	357
配当金の支払額	—	△3,131
非支配株主への配当金の支払額	△471	△790
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	—	△13
財務活動によるキャッシュ・フロー	21,259	△12,573
現金及び現金同等物に係る換算差額	△81	205
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△13,168	△6,204
現金及び現金同等物の期首残高	101,719	88,551
現金及び現金同等物の期末残高	※ 88,551	※ 82,346

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

子会社は全て連結しております。

連結子会社の数 5社

主要な連結子会社の名称は、「第1〔企業の概況〕 4〔関係会社の状況〕」に記載しているため省略しております。

2 持分法の適用に関する事項

持分法適用の関連会社の数 1社

持分法適用の関連会社名称 エム・ユー・コミュニケーションズ㈱

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日が連結決算日と異なる会社は次のとおりであり、決算日は12月31日です。

EASY BUY Public Company Limited

PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk.

ACOM CONSUMER FINANCE CORPORATION

連結財務諸表の作成にあたっては、同決算日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っております。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

売買目的有価証券…時価法（売却原価は移動平均法により算定）

満期保有目的の債券…主として償却原価法（利息法）

その他有価証券

時価のあるもの…期末日の市場価格等に基づく時価法

（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの…移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びこれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

② デリバティブ取引等

デリバティブ…時価法

③ たな卸資産

貯蔵品…主として先入先出法による原価法

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く）

当社及び国内連結子会社は定率法を、在外連結子会社は定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 … 2～47年

車両運搬具 … 4～8年

器具及び備品 … 2～20年

② 無形固定資産（リース資産を除く）

当社及び連結子会社は定額法を採用しております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

③ リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

④ 長期前払費用

当社及び連結子会社は均等償却を採用しております。

⑤ 繰延資産

社債発行費

支出時に全額費用として処理しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

営業貸付金等の貸倒れによる損失に備えるため、当社及び連結子会社は、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

② 債務保証損失引当金

債務保証に係る損失に備えるため、当社及び連結子会社は、当連結会計年度末における損失発生見込額を計上しております。

③ 役員退職慰労引当金

役員退職慰労金の支給に備えるため、国内連結子会社の一部は、内規に基づく期末要支給額を計上しております。

④ 利息返還損失引当金

将来の利息返還損失に備えるため、当社は、過去の返還実績を踏まえ、かつ最近の返還状況を考慮する等により返還額を合理的に見積もり計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（５年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（５年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌連結会計年度から費用処理することとしております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

営業貸付金利息…発生基準により計上

なお、当社の営業貸付金に係る未収利息については、利息制限法利率又は当社約定利率のいずれか低い方により計上しております。

包括信用購入あっせん収益

顧客手数料…残債方式により計上

加盟店手数料…あっせん手数料として取扱時に計上

信用保証収益…残債方式により計上

（注） 計上方法の内容は次のとおりであります。

残債方式…元本残高に対して所定の料率で手数料を算出し、収益に計上する方法

(6) 連結財務諸表の作成の基礎となった連結会社の財務諸表の作成に当たって採用した重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

なお、在外子会社の資産及び負債は決算日の直物為替相場により、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めて計上しております。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。ただし、金利スワップの特例処理の要件を満たすものについては、特例処理に、通貨スワップ及び為替予約の振当処理の要件を満たすものについては、振当処理によっております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

金利関連

ヘッジ手段…金利スワップ取引

ヘッジ対象…変動金利建の借入金及び変動金利建の社債

通貨関連

ヘッジ手段…通貨スワップ取引及び為替予約取引

ヘッジ対象…外貨建の借入金及び外貨建の社債

③ ヘッジ方針

当社及び連結子会社の内規に基づき、金利関連では、金利変動リスクを回避する目的で、変動金利建の借入金及び変動金利建の社債に対して、金利スワップのデリバティブ取引でキャッシュ・フローヘッジを、通貨関連では、借入金及び借入金利息の為替変動リスクを回避する目的で、外貨建の借入金及び外貨建の社債に対して、通貨スワップ取引及び為替予約取引でキャッシュ・フローヘッジを行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

金利関連では、ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件がほぼ一致しており、かつヘッジ開始時及びその後も継続して、金利変動又はキャッシュ・フロー変動を完全に相殺するものと想定することができるため、ヘッジの有効性の判定は省略しております。また、通貨関連では、ヘッジ対象と同一条件で通貨スワップ及び為替予約を締結しており、為替変動又はキャッシュ・フロー変動を完全に相殺するものと想定することができるため、ヘッジの有効性の判定は省略しております。

(8) のれんの償却方法及び償却期間

のれんは、10年から15年間で均等償却しております。ただし、のれんの金額に重要性が乏しいものは、発生連結会計年度に全額償却しております。

(9) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、要求払預金及び取得日から3ヵ月以内に満期日の到来する流動性の高い、容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない短期的な投資からなっております。

(10) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

① 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、資産に係る控除対象外消費税等は、発生連結会計年度の期間費用としております。

なお、未払消費税等は、連結貸借対照表上、流動負債の「その他」に含めて表示しております。

② 連結納税制度の適用

当社及び国内連結子会社は、連結納税制度を適用しております。

(表示方法の変更)

＜「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更＞

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）を当連結会計年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が41,307百万円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が36,413百万円増加しており、また「流動負債」の「繰延税金負債」が0百万円減少し、「固定負債」の「繰延税金負債」が4,893百万円減少しております。

なお、同一の納税主体で「繰延税金資産」と「繰延税金負債」を相殺したことにより、資産合計、負債合計及び負債純資産合計がそれぞれ4,893百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解（注8）（評価性引当額の合計額を除く。）及び同注解（注9）に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

＜連結損益計算書関係＞

前連結会計年度において、「その他」に含めて表示しておりました営業外費用の「保険解約損」は、金額的重要性が高まったため、当連結会計年度において独立掲起しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、営業外費用に表示していた「その他」100百万円は、「保険解約損」16百万円、「その他」83百万円として組み替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1 投資有価証券に含めた関連会社株式の金額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券	335 百万円	342 百万円

※2 インドネシア中央銀行の規則に基づく準備金

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
現金及び預金	3,327 百万円	3,092 百万円

※3 偶発債務

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
信用保証業務の保証債務残高	1,199,644 百万円	1,212,255 百万円
銀行業による保証債務残高	568 "	510 "
債務保証損失引当金	10,061 "	9,661 "
差引	1,190,151 "	1,203,103 "

※4 営業貸付金に係るコミットメントライン契約

前連結会計年度(2018年3月31日)

当社及び連結子会社の一部の営業貸付金の契約形態は、主としてリボルビングによる契約(極度借入基本契約)であります。同契約は、一定の利用限度枠を決めておき、契約上規定された条件について違反がない限り、利用限度枠の範囲で繰り返し融資を行う契約であります。同契約に係る融資未実行残高は、456,235百万円であります。このうちには、同契約に係るカードを所持され、当連結会計年度末に残高がない顧客の融資未実行残高275,973百万円を含んでおります。

なお、同契約は、融資実行されずに終了するものもあるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。

同契約には、顧客の信用状況の変化、その他相当の事由があるときは、当社及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は利用限度枠を減額することができる旨の条項が付けられております。また、契約後も定期的に社内手続に基づき顧客の信用状況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

当社及び連結子会社の一部の営業貸付金の契約形態は、主としてリボルビングによる契約(極度借入基本契約)であります。同契約は、一定の利用限度枠を決めておき、契約上規定された条件について違反がない限り、利用限度枠の範囲で繰り返し融資を行う契約であります。同契約に係る融資未実行残高は、496,960百万円であります。このうちには、同契約に係るカードを所持され、当連結会計年度末に残高がない顧客の融資未実行残高314,419百万円を含んでおります。

なお、同契約は、融資実行されずに終了するものもあるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。

同契約には、顧客の信用状況の変化、その他相当の事由があるときは、当社及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は利用限度枠を減額することができる旨の条項が付けられております。また、契約後も定期的に社内手続に基づき顧客の信用状況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※5 銀行業貸出金に係るコミットメントライン契約

前連結会計年度(2018年3月31日)

連結子会社 PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約束する当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約を締結しております。これらの契約に基づく当連結会計年度末の融資未実行残高は、13,161百万円であります。

なお、同契約は、融資実行されずに終了するものもあるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当該連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。

同契約には、顧客の信用状況の変化、その他相当の事由があるときは、同社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は利用限度枠を減額することができる旨の条項が付けられております。また、契約後も定期的に社内手続きに基づき顧客の信用状況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

連結子会社 PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約束する当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約を締結しております。これらの契約に基づく当連結会計年度末の融資未実行残高は、10,336百万円であります。

なお、同契約は、融資実行されずに終了するものもあるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当該連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。

同契約には、顧客の信用状況の変化、その他相当の事由があるときは、同社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は利用限度枠を減額することができる旨の条項が付けられております。また、契約後も定期的に社内手続きに基づき顧客の信用状況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※6 営業貸付金の不良債権の状況

消費者向無担保貸付金の破産債権については、破産決定時点で貸倒損失に計上しております。このため、破綻先債権には期末日現在で破産未決定の破産申立て債権等(全額貸倒引当金を計上)が含まれております。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
破産未決定の破産申立て債権等	308 百万円	275 百万円
	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
破綻先債権	788 百万円	769 百万円
延滞債権	23,821 "	24,179 "
3ヵ月以上延滞債権	4,753 "	4,753 "
貸出条件緩和債権	31,477 "	31,990 "
合計	60,841 "	61,692 "

- (注) 1 破綻先債権とは、未収利息不計上貸付金のうち、破産更生債権等その他これらに準ずる貸付金であります。
2 延滞債権とは、その他の未収利息不計上貸付金であります。ただし、債務者の経営再建又は支援をはかることを目的として利息の支払を猶予したものを除きます。
3 3ヵ月以上延滞債権とは、上記以外のその他の3ヵ月以上延滞貸付金であります。
4 貸出条件緩和債権とは、上記以外の当該貸付金の回収を促進することなどを目的に、金利の減免等債務者に有利となる取決めを行った貸付金であります。

※7 当座貸越契約及び特定融資枠契約

当社及び連結子会社の一部は、運転資金の効率的な調達を行うため、金融機関等と当座貸越契約及び特定融資枠契約を締結しております。これらの契約に基づく借入未実行残高は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額及び特定融資枠契約の総額	125,922 百万円	123,458 百万円
借入実行残高	47,207 "	39,579 "
差引額	78,715 "	83,879 "

※8 営業貸付金のうち個人向無担保貸付金の額

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
営業貸付金のうち個人向無担保貸付金	969,035 百万円	995,223 百万円

※9 割賦売掛金の事業別残高

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
包括信用購入あっせん	52,445 百万円	63,137 百万円
個別信用購入あっせん	588 "	603 "
合計	53,034 "	63,740 "

※10 割賦利益繰延残高

割賦利益繰延残高は、すべて個別信用購入あっせん事業のものであります。なお、期中における内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
当期首残高	66 百万円 (8) "	53 百万円 (15) "
当期受入額	62 " (26) "	53 " (34) "
当期実現額	74 " (18) "	64 " (25) "
当期末残高	53 " (15) "	42 " (24) "

()内の金額は、加盟店手数料であり、内数であります。

(連結損益計算書関係)

※1 その他の営業費用に含まれる研究開発費は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
研究開発費	31 百万円	111 百万円

※2 当社は、システム開発の中止に係る和解金を「受取和解金」として営業外収益に計上しております。

※3 固定資産売却益の内訳

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	33 百万円	383 百万円
車両運搬具	0 "	0 "
器具及び備品	4 "	1 "
リース資産	0 "	— "
合計	38 "	384 "

※4 固定資産売却損の内訳

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	— 百万円	1 百万円
器具及び備品	4 "	7 "
土地	6 "	250 "
合計	10 "	259 "

※5 固定資産除却損は、主として当社の営業店舗の移転、改装並びに看板の変更に伴うものであり、内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	124 百万円	178 百万円
器具及び備品	15 "	13 "
電話加入権	0 "	— "
ソフトウェア	9 "	0 "
合計	149 "	191 "

※6 減損損失

当社グループは、以下のとおり減損損失を計上しております。

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(1) 減損損失を認識した資産

場所	用途	種類
—	その他	のれん

(2) 資産のグルーピングの方法

当社グループは、国内における金融サービス事業の「ローン・クレジットカード事業」及び「信用保証事業」については、各事業を、その他の金融サービス事業については、各社をそれぞれグルーピングの最小単位としております。また、「海外金融事業」は、各社をそれぞれグルーピングの最小単位としております。なお、賃貸用不動産及び売却予定資産については各資産をグルーピングの最小単位としております。本社、厚生施設等については独立したキャッシュ・フローを生み出さないことから共用資産としております。

(3) 減損損失の認識に至った経緯

「信用保証事業」における会社分割により承継した一部の事業について、当初想定していた収益の獲得が見込めなくなったことから減損損失を認識しております。

(4) 減損損失の金額

のれん 426 百万円

(5) 回収可能価額の算定方法

のれんの回収可能価額は、将来キャッシュ・フローを7.8%で割引いて算定した使用価値により測定しております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(1) 減損損失を認識した資産

場所	用途	種類
千葉県柏市他	売却予定資産	土地、建物及び構築物、器具備品

(2) 資産のグルーピングの方法

当社グループは、国内における金融サービス事業の「ローン・クレジットカード事業」及び「信用保証事業」については、各事業を、その他の金融サービス事業については、各社をそれぞれグルーピングの最小単位としております。また、「海外金融事業」は、各社をそれぞれグルーピングの最小単位としております。なお、賃貸用不動産及び売却予定資産については各資産をグルーピングの最小単位としております。本社、厚生施設等については独立したキャッシュ・フローを生み出さないことから共用資産としております。

(3) 減損損失の認識に至った経緯

売却予定資産において、売却予定価額が帳簿価額より著しく下回っていることから減損損失を認識しております。

(4) 減損損失の金額

土地	2,337	百万円
建物及び構築物	462	〃
器具備品	0	〃
合計	2,800	〃

(5) 回収可能価額の算定方法

売却予定資産の回収可能価額は、正味売却価額により測定しており、売却査定価額の下限值により評価しております。

※7 特別損失のその他の内訳

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
長期前払費用一時償却	— 百万円	0 百万円
敷金保証金償却等除却損	2 "	1 "
ゴルフ会員権売却損	0 "	0 "
合計	2 "	1 "

8 金融収益及び金融費用の連結損益計算書上の表示区分の基準

(1) 営業収益として表示した金融収益

当社及び金融サービス事業子会社について、投資有価証券受取配当金及び利息等を除くすべての金融収益

(2) 営業費用として表示した金融費用

当社及び金融サービス事業子会社について、明らかに営業収益に対応しない支払利息等を除くすべての金融費用

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	△3 百万円	△0 百万円
組替調整額	△1 "	— "
税効果調整前	△5 "	△0 "
税効果額	1 "	0 "
その他有価証券評価差額金	△3 "	△0 "
為替換算調整勘定		
当期発生額	3,185 "	△1,730 "
組替調整額	— "	— "
税効果調整前	3,185 "	△1,730 "
税効果額	— "	617 "
為替換算調整勘定	3,185 "	△1,113 "
退職給付に係る調整額		
当期発生額	174 "	△1,020 "
組替調整額	△105 "	△92 "
税効果調整前	68 "	△1,112 "
税効果額	△22 "	346 "
退職給付に係る調整額	45 "	△766 "
その他の包括利益合計	3,228 "	△1,880 "

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	1,596,282,800	—	—	1,596,282,800

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	29,668,592	—	—	29,668,592

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

該当事項はありません。

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月22日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	1,566	1.00	2018年3月31日	2018年6月25日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	1,596,282,800	—	—	1,596,282,800

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首	増加	減少	当連結会計年度末
普通株式(株)	29,668,592	—	—	29,668,592

3 新株予約権等に関する事項

該当事項はありません。

4 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月22日 定時株主総会	普通株式	1,566	1.00	2018年3月31日	2018年6月25日
2018年11月1日 取締役会	普通株式	1,566	1.00	2018年9月30日	2018年12月6日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月21日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	1,566	1.00	2019年3月31日	2019年6月24日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	91,884 百万円	85,546 百万円
有価証券勘定	904 "	479 "
預入期間3ヵ月超の定期預金	△5 "	△106 "
銀行業における準備金	△3,327 "	△3,092 "
償還期間が3ヵ月超の債券	△904 "	△479 "
現金及び現金同等物	88,551 "	82,346 "

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(1) 所有権移転ファイナンス・リース

① リース資産の内容

・有形固定資産

主としてサーバー

② リース資産の減価償却の方法

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法によっております。

(2) 所有権移転外ファイナンス・リース

① リース資産の内容

・有形固定資産

主としてサーバー、無人機等

② リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年以内	99	101
1年超	103	26
合計	203	127

（金融商品関係）

1 金融商品の状況に関する事項

（1）金融商品に対する取組方針

当社グループは、ローン事業、クレジットカード事業、信用保証事業、債権管理回収事業（サービサー事業）、銀行業などの金融サービス事業を行っております。これらの事業を行うため、市場の状況や固定金利と変動金利のバランスを調整し、金融機関からの借入れによる間接金融のほか、社債の発行等による直接金融によって資金調達を行っております。デリバティブ取引は、これら資金調達の金利変動リスク及び為替変動リスクを回避すること等の目的で利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

（2）金融商品の内容及びそのリスク

当社グループが保有する主たる金融資産は、営業貸付金、銀行業貸出金及び割賦売掛金であり、顧客の債務不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。また、当社グループは株式、債券及び組合出資金等を満期保有目的、純投資目的で保有しているほか、一部連結子会社では売買目的で保有しており、これらは市場価格の変動リスクに晒されているほか、発行体の信用リスク及び金利変動リスクに晒されているものもあります。

借入金、社債、コマーシャル・ペーパー等の金融負債は、当社グループの信用状態や市場環境の変化により、支払期日にその支払を実行できなくなる流動性リスクに晒されているほか、変動金利によるものは金利変動リスクに晒されておりますが、一定量は金利スワップ取引により当該リスクを回避しております。また、外貨建であるものは為替変動リスクに晒されておりますが、通貨スワップ取引及び為替予約取引により当該リスクを回避しております。

デリバティブ取引は、借入金等に係る金利変動リスクのヘッジを目的とした金利スワップ取引、外貨建借入及び外貨建社債に係る為替変動リスクのヘッジを目的とした通貨スワップ取引及び為替予約取引であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジ有効性評価の方法等については、前述の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4 会計方針に関する事項 (7) 重要なヘッジ会計の方法」をご参照ください。

（3）金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

社内規程に基づき、個別案件ごとの与信審査、信用情報管理、信用格付制度、自己査定制度、問題債権への対応及び与信ポートフォリオの定期的なモニタリング体制を整備し運用しております。個別案件ごとの審査・与信管理にあたっては、審査管理部署と営業推進部署を互いに分離し、相互牽制が働く体制としております。また、経営陣による会議体を定期的に開催し、信用リスク管理・運営における重要事項を報告・審議するとともに、監査部署が与信運営の妥当性を検証することにより、適切な与信運営を実施する管理体制を構築しております。連結子会社についても、同様の管理を行っております。

② 市場リスクの管理

当社及び一部の連結子会社は、借入金等の金融負債に係る支払金利の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引を利用しております。また、外貨建負債等に係る為替リスクについても、原則として、通貨スワップ取引及び為替予約取引によりヘッジしております。

株式、債券等の有価証券については、市場動向、時価及び発行体の財務状況等を定期的にモニタリングして経営陣に報告するとともに、保有状況を継続的に見直しております。

デリバティブ取引の利用は、調達コストの最適化及び固定・変動金利比率の調整等を目的とし、投機目的の取引は行わないこととしております。また、デリバティブ取引の執行及び管理は、経営陣による会議体における基本方針の承認の下、取引権限や取引限度額等について定めた社内規程に基づいて行われております。

連結子会社においても、当社と同様の市場リスク管理を行っております。

なお、当社グループにおいて、主たる金融資産である営業貸付金は、すべて固定金利であり、また、主たる金融負債である借入金及び社債の大部分も固定金利であるため、金利変動の感応度が低いことから、市場リスクに関する定量的分析を行っておりません。

市場金利による時価算定科目において、連結会計年度末の市場金利が1 ベーシス・ポイント（0.01%）変化した場合の当該金融資産と金融負債相殺後の純額（資産側）への想定影響額は次のとおりです。但し、影響額を試算するにあたっては、市場金利以外のリスク変数に変化がないことを前提としております。

	2018年3月31日 (百万円)	2019年3月31日 (百万円)
1 ベーシス・ポイント高かった場合	△139	71
1 ベーシス・ポイント低かった場合	139	△71

③ 資金調達に係る流動性リスクの管理

当社は、経営陣による会議体により承認された資金繰計画に基づき、資金繰実績、市場環境及び金利動向などの状況変化に応じて適時に資金繰計画を見直すとともに、一定量の手許流動性を常時確保しているほか、コミットメントラインの確保、市場環境を考慮に入れた資金調達手段の多様化とバランス等により、流動性リスクを管理しております。また、連結子会社においても当社と同様の管理を行っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません。（（注2）をご参照ください。）

前連結会計年度(2018年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	91,884	91,884	—
(2) 営業貸付金	975,116		
貸倒引当金	△39,504		
利息返還損失引当金（債権放棄額）	△10,839		
	924,772	1,207,312	282,539
(3) 銀行業貸出金	48,808		
貸倒引当金	△1,315		
	47,493	53,881	6,387
(4) 割賦売掛金	53,034		
貸倒引当金	△3,082		
割賦利益繰延	△53		
	49,898	64,165	14,267
(5) 買取債権	10,603		
貸倒引当金	△3,099		
	7,503	7,503	—
(6) 有価証券、商品有価証券 及び投資有価証券			
① 売買目的有価証券	1,651	1,651	—
② 満期保有目的の債券	3,941	4,200	258
③ その他有価証券	58	58	—
資産計	1,127,204	1,430,658	303,453
(1) 短期借入金	10,873	10,873	—
(2) コマーシャル・ペーパー	29,998	29,998	—
(3) 銀行業預金	53,074	53,074	—
(4) 1年内償還予定の社債及び社債	256,560	258,977	2,417
(5) 1年内返済予定の長期借入金 及び長期借入金	437,086	437,610	524
負債計	787,593	790,535	2,941
デリバティブ取引（※）			
(1) ヘッジ会計が適用されていないもの	—	—	—
(2) ヘッジ会計が適用されているもの	—	—	—
デリバティブ取引計	—	—	—

（※）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で示しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	85,546	85,546	—
(2) 営業貸付金	1,000,428		
貸倒引当金	△40,191		
利息返還損失引当金 (債権放棄額)	△10,300		
	949,936	1,241,228	291,291
(3) 銀行業貸出金	48,331		
貸倒引当金	△724		
	47,606	51,591	3,984
(4) 割賦売掛金	63,740		
貸倒引当金	△3,632		
割賦利益繰延	△42		
	60,066	76,257	16,190
(5) 買取債権	9,435		
貸倒引当金	△3,081		
	6,354	6,354	—
(6) 有価証券、商品有価証券 及び投資有価証券			
① 売買目的有価証券	—	—	—
② 満期保有目的の債券	3,560	3,560	0
③ その他有価証券	0	0	—
資産計	1,153,071	1,464,538	311,467
(1) 短期借入金	11,547	11,547	—
(2) コマーシャル・ペーパー	39,998	39,998	—
(3) 銀行業預金	52,319	52,319	—
(4) 1年内償還予定の社債及び社債	244,211	246,440	2,229
(5) 1年内返済予定の長期借入金 及び長期借入金	429,386	428,761	△624
負債計	777,461	779,066	1,605
デリバティブ取引 (※)			
(1) ヘッジ会計が適用されていないもの	—	—	—
(2) ヘッジ会計が適用されているもの	—	—	—
デリバティブ取引計	—	—	—

(※) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金

満期のない預金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預金については、残存期間が短期（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 営業貸付金、(3) 銀行業貸出金及び(4) 割賦売掛金

期末日現在の残高について、回収可能性を加味した元利金の見積将来キャッシュ・フローを市場金利で割り引いた現在価値を時価としております。ただし、有担保のものについては、担保による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は決算日における貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額をもって時価としております。なお、一部連結子会社の営業貸付金及び個別信用購入あっせんについては、平均残存期間が概ね1年であり、時価は貸借対照表価額から貸倒引当金を控除した金額に近似していることから、当該価額を時価としております。

(5) 買取債権

買取債権については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における貸借対照表価額から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額をもって時価としております。

(6) 有価証券、商品有価証券及び投資有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。一部債券について、短期間で償還されることから時価は帳簿価額と近似しており、償却原価法による帳簿価額を時価としております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照ください。

負 債

(1) 短期借入金及び(2) コマーシャル・ペーパー

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 銀行業預金

満期が1年未満の預金は短期間で決済されるため、時価は帳簿価格と近似していることから、当該帳簿価額によっております。満期が1年超の預金については元利金合計を、市場金利により割り引いた現在価値を時価としております。

(4) 1年内償還予定の社債及び社債

社債のうち市場価格のあるものは市場価格によっております。市場価格がないもの及び私募債については、元利金合計（金利スワップの特例処理及び通貨スワップの振当処理の対象となる社債については、スワップ後のレートによる元利金合計）を、市場金利に信用リスクを加味した割引率により割り引いた現在価値を時価としております。

(5) 1年内返済予定の長期借入金及び長期借入金

長期借入金については、元利金合計（金利スワップの特例処理及び通貨スワップの振当処理の対象となる借入金については、スワップ後のレートによる元利金合計）を、市場金利に信用リスクを加味した割引率により割り引いた現在価値を時価としております。

デリバティブ取引

注記事項「デリバティブ取引関係」をご参照ください。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品等の連結貸借対照表計上額

区分	2018年3月31日 (百万円)	2019年3月31日 (百万円)
① 非上場株式(※1)(※2)	1,163	1,164
② 投資事業組合出資金(※1)(※3)	2	1
合 計	1,165	1,166

(※1) これらは金融商品時価情報の「資産 (6)有価証券、商品有価証券及び投資有価証券」には含まれておりません。

(※2) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価開示の対象とはしていません。

(※3) 投資事業組合出資金については、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されており、時価開示の対象とはしていません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
現金及び預金	91,884	—	—	—	—	—
営業貸付金(※1)(※2)	182,534	177,582	173,494	170,120	167,335	65,252
銀行業貸出金	29,134	2,892	3,287	5,926	3,258	4,310
割賦売掛金(※1)(※2)	10,636	10,048	10,048	10,048	10,048	195
有価証券及び投資有価証券						
① 満期保有目的の債券(国債)	846	293	139	—	475	2,187
② その他有価証券のうち 満期があるもの						
国債	58	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—
合 計	315,095	190,817	186,969	186,095	181,117	71,945

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
現金及び預金	85,546	—	—	—	—	—
営業貸付金(※1)(※2)	187,900	182,437	178,074	174,248	171,125	67,483
銀行業貸出金	30,474	3,251	5,039	3,580	2,448	3,537
割賦売掛金(※1)(※2)	12,624	12,021	12,021	12,021	12,021	458
有価証券及び投資有価証券						
① 満期保有目的の債券(国債)	479	598	—	448	223	1,809
② その他有価証券のうち 満期があるもの						
国債	—	—	—	—	—	—
その他	—	—	—	—	—	—
合 計	317,025	198,308	195,135	190,298	185,820	73,288

(※1) 営業貸付金及び割賦売掛金のうち、償還予定が見込めない貸倒懸念債権(前連結会計年度:35,955百万円、当連結会計年度:37,621百万円)等は含まれておりません。

(※2) 営業貸付金及び割賦売掛金のうちクレジットカード事業分は、平均ミニマムペイメントで毎月一定日に支払われた場合の予定額にて記載しております。

(注4) 社債、長期借入金、リース債務及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	10,873	—	—	—	—	—
コマーシャル・ペーパー	29,998	—	—	—	—	—
銀行業預金	53,074	—	—	—	—	—
1年内償還予定の社債及び社債	45,350	41,678	42,106	40,350	50,175	36,900
1年内返済予定の長期借入金及び 長期借入金	160,244	140,855	77,539	39,181	15,525	3,740
リース債務	573	456	314	281	97	—
合計	300,115	182,991	119,960	79,813	65,797	40,640

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	11,547	—	—	—	—	—
コマーシャル・ペーパー	39,998	—	—	—	—	—
銀行業預金	52,319	—	—	—	—	—
1年内償還予定の社債及び社債	41,519	47,116	53,640	50,115	28,410	23,410
1年内返済予定の長期借入金及び 長期借入金	146,714	84,967	55,350	66,833	45,020	30,500
リース債務	523	370	336	150	39	—
合計	292,623	132,453	109,326	117,098	73,470	53,910

(有価証券関係)

1 満期保有目的の債券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの			
(1) 国債・地方債等	3,941	4,200	258
(2) 社債	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	3,941	4,200	258
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの			
(1) 国債・地方債等	—	—	—
(2) 社債	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	—	—	—
合計	3,941	4,200	258

当連結会計年度 (2019年3月31日)

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの			
(1) 国債・地方債等	2,047	2,072	24
(2) 社債	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	2,047	2,072	24
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの			
(1) 国債・地方債等	1,512	1,487	△24
(2) 社債	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	1,512	1,487	△24
合計	3,560	3,560	0

2 その他有価証券

前連結会計年度（2018年3月31日）

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの			
(1) 株式	0	0	0
(2) 債券			
国債・地方債等	58	57	0
社債	—	—	—
その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	58	57	0
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの			
(1) 株式	—	—	—
(2) 債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	—	—	—
合計	58	57	0

当連結会計年度（2019年3月31日）

区分	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの			
(1) 株式	0	0	0
(2) 債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	0	0	0
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの			
(1) 株式	—	—	—
(2) 債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
小計	—	—	—
合計	0	0	0

3 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	33	25	—
(2) 債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	33	25	—

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

区分	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	3	3	—
(2) 債券			
国債・地方債等	—	—	—
社債	—	—	—
その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	3	3	—

4 減損処理を行った有価証券

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
有価証券の減損処理額 (その他有価証券の株式)	0 百万円	6 百万円

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

前連結会計年度(2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(2019年3月31日)

該当事項はありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 金利関連

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金 及び社債	162,459	78,381	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金及び社債と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金等の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例処理	金利スワップ取引 支払固定・受取変動	長期借入金 及び社債	81,715	32,455	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金及び社債と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金等の時価に含めて記載しております。

(2) 通貨関連

前連結会計年度(2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の 振当処理	通貨スワップ取引	長期借入金 及び社債	27,614	25,186	(注)
	為替予約取引 買建 米ドル	短期借入金	1,838	—	
	合計		29,452	25,186	

(注) 為替予約等の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金及び社債、短期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金等の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度(2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の 振当処理	通貨スワップ取引	長期借入金 及び社債	21,197	8,980	(注)

(注) 為替予約等の振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金及び社債、短期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金等の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社及び連結子会社は、従業員の退職給付に充てるため、積立型、非積立型の確定給付制度及び確定拠出制度を採用しております。

確定給付企業年金制度（すべて積立型制度であります。）では、給与と勤務期間に基づいた一時金又は年金を支給します。

退職一時金制度（非積立型制度）では、退職給付として、給与と勤務期間に基づいた一時金を支給します。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
退職給付債務の期首残高	22,030	百万円	22,631	百万円
勤務費用	1,449	〃	1,452	〃
利息費用	93	〃	70	〃
数理計算上の差異の発生額	203	〃	311	〃
退職給付の支払額	△1,083	〃	△1,014	〃
その他	△63	〃	△74	〃
退職給付債務の期末残高	22,631	〃	23,377	〃

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
年金資産の期首残高	25,831	百万円	26,856	百万円
期待運用収益	780	〃	830	〃
数理計算上の差異の発生額	378	〃	△709	〃
事業主からの拠出額	973	〃	1,027	〃
退職給付の支払額	△1,083	〃	△1,014	〃
その他	△25	〃	△54	〃
年金資産の期末残高	26,856	〃	26,937	〃

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
積立型制度の退職給付債務	22,296	百万円	23,038	百万円
年金資産	△26,856	〃	△26,937	〃
	△4,559	〃	△3,898	〃
非積立型制度の退職給付債務	334	〃	338	〃
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△4,224	〃	△3,559	〃
退職給付に係る負債	334	〃	338	〃
退職給付に係る資産	△4,559	〃	△3,898	〃
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△4,224	〃	△3,559	〃

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
勤務費用	1,449	百万円	1,452	百万円
利息費用	93	〃	70	〃
期待運用収益	△780	〃	△830	〃
数理計算上の差異の費用処理額	△103	〃	△103	〃
臨時に支払った割増退職金	103	〃	74	〃
確定給付制度に係る退職給付費用	762	〃	663	〃

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)		当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	
数理計算上の差異	68	百万円	△1,112	百万円

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)	
未認識数理計算上の差異	△803	百万円	△1,916	百万円

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計額に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
国内株式	23 %	21 %
国内債券	23 %	22 %
外国株式	16 %	16 %
外国債券	8 %	8 %
オルタナティブ投資	18 %	18 %
保険一般勘定	5 %	4 %
その他	7 %	11 %
合計	100 %	100 %

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表している。）

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	主に0.09 %	主に0.00 %
長期期待運用収益率	主に3.00 %	主に3.00 %
予想昇給率	主に6.50 %	主に6.50 %

(注) 予想昇給率は、ポイント制度に基づき算定しております。

3 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度282百万円、当連結会計年度290百万円であります。

(ストック・オプション等関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒損失	17,979 百万円	20,791 百万円
貸倒引当金	10,374 "	10,432 "
債務保証損失引当金	3,080 "	2,958 "
利息返還損失引当金	31,865 "	31,324 "
未払賞与	534 "	488 "
役員退職慰労金未払分	51 "	52 "
未収利息不計上	487 "	501 "
ソフトウェア	3,250 "	3,676 "
繰延資産	349 "	282 "
繰延消費税等	378 "	363 "
有価証券評価損	170 "	163 "
ゴルフ会員権評価損	14 "	13 "
減損損失	255 "	255 "
資産調整勘定	21 "	— "
資産除去債務	1,211 "	1,153 "
株式配当金	3,493 "	3,493 "
退職給付に係る負債	66 "	67 "
税務上の繰越欠損金(注2)	126,354 "	100,090 "
その他	934 "	989 "
繰延税金資産小計	200,877 "	177,100 "
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注2)	— "	△93,764 "
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	— "	△41,382 "
評価性引当額小計(注1)	△158,899 "	△135,146 "
繰延税金資産合計	41,977 "	41,953 "
繰延税金負債		
子会社の留保利益	3,709 "	4,655 "
その他有価証券評価差額金	0 "	— "
退職給付に係る資産	1,395 "	1,190 "
その他	21 "	18 "
繰延税金負債合計	5,127 "	5,864 "
繰延税金資産の純額	36,850 "	36,089 "

(注) 1 評価性引当額が23,752百万円減少しております。この減少の主な内容は、税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額27,746百万円の減少、利息返還損失引当金に係る評価性引当額1,907百万円の増加などによるものであります。

2 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠損金(a)	40,609	29,782	18,206	6,824	4,667	—	100,090
評価性引当額	△34,283	△29,782	△18,206	△6,824	△4,667	—	△93,764
繰延税金資産	6,326	—	—	—	—	—	(b)6,326

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(b) 税務上の繰越欠損金100,090百万円(法定実効税率を乗じた額)について、繰延税金資産6,326百万円を計上しております。この繰延税金資産6,326百万円は、当社における税務上の繰越欠損金の残高99,976百万円(法定実効税率を乗じた額)に対して認識したものであります。当該税務上の繰越欠損金については、将来の課税所得の見込み等により回収可能と判断しております。

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9 %	30.6 %
(調整)		
評価性引当額の増減	△41.1 %	△43.7 %
のれん償却額	0.4 %	0.5 %
受取配当金等の永久に益金に算入されない項目	△1.2 %	0.0 %
子会社の留保利益	0.8 %	2.8 %
連結子会社との税率差異	△2.2 %	△3.9 %
外国子会社配当金に係る源泉所得税	0.5 %	0.4 %
繰越欠損金期限切れ	19.5 %	36.2 %
その他	0.9 %	0.3 %
税効果会計適用後の法人税等の負担率	8.5 %	23.2 %

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

(1) 当該資産除去債務の概要

賃貸借契約において原状回復が契約で要求されている賃貸物件に造作した内装設備等について、資産除去債務を計上しております。

(2) 当該資産除去債務の金額の算定方法

資産除去債務の見積りにあたり、使用見込期間は取得より5年から16年間、割引率は割戻期間に対応した市場金利（スワップレート）を採用しております。

(3) 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
期首残高	4,499 百万円	4,410 百万円
有形固定資産の取得に伴う増加額	42 "	33 "
時の経過による調整額	29 "	20 "
資産除去債務の履行による減少額	△174 "	△282 "
見積りの変更による減少額	— "	△9 "
為替換算差額	14 "	△2 "
期末残高	4,410 "	4,170 "

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、国内外においてローン・クレジットカード事業を中心とした金融サービス事業を展開しております。

国内では、ローン・クレジットカード事業の他、信用保証事業、債権管理回収事業を中心に、また、海外では、アジアにおいて金融サービス事業を展開しております。

したがって、当社は、「ローン・クレジットカード事業」、「信用保証事業」、「海外金融事業」、「債権管理回収事業」の4つを報告セグメントとしております。

2 報告セグメントごとの営業収益、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。なお、事業セグメントの利益は営業利益をベースとした数値であり、セグメント間の営業収益は第三者間取引価格に基づいております。

なお、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度のセグメント資産については当該会計基準を遡って適用した後の数値となっております。

3 報告セグメントごとの営業収益、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

	報告セグメント					その他 (注) 1	合計
	ローン・ クレジットカード事業 (百万円)	信用保証 事業 (百万円)	海外金融 事業 (百万円)	債権管理 回収事業 (百万円)	計 (百万円)		
営業収益							
外部顧客からの営業収益	139,826	65,171	51,895	6,560	263,453	0	263,453
セグメント間の内部 営業収益又は振替高	0	124	8	—	133	81	214
計	139,826	65,295	51,904	6,560	263,586	81	263,668
セグメント利益	46,864	17,808	15,478	615	80,766	81	80,848
セグメント資産	853,532	36,143	239,492	8,788	1,137,957	49,793	1,187,751
その他の項目							
減価償却費	2,648	1,117	672	11	4,449	—	4,449
のれん償却額	—	984	—	—	984	—	984
貸倒費用（注）2	28,633	33,361	14,171	1,404	77,570	—	77,570
利息返還損失引当金繰入額	—	—	—	—	—	—	—
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	1,069	100	586	8	1,765	—	1,765

(注) 1 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない営業収益、利益及び資産その他の項目であります。

2 貸倒引当金繰入額及び債務保証損失引当金繰入額等の合計額であります。

3 セグメントに対する固定資産の配分基準と関連する減価償却費の配分基準が異なっております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

	報告セグメント					その他 (注) 1	合計
	ローン・ クレジット カード事業 (百万円)	信用保証 事業 (百万円)	海外金融 事業 (百万円)	債権管理 回収事業 (百万円)	計 (百万円)		
営業収益							
外部顧客からの営業収益	144,826	69,341	56,984	5,893	277,045	23	277,069
セグメント間の内部 営業収益又は振替高	2	—	11	—	14	54	69
計	144,829	69,341	56,995	5,893	277,060	78	277,138
セグメント利益	11,804	25,241	19,802	390	57,239	78	57,317
セグメント資産	882,241	42,163	245,352	7,713	1,177,471	6,987	1,184,458
その他の項目							
減価償却費	2,824	1,282	631	10	4,749	—	4,749
のれん償却額	—	813	—	—	813	—	813
貸倒費用（注）2	29,761	30,245	14,634	1,406	76,048	—	76,048
利息返還損失引当金繰入額	39,479	—	—	—	39,479	—	39,479
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	677	175	245	62	1,160	—	1,160

（注） 1 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない営業収益、利益及び資産その他の項目であります。

2 貸倒引当金繰入額及び債務保証損失引当金繰入額等の合計額であります。

3 セグメントに対する固定資産の配分基準と関連する減価償却費の配分基準が異なっております。

4 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の内容(差異調整に関する事項)

営業収益	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)
報告セグメント計	263,586	277,060
「その他」の区分の営業収益	81	78
セグメント間取引消去	△206	△69
親子会社間の会計処理統一等による調整額	△8	0
連結財務諸表の営業収益	263,453	277,069

利益	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)
報告セグメント計	80,766	57,239
「その他」の区分の利益	81	78
セグメント間取引消去	△48	48
親子会社間の会計処理統一等による調整額	141	241
連結財務諸表の営業利益	80,942	57,607

資産	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)
報告セグメント計	1,137,957	1,177,471
「その他」の区分の資産	49,793	6,987
セグメント間消去	△24,452	△23,828
本社資産	117,322	148,843
親子会社間の会計処理統一等による調整額	△4,664	△7,565
連結財務諸表の資産合計	1,275,957	1,301,908

その他の項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表 計上額	
	前連結 会計年度 (百万円)	当連結 会計年度 (百万円)	前連結 会計年度 (百万円)	当連結 会計年度 (百万円)	前連結 会計年度 (百万円)	当連結 会計年度 (百万円)	前連結 会計年度 (百万円)	当連結 会計年度 (百万円)
減価償却費	4,449	4,749	—	—	△1	—	4,448	4,749
のれん償却額	984	813	—	—	—	—	984	813
貸倒費用	77,570	76,048	—	—	△0	△58	77,570	75,989
利息返還損失引当金繰入額	—	39,479	—	—	—	—	—	39,479
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	1,765	1,160	—	—	4,898	597	6,663	1,758

(注) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額は、本社資産の設備投資額であります。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

「金融サービス事業」における外部顧客からの営業収益の金額が、連結損益計算書の営業収益の90%超であるため、製品及びサービスに関する情報の記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 営業収益

日本 (百万円)	海外 (百万円)	合計 (百万円)
211,474	51,979	263,453

(注) 営業収益は顧客の所在地を基礎として、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

連結損益計算書の営業収益の10%以上である、単一の外部顧客からの営業収益は該当ありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 製品及びサービスごとの情報

「金融サービス事業」における外部顧客からの営業収益の金額が、連結損益計算書の営業収益の90%超であるため、製品及びサービスに関する情報の記載を省略しております。

2 地域ごとの情報

(1) 営業収益

日本 (百万円)	海外 (百万円)	合計 (百万円)
219,995	57,073	277,069

(注) 営業収益は顧客の所在地を基礎として、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

連結損益計算書の営業収益の10%以上である、単一の外部顧客からの営業収益は該当ありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

	ローン・ クレジット カード事業 (百万円)	信用保証 事業 (百万円)	海外金融 事業 (百万円)	債権管理回収 事業 (百万円)	その他 (百万円)	全社・消去 (百万円)	合計 (百万円)
減損損失	—	426	—	—	—	—	426

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

	ローン・ クレジット カード事業 (百万円)	信用保証 事業 (百万円)	海外金融 事業 (百万円)	債権管理回収 事業 (百万円)	その他 (百万円)	全社・消去 (注) (百万円)	合計 (百万円)
減損損失	—	—	—	—	—	2,800	2,800

(注) 報告セグメントに配分されていない本社厚生施設に係る減損損失であります。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

	ローン・ クレジット カード事業 (百万円)	信用保証 事業 (百万円)	海外金融 事業 (百万円)	債権管理回収 事業 (百万円)	その他 (百万円)	全社・消去 (百万円)	合計 (百万円)
当期償却額	—	984	—	—	—	—	984
当期末残高	—	4,063	—	—	—	—	4,063

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

	ローン・ クレジット カード事業 (百万円)	信用保証 事業 (百万円)	海外金融 事業 (百万円)	債権管理回収 事業 (百万円)	その他 (百万円)	全社・消去 (百万円)	合計 (百万円)
当期償却額	—	813	—	—	—	—	813
当期末残高	—	3,250	—	—	—	—	3,250

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者の取引

(ア) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容	議決権等 の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の親会社を持つ会社	三菱UFJ信託銀行(株)	東京都千代田区	324,279	信託銀行業	直接 (2.01%)	借入	資金の借入	借入 94,171	コマーシャル・ペーパー	8,999
								返済 80,676	1年内返済予定の長期借入金	61,694
									長期借入金	96,864
							利息の支払	2,034	流動負債の その他	9
	(株)三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区	1,711,958	銀行業	—	借入	資金の借入	借入 40,295	コマーシャル・ペーパー	8,999
								返済 32,000	1年内返済予定の長期借入金	32,618
									長期借入金	19,600
							利息の支払	903	流動負債の その他	2
						債務保証	同社無担保ローンに対する信用保証料の受取	24,684	流動資産の その他	6,565
							同社無担保ローンに対する保証債務残高	629,008	—	—

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

- 三菱UFJ信託銀行(株)及び(株)三菱東京UFJ銀行の借入の利率は、一般市中金利となっております。
- (株)三菱東京UFJ銀行の個人ローンに対する債務保証の保証料率は、保証料の市場実勢を参考に交渉の上決定しております。なお、同社の個人ローン債務者が債務弁済の履行が困難になった場合については、同社との契約に従い当社が代位弁済を行っております。この代位弁済の履行条件については、両者協議の上決定しております。
- (株)三菱東京UFJ銀行は2018年4月1日付で商号を(株)三菱UFJ銀行に変更しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容	議決権等 の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の親会社を持つ会社	三菱UFJ信託銀行(株)	東京都千代田区	324,279	信託銀行業	直接 (2.01%)	借入	資金の借入	返済 167,558	—	—
							利息の支払	73	—	—
	(株)三菱UFJ銀行	東京都千代田区	1,711,958	銀行業	—	借入	資金の借入	借入 340,859	コマーシャル・ペーパー	21,999
								返済 169,312	1年内返済予定の長期借入金	63,454
									長期借入金	147,322
							利息の支払	2,412	流動負債のその他	13
						債務保証	同社無担保ローンに対する信用保証料の受取	24,545	流動資産のその他	6,249
							同社無担保ローンに対する保証債務残高	618,836	—	—

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

- 1 三菱UFJ信託銀行(株)及び(株)三菱UFJ銀行の借入の利率は、一般市中金利となっております。
- 2 (株)三菱UFJ銀行の個人ローンに対する債務保証の保証料率は、保証料の市場実勢を参考に交渉の上決定しております。なお、同社の個人ローン債務者が債務弁済の履行が困難になった場合については、同社との契約に従い当社が代位弁済を行っております。この代位弁済の履行条件については、両者協議の上決定しております。
- 3 三菱UFJ信託銀行(株)からの借入は、(株)三菱UFJフィナンシャル・グループにおける機能別再編により、2018年4月16日付で(株)三菱UFJ銀行へ移管されております。なお、上記の三菱UFJ信託銀行(株)の取引金額における返済の額は(株)三菱UFJ銀行へ移管された資金の借入であり、(株)三菱UFJ銀行の取引金額における借入の額に同額含まれております。

(イ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る。）等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその他近親者	福元一雄	—	—	公益財団法人家計経済研究所 評議員	—	—	寄付	16	—	—

(注) 1 上記取引金額には消費税等を含んでおりません。

2 取引条件及び取引条件の決定方針等

公益財団法人家計経済研究所は家計収支の調査研究を行っており、その事業計画、収支状況等を総合的に勘案の上決定しております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者の取引

(ア) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係会社の子会社等
前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金	事業の内容	議決権等の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の親会社を持つ会社	Bank of Ayudhya Public Company Limited	タイ王国 バンコク	(百万バーツ) 73,557	銀行業	—	借入	資金の借入	借入 11,916	短期借入金	172
								返済 10,592	1年内返済 予定の長期 借入金	1,725
									長期借入金	9,260
							利息の支払	356	流動負債の その他	88

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

Bank of Ayudhya Public Company Limitedの借入の利率は、一般市中金利となっております。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

種類	会社等の名称	所在地	資本金	事業の内容	議決権等の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
同一の親会社を持つ会社	Bank of Ayudhya Public Company Limited	タイ王国 バンコク	(百万バーツ) 73,557	銀行業	—	借入	資金の借入	借入 10,410	短期借入金	1,125
								返済 7,743	1年内返済 予定の長期 借入金	1,023
									長期借入金	11,539
							利息の支払	388	流動負債の その他	72

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

Bank of Ayudhya Public Company Limitedの借入の利率は、一般市中金利となっております。

(イ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

該当事項はありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

(1) 親会社情報

㈱三菱UFJフィナンシャル・グループ

(東京証券取引所、名古屋証券取引所、ニューヨーク証券取引所に上場)

(2) 重要な関連会社の要約財務情報

当連結会計年度において、重要性が乏しいため、開示を省略しております。

(1株当たり情報)

項目	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	206.12 円	227.35 円
1株当たり当期純利益	45.05 円	24.12 円

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益	70,572 百万円	37,781 百万円
普通株主に帰属しない金額	— 百万円	— 百万円
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益	70,572 百万円	37,781 百万円
普通株式の期中平均株式数	1,566,614,208 株	1,566,614,208 株

- 3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
純資産の部の合計額	344,437 百万円	381,501 百万円
純資産の部の合計額から控除する金額	21,521 百万円	25,327 百万円
(うち非支配株主持分)	(21,521 百万円)	(25,327 百万円)
普通株式に係る期末の純資産額	322,916 百万円	356,174 百万円
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数	1,566,614,208 株	1,566,614,208 株

(重要な後発事象)

<連結子会社株式の売却>

当社は、2019年3月15日開催の取締役会決議に基づき、連結子会社PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. (以下バンクビーエヌピー) の株式を、2019年4月29日に株式会社三菱UFJ銀行(以下三菱UFJ銀行)が実施したキャッシュオファーに応じ、全株式売却いたしました。なお、本株式売却に伴い、バンクビーエヌピーは当社の連結の範囲から除外されます。

1. 株式売却の概要

(1) 株式売却の相手先企業の名称

三菱UFJ銀行

(2) 株式売却の理由

当社は、インドネシアが東南アジア最大の人口を有しており、リテール金融分野のマーケット成長性が期待できることから、無担保個人ローン事業が認められる銀行形態により進出いたしました。三菱UFJ銀行のPT Bank Danamon Indonesia, Tbk. (以下バンクダナモン) への戦略出資を受け、インドネシア共和国バンドン市でのバンクビーエヌピーの有する顧客基盤に対し、バンクダナモンの包括的なサービスが提供可能となるなど、MUFGグループとして多くの相乗効果が見込まれることなどから、全株式の売却に至りました。

(3) 株式売却日

2019年4月29日

(4) 法的形式を含む取引の概要

受取対価を現金とする株式の売却

2. 連結子会社の概要

(1) 事業内容

インドネシア共和国における銀行業

(2) 事業規模

① 資産・負債等の額(2018年12月31日現在)

総資産	63,206百万円
負債	52,871百万円
純資産	10,334百万円

※2018年12月31日の直物為替相場(1ルピア=0.0077円)にて換算

② 損益額(自2018年1月1日至2018年12月31日)

営業収益	7,354百万円
営業利益	94百万円
経常利益	136百万円
当期純利益	62百万円

※2018年1月1日～2018年12月31日期中平均相場(1ルピア=0.0078円)にて換算

3. 売却株式数、売却価額、売却後の持分比率

売却株式数	540,619,195株
売却価額	1株当たり4,088ルピア
売却後の持分比率	— %

4. 連結子会社が含まれていた報告セグメント

海外金融事業

5. 実施する会計処理の概要

当該売却資産の帳簿価額と売却額との差額を関係会社株式売却益として特別利益に計上する予定です。なお、特別利益の金額については、バンクビーエヌピーのみなし売却日現在の財務諸表を基礎に計算を実施する予定ですが、当該財務諸表未入手につき、関係会社株式売却益の金額は未確定です。

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
当社	第64回国内公募 無担保普通社債	2013. 9. 5	25,000	—	—	—	—
	第65回国内公募 無担保普通社債	2014. 2. 28	18,000	18,000 (18,000)	0.700	—	2020. 2. 28
	第66回国内公募 無担保普通社債	2014. 2. 28	18,000	18,000 (—)	0.900	—	2021. 2. 26
	第67回国内公募 無担保普通社債	2014. 6. 6	10,000	10,000 (10,000)	0.500	—	2019. 6. 6
	第68回国内公募 無担保普通社債	2014. 6. 6	20,000	20,000 (—)	0.950	—	2022. 6. 6
	第69回国内公募 無担保普通社債	2014. 9. 26	20,000	20,000 (—)	1.210	—	2024. 9. 26
	第8回国内私募 無担保普通社債	2015. 3. 31	10,000	10,000 (—)	0.369 (注)3	—	2022. 3. 31
	第70回国内公募 無担保普通社債	2015. 5. 29	10,000	—	—	—	—
	第71回国内公募 無担保普通社債	2015. 5. 29	15,000	15,000 (—)	0.560	—	2020. 5. 29
	第72回国内公募 無担保普通社債	2016. 6. 3	10,000	10,000 (—)	0.370	—	2021. 6. 3
	第73回国内公募 無担保普通社債	2017. 2. 28	10,000	10,000 (—)	0.369	—	2022. 2. 28
	第74回国内公募 無担保普通社債	2017. 2. 28	10,000	10,000 (—)	0.590	—	2024. 2. 28
	第75回国内公募 無担保普通社債	2018. 2. 28	25,000	25,000 (—)	0.309	—	2023. 2. 28
	第76回国内公募 無担保普通社債	2018. 8. 30	—	10,000 (—)	0.140	—	2021. 8. 30
	第77回国内公募 無担保普通社債	2018. 8. 30	—	15,000 (—)	0.274	—	2023. 8. 30

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
EASY BUY Public Company Limited	第6回私募 無担保普通社債	2014. 9. 26	3,328 {964百万円}	3,289 (3,289) {964百万円}	3.880	—	2019. 9. 26
	第7回私募 無担保普通社債	2015. 2. 24	3,931 {1,139百万円}	3,886 (—) {1,139百万円}	3.491	—	2020. 2. 24
	第8回私募 無担保普通社債	2015. 3. 12	5,175 {1,500百万円}	—	—	—	—
	第9回私募 無担保普通社債	2015. 3. 12	3,450 {1,000百万円}	3,410 (—) {1,000百万円}	4.100	—	2020. 3. 12
	第10回私募 無担保普通社債	2015. 9. 30	5,175 {1,500百万円}	—	—	—	—
	第11回私募 無担保普通社債	2015. 9. 30	1,725 {500百万円}	1,705 (—) {500百万円}	3.080	—	2020. 9. 30
	第12回私募 無担保普通社債	2016. 2. 25	6,900 {2,000百万円}	6,820 (6,820) {2,000百万円}	2.070	—	2019. 2. 25
	第13回私募 無担保普通社債	2016. 2. 25	6,900 {2,000百万円}	6,820 (—) {2,000百万円}	2.560	—	2021. 2. 25
	第14回私募 無担保普通社債	2016. 9. 15	3,450 {1,000百万円}	3,410 (—) {1,000百万円}	2.990	—	2023. 9. 15
	第15回私募 無担保普通社債	2016. 9. 15	3,450 {1,000百万円}	3,410 (3,410) {1,000百万円}	2.140	—	2019. 9. 16
	第16回私募 無担保普通社債	2017. 3. 30	5,175 {1,500百万円}	5,115 (—) {1,500百万円}	3.020	—	2022. 3. 30
	第17回私募 無担保普通社債	2017. 6. 7	3,450 {1,000百万円}	3,410 (—) {1,000百万円}	3.370	—	2024. 6. 7
	第18回私募 無担保普通社債	2017. 11. 24	3,450 {1,000百万円}	3,410 (—) {1,000百万円}	2.220	—	2021. 11. 24
	第19回私募 無担保普通社債	2018. 4. 27	—	3,410 (—) {1,000百万円}	1.990	—	2021. 4. 27
	第20回私募 無担保普通社債	2018. 10. 22	—	5,115 (—) {1,500百万円}	2.500	—	2020. 10. 22
合計	—	—	256,560	244,211 (41,519)	—	—	—

- (注) 1 「当期末残高」欄の()書は、1年以内の償還予定の金額であります。
2 「当期首残高」及び「当期末残高」欄の{ }書は、外貨建の金額であります。
3 当該債券は変動金利であるため、2019年3月末現在の適用利率を記載しております。
4 連結決算日後5年以内における1年ごとの償還予定額は次のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
41,519	47,116	53,640	50,115	28,410

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	10,873	11,547	1.87	—
コマーシャル・ペーパー	29,998	39,998	0.05	—
1年以内に返済予定の長期借入金	160,244	146,714	1.16	—
1年以内に返済予定のリース債務	573	523	1.83	—
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	276,841	282,671	0.82	2020年3月31日 ～2024年12月30日
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)	1,150	896	2.16	2020年4月20日 ～2023年12月29日
其他有利子負債(銀行業預金)	53,074	52,319	5.33	—
計	532,757	534,670	—	—

(注) 1 「平均利率」を算定する際の利率及び残高は、期末の数値を使用しております。

2 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年以内における1年ごとの返済予定額は次のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	84,967	55,350	66,833	45,020
リース債務	370	336	150	39

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	当連結会計年度
営業収益 (百万円)	68,049	137,323	206,933	277,069
税金等調整前四半期 (当期)純利益 (百万円)	23,205	48,192	71,128	55,334
親会社株主に帰属する 四半期(当期)純利益 (百万円)	18,965	39,839	57,826	37,781
1株当たり四半期 (当期)純利益 (円)	12.11	25.43	36.91	24.12

(会計期間)	第 1 四半期	第 2 四半期	第 3 四半期	第 4 四半期
1株当たり四半期純利益又は 1株当たり四半期純損失(△) (円)	12.11	13.32	11.48	△12.79

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	78,196	72,826
営業貸付金	※2, ※3, ※5 803,365	※2, ※3, ※5 821,943
割賦売掛金	※6 52,445	※6 63,137
有価証券	58	—
原材料及び貯蔵品	25	34
前払費用	612	763
未収収益	15,529	15,833
関係会社短期貸付金	2,600	1,300
1年内回収予定の関係会社長期貸付金	630	—
求償債権	47,852	52,608
その他	2,564	3,483
貸倒引当金	△57,230	△58,410
流動資産合計	946,651	973,522
固定資産		
有形固定資産		
建物	23,147	19,561
減価償却累計額	△19,369	△16,713
建物（純額）	3,778	2,847
構築物	3,848	3,411
減価償却累計額	△3,085	△2,744
構築物（純額）	763	667
車両運搬具	2	—
減価償却累計額	△2	—
車両運搬具（純額）	0	—
器具備品	18,351	18,109
減価償却累計額	△8,996	△9,139
器具備品（純額）	9,355	8,969
土地	6,109	3,123
リース資産	3,992	4,130
減価償却累計額	△2,435	△2,868
リース資産（純額）	1,556	1,261
有形固定資産合計	21,563	16,869
無形固定資産		
のれん	4,063	3,250
借地権	4	4
ソフトウェア	5,895	4,593
電話加入権	36	36
その他	1	1
無形固定資産合計	10,001	7,886

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
投資その他の資産		
投資有価証券	830	823
関係会社株式	20,231	21,437
破産更生債権等	※3 1,375	※3 1,589
長期前払費用	1,418	1,920
繰延税金資産	36,068	36,919
差入保証金	4,812	4,598
前払年金費用	5,064	5,458
その他	1,201	483
貸倒引当金	△870	△990
投資その他の資産合計	70,132	72,240
固定資産合計	101,697	96,996
資産合計	1,048,349	1,070,518
負債の部		
流動負債		
買掛金	489	494
コマーシャル・ペーパー	29,998	39,998
1年内返済予定の長期借入金	※4 150,572	※4 134,718
1年内償還予定の社債	35,000	28,000
リース債務	573	521
未払金	4,791	3,270
未払費用	7,462	8,419
未払法人税等	2,582	5,348
預り金	329	350
債務保証損失引当金	※1 9,360	※1 8,850
資産除去債務	85	10
その他	142	337
流動負債合計	241,385	230,319
固定負債		
社債	166,000	163,000
長期借入金	※4 246,150	※4 258,876
リース債務	1,150	890
利息返還損失引当金	104,068	102,300
資産除去債務	4,052	3,901
その他	1,542	438
固定負債合計	522,965	529,406
負債合計	764,351	759,726

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	63,832	63,832
資本剰余金		
資本準備金	72,322	72,322
その他資本剰余金	3,687	3,687
資本剰余金合計	76,010	76,010
利益剰余金		
利益準備金	4,320	4,320
その他利益剰余金		
別途積立金	80,000	80,000
繰越利益剰余金	79,627	106,422
利益剰余金合計	163,948	190,743
自己株式	△19,794	△19,794
株主資本合計	283,997	310,792
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	0	△0
評価・換算差額等合計	0	△0
純資産合計	283,997	310,792
負債純資産合計	1,048,349	1,070,518

② 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当事業年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
営業収益		
営業貸付金利息	120,405	123,474
包括信用購入あっせん収益	6,168	7,773
信用保証収益	48,892	51,231
その他の金融収益		
預金利息	0	0
為替差益	—	10
その他の金融収益計	0	11
その他の営業収益	19,843	21,145
営業収益合計	195,310	203,636
営業費用		
金融費用		
支払利息	4,263	3,652
社債利息	1,448	1,349
社債発行費償却	127	130
その他	601	487
金融費用合計	6,442	5,619
その他の営業費用		
広告宣伝費	11,299	11,800
貸倒引当金繰入額	49,893	48,057
債務保証損失引当金繰入額	9,360	8,850
利息返還損失引当金繰入額	—	39,479
従業員給与手当賞与	12,042	12,300
退職給付費用	718	644
福利厚生費	2,006	1,997
賃借料	5,087	4,940
減価償却費	3,263	3,629
支払手数料	20,804	19,476
のれん償却額	984	813
その他	11,639	12,391
その他の営業費用計	127,100	164,381
営業費用合計	133,542	170,000
営業利益	61,767	33,635

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年 4 月 1 日 至 2018年 3 月31日)	当事業年度 (自 2018年 4 月 1 日 至 2019年 3 月31日)
営業外収益		
受取利息	※ 1 68	※ 1 42
有価証券利息	0	0
受取配当金	※ 1 3,167	※ 1 3,449
その他	※ 1 662	※ 1 467
営業外収益合計	3,899	3,960
営業外費用		
支払利息	28	30
為替差損	71	31
保険解約損	16	55
その他	79	6
営業外費用合計	195	124
経常利益	65,471	37,472
特別利益		
固定資産売却益	※ 2 4	※ 2 345
投資有価証券売却益	25	3
特別利益合計	29	348
特別損失		
固定資産売却損	※ 3 6	※ 3 258
固定資産除却損	※ 4 138	※ 4 185
減損損失	426	2,800
投資有価証券評価損	0	6
その他	※ 5 2	※ 5 1
特別損失合計	574	3,252
税引前当期純利益	64,926	34,568
法人税、住民税及び事業税	2,759	5,492
法人税等調整額	△1,018	△851
法人税等合計	1,741	4,640
当期純利益	63,184	29,927

③ 【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	63,832	72,322	3,687	76,010
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純利益				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				
当期変動額合計	—	—	—	—
当期末残高	63,832	72,322	3,687	76,010

	株主資本			
	利益剰余金			
	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
		別途積立金	繰越利益剰余金	
当期首残高	4,320	80,000	16,443	100,763
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純利益			63,184	63,184
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				
当期変動額合計	—	—	63,184	63,184
当期末残高	4,320	80,000	79,627	163,948

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△19,794	220,812	4	4	220,816
当期変動額					
剰余金の配当					
当期純利益		63,184			63,184
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			△3	△3	△3
当期変動額合計	—	63,184	△3	△3	63,181
当期末残高	△19,794	283,997	0	0	283,997

当事業年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本			
	資本金	資本剰余金		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計
当期首残高	63,832	72,322	3,687	76,010
当期変動額				
剰余金の配当				
当期純利益				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				
当期変動額合計	—	—	—	—
当期末残高	63,832	72,322	3,687	76,010

	株主資本			
	利益剰余金			
	利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
別途積立金		繰越利益剰余金		
当期首残高	4, 320	80, 000	79, 627	163, 948
当期変動額				
剰余金の配当			△3, 133	△3, 133
当期純利益			29, 927	29, 927
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）				
当期変動額合計	－	－	26, 794	26, 794
当期末残高	4, 320	80, 000	106, 422	190, 743

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△19,794	283,997	0	0	283,997
当期変動額					
剰余金の配当		△3,133			△3,133
当期純利益		29,927			29,927
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			△0	△0	△0
当期変動額合計	—	26,794	△0	△0	26,794
当期末残高	△19,794	310,792	△0	△0	310,792

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

① 時価のあるもの…期末日の市場価格等に基づく時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

② 時価のないもの…移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合及びこれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっております。

2 デリバティブ等の評価基準及び評価方法

スワップ取引…時価法

3 たな卸資産の評価基準及び評価方法

貯蔵品…主として先入先出法による原価法

4 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）…定率法

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 … 2～47年

構築物 … 3～45年

器具備品 … 2～20年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）…定額法

なお、主な償却年数は次のとおりであります。

のれん … 10～15年

自社利用のソフトウェア … 社内における利用可能期間（5年）

(3) リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(4) 長期前払費用…均等償却

5 繰延資産の処理方法

社債発行費については、支出時に全額費用として処理しております。

6 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、為替差額は損益として処理しております。

7 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

営業貸付金等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 債務保証損失引当金

債務保証に係る損失に備えるため、当事業年度末における損失発生見込額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。なお、年金資産の見込額が退職給付債務見込額に未認識過去勤務債務及び未認識数理計算上の差異を加減した額を超過している場合は、超過額を前払年金費用として計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（５年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（５年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌事業年度から費用処理することとしております。

(4) 利息返還損失引当金

将来の利息返還損失に備えるため、過去の返還実績を踏まえ、かつ最近の返還状況を考慮する等により返還額を合理的に見積もり計上しております。

8 収益及び費用の計上基準

(1) 営業貸付金利息…発生基準により計上

なお、営業貸付金に係る未収利息については、利息制限法利率又は当社約定利率のいずれか低い方により計上しております。

(2) 包括信用購入あっせん収益

顧客手数料…残債方式により計上

加盟店手数料…あっせん手数料として取扱時に計上

(3) 信用保証収益…残債方式により計上

(注) 計上方法の内容は次のとおりであります。

残債方式…元本残高に対して所定の料率で手数料を算出し、収益に計上する方法

9 ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理によっております。ただし、金利スワップの特例処理の要件を満たすものについては、特例処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段…金利スワップ取引

ヘッジ対象…変動金利建の借入金及び変動金利建の社債

(3) ヘッジ方針

当社の内規に基づき、金利変動リスクを回避する目的で、変動金利建の借入金及び変動金利建の社債に対して、金利スワップのデリバティブ取引でキャッシュ・フローヘッジを行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件がほぼ一致しており、かつヘッジ開始時及びその後も継続して、金利変動又はキャッシュ・フロー変動を完全に相殺するものと想定することができるため、ヘッジの有効性の判定は省略しております。

10 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異、未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、資産に係る控除対象外消費税等は、発生時に費用処理しております。

なお、未払消費税等は、貸借対照表上、流動負債の「その他」に含めて表示しております。

(3) 連結納税制度の適用

当社は、連結納税制度を適用しております。

(表示方法の変更)

＜「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更＞

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が37,632百万円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が36,068百万円増加しており、また「固定負債」の「繰延税金負債」が1,564百万円減少しております。

なお、同一の納税主体で「繰延税金資産」と「繰延税金負債」を相殺したことにより、資産合計、負債合計及び負債純資産合計がそれぞれ1,564百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解（注8）（1）（評価性引当額の合計額を除く。）に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

＜損益計算書関係＞

前事業年度において、「その他」に含めて表示しておりました営業外費用の「保険解約損」は、金額的重要性が高まったため、当事業年度において独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、営業外費用に表示していた「その他」95百万円は、「保険解約損」16百万円、「その他」79百万円として組み替えております。

(貸借対照表関係)

※1 偶発債務

(1) 信用保証業務の保証債務残高

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
保証債務	1,056,532 百万円	1,058,760 百万円
債務保証損失引当金	9,360 "	8,850 "
差引	1,047,172 "	1,049,910 "

※2 営業貸付金に係るコミットメントライン契約

前事業年度(2018年3月31日)

営業貸付金の契約形態は、主としてリボルビングによる契約(極度借入基本契約)であります。同契約は、一定の利用限度枠を決めておき、契約上規定された条件について違反がない限り、利用限度枠の範囲で繰り返し融資を行う契約であります。同契約に係る融資未実行残高は、359,685百万円であります。このうちには、同契約に係るカードを所持され、当期末に残高がない顧客の融資未実行残高193,858百万円を含んでおります。

なお、同契約は、融資実行されずに終了するものもあるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。

同契約には、顧客の信用状況の変化、その他相当の事由があるときは、当社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は利用限度枠を減額することができる旨の条項が付けられております。また、契約後も定期的に社内手続きに基づき顧客の信用状況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

当事業年度(2019年3月31日)

営業貸付金の契約形態は、主としてリボルビングによる契約(極度借入基本契約)であります。同契約は、一定の利用限度枠を決めておき、契約上規定された条件について違反がない限り、利用限度枠の範囲で繰り返し融資を行う契約であります。同契約に係る融資未実行残高は、386,385百万円であります。このうちには、同契約に係るカードを所持され、当期末に残高がない顧客の融資未実行残高217,588百万円を含んでおります。

なお、同契約は、融資実行されずに終了するものもあるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。

同契約には、顧客の信用状況の変化、その他相当の事由があるときは、当社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は利用限度枠を減額することができる旨の条項が付けられております。また、契約後も定期的に社内手続きに基づき顧客の信用状況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

※3 営業貸付金の不良債権の状況

消費者向無担保貸付金の破産債権については、破産決定時点で貸倒損失に計上しております。このため、破綻先債権には期末日現在で破産未決定の破産申立て債権等(全額貸倒引当金を計上)が含まれております。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
破産未決定の破産申立て債権等	308 百万円	275 百万円

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
破綻先債権	788 百万円	769 百万円
延滞債権	23,774 "	24,140 "
3ヵ月以上延滞債権	1,767 "	1,839 "
貸出条件緩和債権	30,582 "	31,302 "
合計	56,912 "	58,052 "

- (注) 1 破綻先債権とは、未収利息不計上貸付金のうち、破産更生債権等その他これらに準ずる貸付金であります。
2 延滞債権とは、その他の未収利息不計上貸付金であります。ただし、債務者の経営再建又は支援をはかることを目的として利息の支払を猶予したものを除きます。
3 3ヵ月以上延滞債権とは、上記以外のその他の3ヵ月以上延滞貸付金であります。
4 貸出条件緩和債権とは、上記以外の当該貸付金の回収を促進することなどを目的に、金利の減免等債務者に有利となる取決めを行った貸付金であります。

※4 当座貸越契約及び特定融資枠契約

当社は、運転資金の効率的な調達を行うため、金融機関と当座貸越契約及び特定融資枠契約を締結しております。この契約に基づく借入未実行残高は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
当座貸越極度額及び特定融資枠契約の総額	44,600 百万円	44,600 百万円
借入実行残高	— "	— "
差引額	44,600 "	44,600 "

※5 営業貸付金のうち個人向無担保貸付金の額

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
営業貸付金のうち個人向無担保貸付金	797,284 百万円	816,738 百万円

※6 割賦売掛金の事業別残高

割賦売掛金は、全て包括信用購入あっせんによるものであります。

(損益計算書関係)

※1 営業外収益には、関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
受取利息	63 百万円	38 百万円
受取配当金	3,154 "	3,433 "
受取保証料	3 "	— "
非常勤役員報酬	3 "	3 "
合計	3,224 "	3,475 "

※2 固定資産売却益の内訳

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物	4 百万円	344 百万円
車両運搬具	— "	0 "
器具備品	— "	0 "
合計	4 "	345 "

※3 固定資産売却損の内訳

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
構築物	— 百万円	1 百万円
器具備品	0 "	6 "
土地	6 "	250 "
合計	6 "	258 "

※4 固定資産除却損は、主として営業店舗の移転、改装並びに看板の変更に伴うものであり、内容は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物	79 百万円	107 百万円
構築物	44 "	63 "
器具備品	14 "	13 "
電話加入権	0 "	— "
合計	138 "	185 "

※5 特別損失のその他の内訳

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
長期前払費用一時償却	— 百万円	0 百万円
敷金保証金償却等除却損	2 "	1 "
ゴルフ会員権売却損	0 "	0 "
合計	2 "	1 "

6 金融収益及び金融費用の損益計算書上の表示区分の基準

(1) 営業収益として表示した金融収益

関係会社に係る貸付金利息及び受取配当金、投資有価証券受取配当金及び利息等を除くすべての金融収益

(2) 営業費用として表示した金融費用

明らかに営業収益に対応しない支払利息等を除くすべての金融費用

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度 (2018年3月31日)

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	5,365	7,682	2,316
関連会社株式	—	—	—
合計	5,365	7,682	2,316

当事業年度 (2019年3月31日)

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	6,572	9,277	2,704
関連会社株式	—	—	—
合計	6,572	9,277	2,704

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式

(単位: 百万円)

区分	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式	14,365	14,365
関連会社株式	500	500
合計	14,865	14,865

上記については、市場価格がありません。したがって、時価を把握することが極めて困難と認められるものとあります。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒損失	16,880 百万円	19,499 百万円
貸倒引当金	7,491 "	7,280 "
債務保証損失引当金	2,866 "	2,709 "
利息返還損失引当金	31,865 "	31,324 "
未払賞与	481 "	437 "
未収利息不計上	485 "	499 "
ソフトウェア	3,168 "	3,604 "
繰延資産	349 "	282 "
繰延消費税等	362 "	353 "
有価証券評価損	170 "	163 "
関係会社株式評価損	1,034 "	1,034 "
未払事業税	269 "	391 "
減損損失	255 "	255 "
資産除去債務	1,156 "	1,099 "
株式配当金	3,493 "	3,493 "
税務上の繰越欠損金	126,226 "	99,976 "
その他	385 "	395 "
繰延税金資産小計	196,946 "	172,802 "
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	— "	△93,650 "
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	— "	△40,560 "
評価性引当額小計	△159,313 "	△134,211 "
繰延税金資産合計	37,632 "	38,591 "
繰延税金負債		
前払年金費用	1,550 "	1,671 "
その他	13 "	— "
繰延税金負債合計	1,564 "	1,671 "
繰延税金資産の純額	36,068 "	36,919 "

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.9 %	30.6 %
(調整)		
評価性引当額の増減	△51.5 %	△73.9 %
のれん償却額	0.4 %	0.7 %
受取配当金等の永久に益金に算入されない項目	△3.0 %	△3.0 %
外国子会社配当金に係る源泉所得税	0.7 %	0.6 %
繰越欠損金期限切れ	24.4 %	57.9 %
その他	0.8 %	0.5 %
税効果会計適用後の法人税等の負担率	2.7 %	13.4 %

(重要な後発事象)

＜連結子会社株式の売却＞

当社は、2019年3月15日開催の取締役会決議に基づき、連結子会社PT. Bank Nusantara Parahyangan, Tbk. の株式を、2019年4月29日に株式会社三菱UFJ銀行が実施したキャッシュオファーに応じ、全株式売却いたしました。

なお、本株式売却により、翌事業年度において、関係会社株式売却益として10,824百万円の特別利益の計上を見込んでおります。

詳細は、「第5〔経理の状況〕 1〔連結財務諸表等〕（1）〔連結財務諸表〕〔注記事項〕（重要な後発事象）」に記載のとおりであります。

④ 【附属明細表】

【有価証券明細表】

【株式】

銘柄			株式数(株)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資有価証券	その他有価証券	(株)日本信用情報機構	24, 234	737
		小金井ゴルフ(株)	1	40
		その他 (22銘柄)	1, 122, 454	43
計			1, 146, 689	821

【その他】

種類及び銘柄			投資口数等(口)	貸借対照表計上額 (百万円)
投資有価証券	その他有価証券	投資事業有限責任組合出資金(1銘柄)	5	1
計			5	1

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	23,147	178	3,764 (457)	19,561	16,713	424	2,847
構築物	3,848	60	497 (5)	3,411	2,744	86	667
車両運搬具	2	—	2	—	—	—	—
器具備品	18,351	228	470 (0)	18,109	9,139	592	8,969
土地	6,109	—	2,986 (2,337)	3,123	—	—	3,123
リース資産	3,992	257	119	4,130	2,868	552	1,261
有形固定資産計	55,453	725	7,842 (2,800)	48,336	31,466	1,656	16,869
無形固定資産							
のれん	12,008	—	—	12,008	8,758	813	3,250
借地権	4	—	—	4	—	—	4
ソフトウェア	11,209	654	—	11,863	7,270	1,956	4,593
電話加入権	36	—	—	36	—	—	36
その他 (特定通信回線利用権他)	13	—	—	13	12	—	1
無形固定資産計	23,272	654	—	23,926	16,040	2,770	7,886
長期前払費用	3,492	995	584	3,903	1,983	30	1,920

(注) 「当期減少額」欄の()は内数で、当期の減損損失計上額であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額		当期末残高 (百万円)
			目的使用 (百万円)	その他 (百万円)	
貸倒引当金	58,100	57,434	56,116	17	59,400
債務保証損失引当金	9,360	8,850	9,360	—	8,850
利息返還損失引当金	104,068	39,479	41,248	—	102,300

(注) 貸倒引当金の「当期減少額(その他)」欄の金額は、次のとおりであります。

入金による取崩 17百万円
ゴルフ会員権貸倒引当金戻入益 0百万円

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	—
買取手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。なお、電子公告は当会社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。 https://www.acom.co.jp
株主に対する特典	特にありません

(注) 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができません。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当社には、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- (1) 発行登録追補書類（普通社債）及びその添付書類

2018年8月23日関東財務局長に提出

- (2) 訂正発行登録書

2018年6月25日関東財務局長に提出

- (3) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度 第41期（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）2018年6月22日関東財務局長に提出

- (4) 内部統制報告書

2018年6月22日関東財務局長に提出

- (5) 四半期報告書及び確認書

第42期第1四半期（自 2018年4月1日 至 2018年6月30日）2018年8月14日関東財務局長に提出

第42期第2四半期（自 2018年7月1日 至 2018年9月30日）2018年11月14日関東財務局長に提出

第42期第3四半期（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）2019年2月14日関東財務局長に提出

- (6) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書

2018年6月25日関東財務局長に提出

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月19日

アコム株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	鈴木	泰司	印
--------------------	-------	----	----	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	淡島	國和	印
--------------------	-------	----	----	---

＜財務諸表監査＞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているアコム株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、アコム株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、アコム株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、アコム株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月19日

アコム株式会社
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	鈴	木	泰	司	Ⓜ
--------------------	-------	---	---	---	---	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	淡	島	國	和	Ⓜ
--------------------	-------	---	---	---	---	---

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているアコム株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第42期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、アコム株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

※1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【会社名】	アコム株式会社
【英訳名】	ACOM CO. , LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長兼会長 木 下 盛 好
【最高財務責任者の役職氏名】	—
【本店の所在の場所】	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役社長木下盛好は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の改訂について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものです。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠いたしました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を実施いたしました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当社及び連結子会社5社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。なお、上記以外の連結子会社及び持分法適用会社については、金額的及び質的重要性の観点から僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の連結会計年度の営業収益（連結会社間取引消去前）の金額が高い拠点から合算していき、概ね3分の2に達している事業拠点を「重要な事業拠点」として選定いたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として営業収益、営業貸付金及び借入金、社債といった資金調達に関連する科目に至る業務プロセスを評価の対象といたしました。さらに、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

該当事項なし。

5 【特記事項】

該当事項なし。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【会社名】	アコム株式会社
【英訳名】	ACOM CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長兼会長 木 下 盛 好
【最高財務責任者の役職氏名】	—
【本店の所在の場所】	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役社長木下盛好は、当社の第42期(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。